

金の義眼

茅々斎かちかち 著

騏驎(きりん)は天下の良馬、蹇驢(けんろ)は足のなえたロバ。千里の旅をするのに、騏驎を殺して蹇驢にまたがる者はいない。斉(せい)の国が内外ともに多難なときに、皇帝が乗る唯一無二の名馬であった楊愔(よう いん)が殺されて、他の者が代わった。「まさに千里を涉(わた)らんとするに、騏驎を殺して蹇驢に策(むちう)つとは、悲しむべきことの甚だし」と人は嘆いた。

楊愔は要職にあること二十余年、国家の機微に深く関わって誤ることがなかった。筆を下ろせば敵国の皇帝が讚嘆する名文を記し、皇帝の詔(みこと)のりを読み上げる声は穏やかでありながら自ずからなる威厳によつて百官を畏服せしめ、有用な人材を登用するのを己の任として、誰を採用しいかなる地位を与えるのか、人の言動をよく観察して最も適切に決めた。家柄が重んじられ、縁故が幅をきかせる時代にあつて、楊愔のやり方は、貧乏人が市場で大きい瓜を選つて買うのと同じだと皮肉られた。高い位に昇つてからは私的な交わりを避け、皇帝からの賜わりものは惜しみなく人に与え、我がものといえは数千卷の書物だけだった。皇帝の姉の再婚相手選ばれ、その婿に

ふさわしい華麗で荘重な衣服を身に着けた姿を友人に見られたときには、下を向いてすこぶる恥ずかしげであった。

皇帝に誠心誠意尽し、騏驎として誰からも認められていたのに、なぜ楊愔は殺されなければならなかったのか。理由は一つしかない。皇帝に忠節であり過ぎたからだ。

前篇 一門の貴頭は数十を超ゆ

楊愔は、名門の貴公子だった。

* * *

楊愔が生まれたとき、伯父の楊播（ようはん）、楊椿（ようちん）、父の楊津（ようしん）など一世代上の者は揃って国家の要職にあり、同世代の従兄弟も、楊椿の子の楊昱（よういく）を筆頭に、多くの者がそれぞれに地位を得て、一族がさらに繁栄して行く基盤はいよいよ強固であった。楊播の子の楊侃（ようかん）は、従兄弟のなかで最年長でありながら、独り家郷より出ずにいた。琴と書物を愛し、出仕を勧められると、「良田がすでにあり、この先の暮らしに困りはしません。恨むべきは自分に能のないことです」と応じた。

楊一族の絶頂期は楊愔が十八歳のときであった。絶頂の後には衰亡が来る。

楊一族の場合は絶頂すなわち破滅であった。

楊愔のこの物語は絶頂への道から始まる。数多の一族のなかから、三組の父子、楊播と楊侃、楊椿と楊昱、そして楊津と楊愔についてのみ記す。

楊一族は魏ぎの朝廷に仕えた。魏と称する国は古来多数あり、他と区別するため「北魏」と呼ぶ。「北」を冠するのは、ときは南北朝時代で、中国は、洛陽らくようを都とする魏と、建康けんこう、南兖なんけんを都とする梁りように分れていたからだ。

北魏は鮮卑せんび族の拓跋たくばつ氏が建てた王朝だ。鮮卑族はもとは北方の遊牧民で、なかでも拓跋氏は戦に強く、他民族や、自民族の他の部族との競り合いに勝つて南進し、黄河中・下流域を制して、都を洛陽に移した。北魏は鮮卑族の伝統に固執するのではなく、漢族の中華文明を積極的に取り入れる「漢化改革」を押し進めた。漢族の有力者層、すなわち漢族士人を政権に取り込んで、武に優れる鮮卑族の下に、文に優れる漢族士人を置くことで、国家を盤石なものにしようとした。

楊一族は早くから北魏に仕えることを選んだ漢族士人である。当時は家柄の序列がやかましくいわれ、范陽(はんよう)の盧(ろ)氏、清河(せいが)の崔(さい)氏、滎陽(けいよう)の鄭(てい)氏、太原(たいげん)の王氏の四姓が最高とされた。楊一族は、それらに次ぐ弘農(こうのう)の楊氏であると自称した。楊一族は、北魏の発展とともに自らを繁栄させ、都の洛陽と、家郷と自認する弘農の華陰(かいん)に大きな邸宅を構えた。華陰は洛陽の西方にあつて、長安(ちやうあん)との中間に位置する。洛陽の楊氏を東族、華陰の楊氏を西族と呼び習わした。

漢族士人がどれほど北魏の発展に重要な貢献をしても、鮮卑族が支配者で漢族が被支配者であるという構図は揺るがなかった。漢化改革が始まったころに、清河の崔氏の出である催浩(さいこう)という人物がいた。時の皇帝は、鮮卑族の將軍達の前で、いかなる大兵団よりも催浩の頭脳の方が国家にとつて重要であると言いつつ切った。それほど重んじられていながら、催浩が中華文明の伝統に則つて国の歴史を事実のままに記すと、皇帝は鮮卑族を不当に貶

めたと激怒し、催浩を殺した。刑は催浩一人に留まらず、催浩の一族全体にも、それと姻戚関係のあった幾つかの名族にも及んだ。それは楊愔が生まれる六十年ほど前の事件であった。名族に生まれたために、かえって危うい人生が待っているというのが実際のところであった。

楊愔は、国の衰亡が始まったところに生まれた。

* * *

ときの皇帝は元恪(げん かく、宣武帝)であった。楊愔の誕生は永平四(五一)年、その前の年に、皇帝と胡(こ)氏との間に、皇子の元詡(げん く、孝明帝)が生まれていた。皇帝は、皇子を別宮に置き、生母である胡氏にも、皇后である高(こう)氏にも近づくのを禁じた。

鮮卑族の王朝には特異な伝統があった。皇帝の跡継ぎである皇太子が決まると、皇太子の生母に死を与えた。生母やその一族が政治に介入するのを防

ぐためだ。

元恪の父は北魏きつての名君とされる孝文帝（拓跋宏（たくはつこう）である。孝文帝の生母も子が皇太子になったときに殺され、孝文帝は祖母に当たる馮（ふう）太后の子として育てられた。孝文帝は五歳で皇帝になり、実権を握る馮太后のもとで、国家運営の要諦を教わりつつ成長した。孝文帝の後宮の林（りん）氏が恂（じゅん）を生むと、馮太后はその母を殺し、皇子を自分の子として育てた。

馮太后が死ぬと孝文帝は悲しみのあまり食事が一切とれなくなった。皇帝の身体が衰弱し始めたのを見て、

「孝子として万代に御名が残りましようが、世々続いて来たこの国をどうなさるおつもりですか」。

と、諫めたのが楊愔の伯父の楊椿であった。皇帝はその言葉に心を動かさず、粥を口に運んだ。楊愔が生まれる二十一年前で、楊椿は三十六歳、孝文帝は二十四歳だった。

その三年後、孝文帝は、鮮卑族の皇族や重臣が挙って反対するのを押し切つて、洛陽遷都を断行した。新首都の建設を進めると同時に、孝文帝は三十万と号する大軍を率いて南朝征伐に向かった。淮河（わいが）を渡ったところで敵の頑健な抵抗に遭い、退却を余儀なくされた。

そのときに殿（しんがり）を志願したのが楊愔の伯父の楊播だった。楊播は、歩卒三千、騎兵五百で大河の南岸に残った。敵の大軍が押し寄せて来ると、楊播は横に陣を張り、自軍が川を渡り終えるまで敵の攻撃に耐えた。全ての自軍が岸辺を離れたのを見て、楊播は円陣に組み直した。戦い続けること二晩、食糧が尽き、体力も限界に達した。向こう岸に渡った皇帝は楊播を助けたくても、川には敵の軍船三百艘が浮かび手が出せなかった。もはやこれまでもと誰もが覚悟を決めたときに、滔々と流れていた大河がにわかにな水を減じた。敵船は自由を失い、水のある場所を求めて去った。楊播は馬にまたがり、「これより川を渡る。戦いたい者はかかつて来るがよい」。

敵軍に向かつて叫び、川に乗り入れた。その楊播の勢いに、遠く敵は見守

るばかりであった。楊愔が生まれる十六年前だ。

楊一族の子弟は漢族士人として当然のこととして学問を身に付けた。それと同時に、鮮卑族に伍して行くには武にも優れなければならぬと、武術の鍛錬も怠らなかつた。楊播は弓の名手として孝文帝から賞を受けもした。

孝文帝は歴代皇帝のなかで最も漢化改革を徹底させ、皇室の姓である拓跋を中国式の一文字の元(げん)に改め、他の鮮卑族にも改姓を命じた。さらに、鮮卑の言葉を禁じ、漢人の言葉を使うよう求めた。鮮卑族のなかには不満を抱き抵抗する者も少なからずいたが、孝文帝は卓抜した指導力で北魏を大きく変貌させた。そのような優れた父に反発したのか、単に愚かだったのか、太子の恂には不埒な振る舞いが目立った。諫める教育係に刀で斬り付けるに及んで、父は太子を廃し、死を命じた。代わって太子に選ばれたのが元恪だった。それと同時に元恪の生母の高氏が殺された。

孝文帝は三十三歳の若さで死に、元恪は十四歳で皇帝になった。孝文帝の死が早すぎたために、皇帝元恪の伯父に当たる高肇(こうけい)が政治に乗り

出して来る隙が生じた。

元恪が即位して二年後に于(う)皇后が男子を生んだ。その皇子は三歳で死に、時を同じくして于皇后も死んだ。不可解な死に、高肇が殺したのではないかと噂された。高肇の姪が新しい皇后になり、男子を生んだ。その子も夭没し、他に宮中の幾人かの女が生んだ男子も全て育たず、母もまた相次いで死んだ。

このようなありさまであったから、胡国珍(ここくちん)の娘が皇帝に召されたときに、父は娘の身を案じ、

「太子となるような男の子だけは決して生んでくれるな」。

と、言った。娘は、

「たとえ私が死ぬとも、国に跡継ぎがなくてすみませうか」。

胡氏は決然と後宮に入った。

胡氏が妊娠すると、まわりの女たちはこっそりおろすよう勧めた。

「男子を生んで私が死ぬのはもとより望むところですよ」。

このようにして胡氏が出産したのが、楊愔よりも一年早くに生まれた元詡であった。元詡は胡氏からも高皇后からも離されて別宮で育てられ、一年七カ月を無事に過ごし、皇太子となった。皇帝は胡氏を殺さず、魏国で初めて皇太子の母として生き長らえることができた。

その次の年に、楊愔の伯父の楊播が死んだ。楊播は不幸にも数年前にある嫌疑によつて官爵を削られていた。要路にある者は嫉妬や怨恨によつて足元を掬われることが多く、そうでなくても、漢族士人は理不尽な目によく遭わされた。息子の楊侃は、父の名誉が回復されるまで父の柩を葬らずに、父の無実を朝廷に訴え続けた。その努力が稔り、父に授けられていた華陰伯の称号が復活して楊侃に授けられた。楊侃は三十一歳で家郷を出て、以後、目覚ましい働きをした。

楊愔は、幼少のころは愚鈍と見られた。

* * *

延昌二(五四)年、楊愔が四歳のときに父の楊津は、定(てい)州刺史から華(か)州刺史に転じた。刺史は知事職に当たる。定州は黄河を越えて都からやや遠い北の町で、華州は洛陽からも長安からもほぼ等距離の近場である。楊一族の根拠地である華陰の目と鼻の先でもある。

華州では、税として取り立てる絹を測るのに、通常よりも長い物差しを使っていた。一尺を納める決まりであっても、その物差しを使うと実際には一尺一寸を納めなくてはならないといった具合だ。ただし、役人は賄賂を得ると正しい物差しを使い、賄賂が多額なら逆に短い物差しを使った。楊津は正しい物差しだけを用いるようにした。民衆は、出鱈目な計量に対するせめてもの抵抗として、絹の質を落として税を納めていた。楊津は民衆が納める絹を検分し、質の悪い物を持って来た者を罰するのではなく、質のよい物を持って来た者に一杯の酒を与え、人々の前で称賛した。民衆は楊津から酒を与えられないのを恥とし、品質のよいものを納めるようになった。結果として

華州の税収は増加した。

このころは貨幣がまだ十分に普及しておらず、絹が貨幣の代わりであった。民衆から取り立てた絹は都に送られ、平和の続く北魏の国庫には入り切らないほどの絹が積み上げられた。

* * *

延昌四（五五）年春、皇帝の元恪が死んだ。高皇后は、皇帝が皇太子の生母を殺しておかなかったのを大いに悔やみ、慌てて宦官の劉騰（りゅうとう）に「胡氏を殺せ」と命じた。劉騰は従わずに胡氏に近い人々に報せたので、胡氏は死なずにすみ、高皇后は尼となって仏寺に逃れた。長らく国家の実権を握っていた高肇は、皇帝の棺の前で哭して下がった宮殿の外で、待ち伏せていた者に絞め殺された。新たに即位した元詡はまだ六歳で、胡氏が皇太后として国家に君臨した。胡氏の父の胡国珍は位を大いに入れ、劉騰も重く用いられた。

胡太后は意志が強く才気溢れる女性であった。国家の重要文書を自ら読み、

自ら筆を執つて決済した。胡太后のもと、北魏は絶頂期を迎え、都には使つても使い切れない富が溢れた。胡太后はその多くを仏寺の建設に投じた。鮮卑族は早くから仏教を奉じ、北魏の朝廷は一時期の例外を除いて仏教を手厚く保護した。胡太后の時代に洛陽の仏寺は千三百を数えるまでになった。

とくに胡太后が建立を命じた永寧寺には高さ九十丈の九層の塔が聳え、仏殿は宮城で最大の太極殿に匹敵する規模であつた。西域から来て嵩山（そうざん）の少林寺で九年間壁に向かつて坐禪をしたと伝えられる菩提達磨（ぼだいだるま）は、洛陽に初めて来たときに、永寧寺のあまりの荘厳さに強く胸を打たれたという。

胡太后は、ある日、宮殿の一隅に絹を高々と積み、百余人の近臣を集めて言った。

「自分の力で背負えるだけ自由に持つて行くがいい」。

札束を好きだけ担いで行けと言つたのに等しい。胡太后は人の本性を見ようとしたのか、人々は目の色を変えて絹の山に飛びついた。欲張つて担ぎ

すぎて腰を痛め足を損なった者がいて、衆人の笑いものとなった。一方で手に一束ずつしか持たない者もいてその寡欲が賞された。

蓄財の近道は身入りのいい官職に就くことだ。官職の数は限られていたから、官人の選抜には不満が付き物であった。皇族やそれに近い者は初めから特別に高い地位を約束されているからいいようなもの、そうでない者は鮮卑族の良家の子弟であっても官職を獲得するために争わなければならないかった。魏はその由来からして武人優位の軍事国家で、鮮卑族出身者は基本的に武人であった。漢化改革が進行するにつれて文官が重視されるようになっていくと、鮮卑系の武人も文官の職をさかんに求めた。

張彝（ちよう い）という漢族の老高官は、武人が無闇に官職を求め、幸運にもそれを得ると、法のいろはを無視して、ひたすら収奪に走るのをかねてから嘆いていた。その息子は勇敢にも、武人の抑制策を胡太后に提案した。武人は怒って張彝の屋敷に押し掛け、瓦や石を投げ入れ、「息子を出せ」と騒いだ。朝廷はこれを静観した。武人の横暴は問題ではあっても、魏王朝の支配

力の源泉は鮮卑族の有する武力にあったから、介入しにくかったのである。武人は調子に乗って屋敷に乱入した。火を放ち、張彝を引つ張り出して鞭で打った。息子の一人が命乞いをする、殴って火の中に投げ入れた。張彝は受けた傷のために二晩苦しんで死んだ。朝廷も事ここに至っては動かざるを得ず、最も乱暴であった八人を捕えて処刑した。ただ、武人が文官の職を求め、最も乱暴であった八人を捕えて処刑した。ただ、武人が文官の職を求めることはそのまま容認した。ある知恵者が、人の賢愚によらず、待つている期間が長い順に官職を与える方式を編み出し、はなはだ有能であると喜ばれた。

このとき、高歓（こう かん）という若者がはるか北方の辺境の地、懷朔（かいしやく）鎮から洛陽に来ていた。

北魏が洛陽に都を移すまで北方こそが国の中心であったのだが、遷都後は国の発展から取り残されてしまった。辺境の地のさらに北には広大な草原地帯があり、柔然（じゅうぜん）国があった。柔然国はかつての拓跋氏のように軍事的に優れた。北魏は北への守りとして、辺境の地に沃野（よくや）鎮、懷朔

鎮、武川（ぶせん）鎮、撫冥（ぶめい）鎮、柔玄（じゅうげん）鎮、懷荒（かいこう）鎮の六つの軍事拠点を置いた。これを六鎮（りくちん）という。当初、六鎮を統治する鎮将は朝廷の重臣から選ばれ、六鎮を守る兵士である鎮兵は鮮卑族の優れた家の子弟が多かった。数十年の間に、鎮将には中央で活躍できない劣った者が選ばれるようになり、代々の鎮兵は辺境の民として賤民視されるまでになった。六鎮が犯罪者を流す場所となったことも、その地の民を見下す傾向に拍車をかけた。中央から六鎮に派遣された鎮将は、六鎮の民を何らためらいなしに虐げ、職権で懷を膨らまして早く都に帰ることばかりを考えるのだった。

六鎮の民が貧しいなかでも、高歡の家は特にはなはだしく、極貧の少年期を送り、辺境の地を転々とした。懷朔鎮に流れ着いてお上の労役にありつき、どうにかこうにか食いつないでいた。あるとき、平城（へいじょう）というもととは北魏の都であった町に駆り出されて働いていると、婁（ろう）氏という金持ちの商人の娘が通りかかった。娘は高歡に目を止めると、何を思ったの

か一目散に家に帰り、手当り次第に高価な品々を持ち出して高歡に与えた。

「これを使つて私を嫁として迎えて下さい」。

高歡は婁氏を妻にして初めて自分の馬を所有できた。その馬を使つて都に手紙を運ぶ仕事を請け負い、あわよくば一旗揚げてやろうと上京した。

高歡は張彝が殺された事件を間近に見て、すぐに北に帰った。

「いまの朝廷の様子からこの先は知れた。国でさえも守れなくなるだろう。いくらもない我が財産など守れやしない。人との交わりを結んで真の財産とすべきだ」。

そのように言う夫の言葉を婁氏は喜び、父から財貨を得ては夫に渡し、任侠者との交際に使わせた。

* * *

このころ楊津は妻を喪い、幼い楊愔は父とともに郷里の華陰に帰った。一族が集まって暮らす華陰には、楊愔と年齢の近い子もいたが、楊愔は子供たちが遊ぶなかに入らず、いつもぼつんと一人ぼっちであった。大人が話しか

けても、ぼんやりとした返事がたまにあるだけで、ほとんど口をきかなかつた。

楊一族は屋敷のなかに子弟を教育する私塾をつくり、子が六歳になるとその学館に入れた。父は楊愔を学館に託して新たな任地に向かった。

楊愔は学館でも他の子と交わらず、部屋の一番の隅を自分の居場所とし、小さな体をさらに小さくしていた。皆が声を揃えて書物を読み上げても口を閉ざしたままで、教師の問い掛けに自分から答えることはなかった。強いられてやむなく物を言うときも、はなはだはつきりしない口のきき方だった。武術の鍛錬に連れ出されると、気のない様子でぼんやり突っ立っていた。

このような楊愔であったから、楊家の子としてまことに心もとなく、親類の者は、

「あれはものになるまい」。

と、眉を顰め、父の楊津に、

「死ぬような目に遭わせてでも厳しく鍛えなければいけない」。

と、書簡を送った。父は、

「兄も二人いることですし、あれ一人くらいはよろしいでしょう」

と、楊愔はそのままに置かれた。

楊愔は、少年のころ、にわかになにに褒められるところとなり、奇異に感じた。

* * *

神龜二（五二九）年、楊愔の従兄の楊昱、すなわちは楊椿の息子は、ひそかに胡太后に尋ねられた。

「我が親族が外で怪しからぬことをしているとそちは聞かぬか。我がまわりの者は耳に入れまいとしているようだ。そちの家は代々朝廷に仕え悪事をしたとは聞かぬ。我が親族によくない行為があるのならば、隠さず教えてくれ」。

問われたのが楊昱でなければ、「一切聞いておりません。どなた様も高潔な

お方ばかりです」と、胡太后を喜ばせたであろうが、楊昱は幾つかの不祥事をありのままに告げた。その一つに元叉（げん さ）が関係していた。元叉は皇族で、胡太后の妹の夫で、要職にあった。

胡太后は、妹と元叉を厳しく叱った。必ず振る舞いを改めよと涙ながらに諭す太后に、二人は懸命に謝ったので、太后は処罰しなかった。元叉は楊昱を恨み心に復讐を誓った。

楊昱が、皇族といえども悪行に見て見ぬ振りができないのは仕官の初めからだった。最初に皇族の一人の元懐（げん かい）に仕えた。元懐は武事を好み、頻繁に獵を行って農民を困らせた。楊昱は諫めたが、元懐は耳を貸さなかった。元懐の放縦は度を超え、ついには死罪となり、家臣三十余人が同時に処刑された。楊昱は常に元懐を諫めていたことから罪を問われなかった。

元叉は、楊昱を痛めつけてやろうと、同じ皇族の元和（げん か）を仲間引き入れた。元和の妹は、楊昱の叔父の楊舒（よう じよ）の妻であった。楊舒は先ごろ死に、妻の元氏は楊家からの離縁を求めた。漢族と鮮卑族とでは女性

の再婚に対する考えが異なり、漢族の間では、夫が死んでも妻は夫の家に留まるのが普通であるのだが、鮮卑族の間ではそうではなく、再婚も再々婚も珍しくない。楊椿は一家の主として、元氏に道理を説き、涙まで流して、離縁を思いとどまらせようとした。元氏は渋々楊一族の間に残つてはいたが、楊椿はわからず屋だと恨んでいた。

ここに劉宣明（りゅう せんめい）という者が謀反を企て、未然に発覚して逃亡するという事件が起こった。元又は元和兄妹をそそのかし、楊昱が劉宣明を匿い、楊椿、楊津とともに大規模な反乱を準備していると朝廷に訴えさせた。元又は五百人の兵を率いて洛陽の楊家の屋敷を囲み、楊昱を捕え、家宅捜査を行った。反乱の証拠となるような物は一切何もなかった。胡太后は楊昱を尋問して事実無根であると確信し、虚偽の訴えをしたとして元和兄妹に死刑を言い渡した。しかし、すぐにそれを取り消し、元和を免官とし、妹はお咎めなしとなった。元又は何も問われなかった。

元又はの企み通りに事が運んでいたならば、楊津も反乱に加担したとされて

死罪になり、楊愔は九歳にして、母に続いて父までも喪いかねないところであつた。

* * *

楊愔は十一歳で『詩経』を習い始めた。

ある日、亡き母の弟の源子恭（げん しきょう）が華陰の屋敷に来て学館をのぞいた。いつものように隅っこにちんまり座っている楊愔に、

「ほう、『詩経』を勉強しているのか。何か覚えたものがあるか」。

楊愔は、いつも通りのはつきりしない顔で、源子恭を見上げた。源子恭は、なるほど噂通り、この子はものになるまいと思つた。

楊愔は何も言わず、のっそり立ち上がった。うつろな目で、いかにも気のなきように、小さな声で一つの詩を吟じ始めた。一語、二語、三語と、次第に感情が籠り、楊愔の表情が俄かに改まった。朗々と声が響きわたり、そして震えを帯びた。詩の終わりに至つて楊愔は泣き、源子恭も泣いた。

それは「渭陽（いよう）」という詩だつた。亡き母の弟に向けた送別の詩で、

亡き母を偲ぶ詩でもあった。

二人が泣くありさまに学館の人々は驚きの目を向けた。源子恭は涙を拭い、人々に向かって言った。

「あの子はろくろく口もきけず、利口ではないと皆が言っているらしいが、これからは括目して視なければなるまい」。

楊愔はそれを聞いて奇異に感じた。

源子恭はなかなか骨のある人物で、これより数年前に、ある反乱を死者を出さずに平定した。鎮圧を命じられて現地赶赴くと、兵士に向かって動いてはならぬと厳命し、民衆が反乱を起こした事情を調べ、首謀者と話し合つて教諭し、平和裏に鎮めた。反乱の勃発から二十日足らずであった。

源子恭が民情に通じて事を解決に導くのは父親譲りであった。源子恭の父、つまりは楊愔の母方の祖父である源懐(けん かい)は、北辺の六鎮に派遣された際に、民衆が疲弊しているありさまに心を痛め、国の倉を開いて飢民を救った。また、六鎮の将軍が賄賂を貪つてやまないのを糾弾した。それは楊愔

が生まれる一〇年ほど前のことで、源懐の後には同様の行いをした者がなく、六鎮の民は容赦ない収奪にさらされるままとなった。

源子恭は、胡太后が仏寺の建立やその他の土木事業に民を使役するのを諫めたこともあった。

華陰の学館の前には柰(からなし)の大木があった。実が熟して落ちる時季になると、子どもたちは争って拾った。そのなかに楊愔は加わったことが一度もなかった。

末の叔父がその様子を見て、

「この子の欲のなさは、まさしく我が一族の家風である」。

と、感嘆し、客が訪れると自慢の種とした。

楊愔はそれを聞いて、やはり奇異に感じた。

楊愔は、学館で他の子と話すこともなく、常に一人で書物を読んでいるばかりであったから、一族の大人は小さな一室を作って楊愔に与えた。竹林が近くにあり、竹の香りと葉音に包まれると、楊愔の心ははなはだ落ち着き、

書物がいままで以上にすいすい頭に入るようになった。二度読むと大概のことは意味が知れ、三度読むと暗唱できた。

楊愔の勉学の進捗の速さに大人達は感心し、特別に銅の食器に盛った食事を楊愔のその小部屋に届けるようにした。

「愔のように一生懸命に勉強すれば、自分一人の別室が与えられ、人とは別の食事を作ってもらえるようになる」。

大人は、そのように言って他の子を督励した。

楊愔はそれを聞いてやはり奇異に感じた。

都での大難を免れた楊昱は、その後、久し振りに華陰に帰って来ると、楊愔を見てはなはだ喜んだ。

「この子は、十年もすれば千里の外を翔けるようになるだろう」。

それはこれまで以上に奇異であった。「千里の外を翔ける」とは、おそらく天下に名を馳せるという意味であろう。

楊昱が家郷にいと聞いて、近在の名士が集まって、詩を賦す会が催され

た。楊昱は楊愔を同席させた。人々が詩を思案する間、楊愔は所在なくうなだれていた。

皆が詩を書き終えると、楊昱は、詩稿を集めるよう楊愔に言った。楊愔は身を小さくして人々の間を一巡して楊昱に渡した。楊愔が自分の場所に戻ると、誰そのの詩を朗読せよと、楊昱が命じた。人々は驚いた。楊愔は集めつつわずかに一瞥したかどうかというところだった。楊愔は何のためらいもなしにすぐに吟じた。人々は己の耳を疑った。

「この通りでありましたか」。

楊昱が詩の作者に尋ねた。

「二字の誤りもありません」。

楊愔は全ての詩を命じられるままに順に吟じた。

「これは我が一門の宝物です。たとえ全ての良田を我等が失うことがあつても、この子が一人いれば、心配することはありません」。

楊昱がそのように誇るのを、楊愔はまたしても奇異に感じた。楊愔にして

みれば、皆から愚かしいと見なされていたところ、自分は少しも変わっていないからだ。

* * *

楊一族は元又のために危うい目に遭わされたことから、振る舞いにいままです以上に気を付けるようになった。胡太后や皇族から徐々に距離を置き、どの勢力とも親しく交わらないようにした。

楊愔の父の楊津は、都から遠く離れた肆（し）州に転出となった。肆州は、六鎮の一つである柔然鎮と洛陽を結んだ中間点よりも北に位置し、漢人の少ない地域である。近隣の秀容（しゅうよう）郡には、遊牧の民であったころの鮮卑族の気風を色濃く残す人々がいて、統治の難しい地域とされていた。朝廷は部族の酋長を刺史に任命して間接的に統治するというかたちをとっていた。秀容郡で代々酋長を世襲して来たのが爾朱（じしゅ）氏で、非常に固い結束を誇っていた。

楊津は、十歳を超えたばかりの楊愔を肆州に連れるのをためらい、楊愔の

華陰暮らしはなおしばらく続いた。

この時代は漢化改革が進んだとはいえ、深刻な民族間の抗争は解消するに至っておらず、また貧富の差も大きかったことから、楊家のように財産を保有する名門は必ずある程度の自衛の手段を具えていた。屋敷は土塁で囲まれて、いざというときには武器を持って戦う者がいた。一つの屋敷に何家族もが寄り集まって住むのは自衛上の意味もあった。屋敷内には楊姓の者だけでなく、それよりも多数の異姓の使用人がいた。楊愔はそのような人々とはあまり接触がなく、ただ書物を友として日々を過ごした。

楊愔は、青年期になっても、現実との折り合いがうまく付けられなかった。

* * *

胡太后の妹婿の元叉には、元憚（げん えき）という競争相手がいた。元憚も皇族で、なかなかの才人で、物腰が柔らかくて人に好かれ、その上、美男子

だった。胡太后はまだ若く、秘かに元憚を夜の床に近づけているとの噂もあった。元叉にとつてまことに気になる存在であった。

このころ、邢邵(けい しょう)という若者の作る詩文が都で大層な評判となった。邢邵は五歳のころにさる学者から拔群の才能があると認められ、十歳を過ぎるまでは都で熱心に勉強をしていた。ところがいつしか放浪の旅に出て、どこで何をしているのか親も知らないほどであった。あるとき長雨で道が塞がり、邢邵は無聊のまま『漢書』を繙いた。漢代の歴史を記録した史書である。思いの他におもしろく、たちまち読み終えると、ほぼ暗唱できるまじになった。ふと思いが兆し、試しに詩を作ってみると、すらすらと句が浮かんだ。文を試すと何でも自在に書けた。都にふらりと戻り、その詩文を人々に示すと、皆が争って読んだ。いわゆる洛陽の紙価を高めたというわけだ。

元憚は邢邵を招き、大事な文章の代筆を頼み、できたものを鼻高々で人に見せた。元叉も負けまいと、同じことをした。邢邵は頼まれれば何でも書き、あちこちの貴人の屋敷に出入りし、褒美をたくさんもらった。それでも、旅

の空にあつたときのごく粗末な衣服のまま、珍肴を出されても無関心、高価な器物などには目もくれなかつた。襪褌家に住み、代筆の謝礼は梁の上に抛り上げてそのままであつた。老子や莊子を客と語るのを楽しみとし、話しつつ衣を開いて虱をつぶすのが常であつた。

貴人の間でひっぱりだこであつた邢邵があるときふいと都から姿を消したかと思つと、時を置かずして、元叉が元憚を殺すという事件が起こつた。

元叉は、競争相手を陥れるために、元憚が皇帝の毒殺を計画しているとの噂を流した。小細工を弄して元憚を犯罪人に仕立てようとしたものの、かえつて我が身が危うくなり、面倒とばかりに職権を乱用して元憚を捕縛し、取り調べもせず殺した。そこまですてから、胡太后が怒るに違いないと急に怖くなり、ならば毒を食らわば皿までと、胡太后を宮城の一角に幽閉した。勢いそのままに元叉は朝廷を乗つ取つたものの、国家をどう運営したらよいのか皆目わからず、胡太后の脇で国を動かすありさまを見ていた宦官の劉騰に実務を丸投げした。劉騰は無学であつた、それなりに実務能力があつた。

劉騰が一番熱心であったのは、自分の懐を膨らませることで、とりわけ北方の六鎮から集中的に富を収奪した。劉騰は思う存分のことをして三年ほどで病死し、その葬儀には貴人達が道を塞ぎ野を満たして参列した。

* * *

楊津は、都でのそのような動きとは関わりを持たず、肆州刺史としての任期を終えると、幾分か南の晋陽（しんよう（并州（へいしゅう））に移動となった。晋陽は古くから栄える大きな町で、漢人も比較的多い。成長したと聞く息子をこの町に呼んで自分の仕事ぶりを見せようと考ええる。

ところが、晋陽に來た楊愔は以前よりも茫洋としていて、何を聞いても心そこにあらずの風で、父を落胆させた。竹林脇の勉強部屋とはまるで異なる晋陽の風光にいきなり神経を病んでしまったのだった。父は息子のために、町の西にある泉甕（けんおう）山に小さな庵を建てた。山に入ると楊愔は徐々に回復した。

「仕方あるまい。おまえはここにいろ。ただし、書物を読んで好きに過ごし

ていればいいというわけにはいかない。日課として、公文書を書く練習と、
武術の鍛錬を欠かしてはならない」。

父は厳命した。このような息子であっても、いつかは官職に就くことにな
ると思うからだ。

* * *

楊愔が鼎甕山に籠っていた正光四（五三）年夏、六鎮の一つの沃野鎮で反
乱が勃発した。過酷な収奪にこれ以上は耐えられないと、民衆の怒りが爆発
したのだった。劉騰が死んで一段と無規律になった元叉の政権には対処する
能力がなく、一年ほどで六鎮全域に反乱が拡大した。これを六鎮起義という。

反乱は周辺域にも飛び火した。朝廷は、秀容郡の酋長の爾朱栄（じしゅ えい）
に鎮圧を命じた。爾朱栄は反徒と戦って勝利を重ね、四方より豪傑を集め、
胸に大きな志を抱くようになった。

朝廷への反感は全土にくすぶっていた。正光五（五四）年十一月、長安の
北の豳（ひん）州が反徒に囲まれた。皇族の元顥（げん こう）が救援に向かい、

楊昱が軍の指揮官として従った。大軍の接近に、反徒は豳州の囲みを解いて姿を消した。

続いて、魏朝の収奪に苦しむ蜀の民が長安を襲った。これを蜀賊と呼ぶ。長安の刺史は朝廷に救援を要請し、昼に一通、夜に一通、合わせて九通の要請が届いても、朝廷はぐずぐずと対応しなかった。楊昱は豳州においてそれを聞き、すぐに軍を率いて長安に駆けつけ、蜀賊の主謀者を斬って反乱を鎮めた。しかし、朝廷の命令なしに勝手な振る舞いをしたとして免官となった。豳州、長安などのこの方面の民衆反乱を関隴（かんろう）起義という。

元叉は遊興に時を費やしていた。死んだ劉騰は、胡太后と皇帝の間を完全に遮断して、胡太后を封じ込めていたのだが、元叉は何事も粗略で監視を怠った。胡太后は皇帝と連携して元叉を失脚させて殺害し、再び大権を掌握した。

胡太后は六鎮の反乱に対しては、北の強国の柔然国と手を結んで挟み撃ちにする策を採った。反乱の首謀者は柔然に殺され、反徒に従っていた民衆は

柔然軍に追われて山を超え、内地に流れ込もうとした。胡太后の命令を受けた元深（げん しん）がその民衆を捕獲した。その数約二十万。その民が再び反徒に靡かぬよう内地に定住させたいと、元深は朝廷に申し出た。胡太后は、武に優れる元深が二十万もの民を己の配下に置くのを危ぶみ、元深から切り離して各地に分散させようとした。その仕事を、免官となつて郷里に帰つていた楊昱に命じた。楊昱は北に赴き、二十万人の民に生業を与えようとした。しかし、このとき周辺地域は飢饉に見舞われ、その仕事は困難を極めた。

ここに、杜洛周（とらくしゅう）なる者が、行き場の定まらない民衆を集めて反乱を起こした。黄河下流域の北部地方全域に拡大した大反乱の始まりで、これを河北起義という。杜洛周のもとに、魏朝に不満を持つ者が続々と集まり、たちまち大勢力に成長した。妻の助けを得て任侠者と交わりを結んでいた高歡も加わった。

北魏が内乱に苦しむ状況を見て、南朝が国境を超えて攻め込んで来た。内外両面で北魏は大変な事態となり、多額の戦費を必要とした。それでも都で

は相変わらず仏寺の建設が続いていた。かつては溢れるばかりであった国庫もさすがに空になり、朝廷は税を重くし、取り立てを一層厳しくした。人民の反感はさらに強まった。

二十万の民のなかに、杜洛周よりも皇族の元深を担いだ方が先の見込みがあるのではないかと言い出す者があった。元深は誘われて心が揺れたが、朝廷に反逆するまでの決心がつかず、都に帰還した。元深と入れ替わりに、反乱の鎮圧に当たるよう命じられたのが楊愔の父の楊津だった。

* * *

楊津は息子達も連れて晋陽を出ると、先の任地であった肆州に行き、杜洛周の動きを見定めようとした。反徒が定州を次の標的にしているとの報せに、急ぎそちらに向かった。定州もかつての赴任地だ。定州に着くと、防御のための柵や塁はまだ作りかけで、城のなかに入ろうとすると、州の刺史は門を閉ざして拒んだ。楊津は刺史の意図を疑い、門衛を斬って強引に入った。その夜、反徒が押し寄せた。刺史には戦う意思がなかった。楊津は自ら出撃し

て反徒を退けた。

晋陽を出てからの楊愔は不思議な感覚のなかにあった。見るもの聞くものが現実であるような気がしない。父が命を危険にさらして奮闘するのを見ても、竹林脇の勉強部屋や兜籠山の庵で読む書物に書いてある事柄ほどには実体感がなかった。

楊津は定州刺史を兼任することになった。定州は楊家と縁が深く、楊津の兄の楊椿もこの町の刺史であった。当時の定州には八つの軍団が置かれていた。そのまた昔の北魏がまだ発展途上にあつた時代にさかのぼると、定州は極めて重要な軍事拠点で、八つの軍団にはおのおの五千の兵と四十六人の指揮官が配備されていた。その後、定州の重要度は下がり、各軍の兵は千人程度にまで減少したのだが、指揮官の数は変わらなかつた。指揮官にはお上から十分な禄が与えられていた。楊椿は定州に来ると、指揮官を半分の百八十四人に減じて無駄を省いた。禄を失つた者は楊椿を恨み、趙略（ちやうりやく）という者が楊椿をある罪状で密告した。楊椿はそれで罷免になった。

その弟の楊津が定州刺史になったので、趙略は一家を挙げて定州から逃げようとした。楊津は趙略を呼び、安心して稼業に励めと教え諭した。

このころ楊椿は、長安の近傍でなお続く反乱に対処していた。

朝廷内では内輪もめが続き、北から都に戻った元深が権力を握ろうと画策して失敗した。どうせこうなるのだったら反徒に担がれていけばよかったと後悔し、都を出て北に戻ろうとした。楊津はその動きを警戒して臨戦態勢を取った。元深は反徒と共闘を組んだ。しかしここに大きな誤算があった。杜洛周は一時期の勢い失い、代わって葛栄（かつえい）という者が伸びて来た。葛栄は官軍を次々に破り、勢いに乗って皇帝を自称するに至った。皇帝になった者が、魏国の皇族を上に乗く理屈はなく、葛栄は元深を殺した。

反徒の勢いはいよいよ盛んで、定州は孤立し、都との連絡が絶たれた。楊津はこのような事態に備え、城内に食糧を蓄え、戦具を修理し、城壁を繕っていた。敵は幾度も攻撃を繰り返し、楊津は秘術の限りを尽くして守り抜いた。

敵のなかに、楊津の人柄を慕い、助けたいと考える者がいて、秘密の使者を送って来た。

「我々が定州を執拗に攻めるのは、城のなかにいる仲間の北人がほしいからです。北人を殺してしまえば、望みを失って攻めるのをやめるでしょう。北人を生かしておく、外と通じてどのような悪さをするかわかりません」。

北人とは例の二十万の民の片割れだ。

楊津はこのことを聞くと、北人を殺すどころか、逆に安全な場所に集めて保護した。北人は楊津の心に感じて騒動を起こさなかった。

このような定州において、楊愔は相変わらずだった。書物に耽溺するその姿に、楊愔は全く物に動じないと人々は感心した。

孝昌二（五二七）年夏、楊津の兄の楊椿は俄かに病にかかり、長安で反徒と対峙する激務に耐えられなくなって郷里の華陰に帰った。代わって長安に派遣されたのが蕭宝寅（しょうほういん）だった。蕭宝寅は南朝の皇族で、向こうの事情で北魏に帰順した異色の存在だ。その蕭宝寅が先に反徒と戦って敗れ

たために、楊椿はその後始末をしていたのだった。再び蕭宝寅が用いられると聞いて、楊椿は息子の楊昱を洛陽に走らせ、蕭宝寅は信用ならざる人物であるから別の者を用いるようにと胡太后に訴えた。胡太后は聞かなかつた。

蕭宝寅は長安に着任すると、反徒と戦つてすぐに敗れた。蕭宝寅は、南朝出身の自分は敗北の責任を問われて殺されてしまうだろうと恐れ、反徒と手を結んだ。楊椿父子に誇られ居場所を失つたのだと、自分の行動の正当性を朝廷に対して主張した。

楊愔は、危ういところで牛の血で救われ、世界を実感できるようになった。

* * *

楊津の定州籠城は三年目に突入した。このままでは食糧が尽きて必ず負けてしまうと、長男の楊遁（よう とん）を北の強国、柔然国に走らせて救援を求めた。楊遁は敵の包囲網をかくぐつて柔然国に達すると、父を救つてほし

いと、幾晩にもわたって泣いて柔然国王に訴えた。初めは渋っていた柔然国王も、この孝子の願いは無視できぬと、一万騎を貸すことにした。楊遁は喜び勇んで帰途についた。しかし、途中の隘路で反徒に阻まれ、一万騎は定州に行くのをあきらめ帰った。

万策尽き、定州の人々は城門を開いて、杜洛周の率いる反徒を導き入れた。楊津はなお抵抗して城内で戦おうとした。楊愔も兄とともに剣を持った。勝ち目はなく、必ず殺されると思ったが、さほどの恐怖はなかった。圧倒的多数の敵に対して剣を切り結ぶには至らずに擒となった。楊愔は兄とともに獄に入れられ、父はどこか別の所に連れて行かれた。じめじめと暗い獄にはひどい臭気が充満していた。史書には不義に抗して獄に落された人々の事績が数知れず記され、楊愔は自分もそのなかの一人になったような気がした。

数日して、楊愔は兄とともに縛られたまま城外に連れ出された。野に大きな釜が置かれ、兄弟は手荒くその近くに座らされた。続いて、嚴重に縛られた父も来た。杜洛周が現れ、楊津を釜茹でにすると宣言した。釜の下に火が

つけられた。父子は互いに目と目を合わるだけで、話すことができなかつた。

楊愔はこれで死ぬと思つた。

——史書に記されている人と同様に自分も無実の罪で命を落とす。父の名とともに自分の名も史書に記録されるだろう。自分の生きた証が永遠に残る。

火が勢いよく燃え立つと、四周を囲む兵士のなかにざわつきが生じた。数人が意を決して進み出て、楊津を殺さぬよう杜洛周に懇願した。その数が、十人、二十人と増え、ついには兵士全体の声となった。杜洛周は、楊津父子を野に棄てて城に引き揚げた。

どこやらに潜んでいた従者が出て来て父子の縄を切つた。人々は泣き、楊愔は泣かなかつた。書物の世界と自分が離れてしまったことに違和感を覚えた。

「お坊ちやまはまこと泰然自若としておられます」。

従者は感嘆した。

* * *

父子は洛陽を目指して逃げた。運悪く葛栄の兵士に見つかり、再び囚われの身となった。

葛栄は楊津を鄭重に扱った。皇帝となった葛栄は、新しい朝廷をこれから築いて行く上で、楊津は利用価値がある考えたのだった。

「どうだ、朕(ちん)の婿にならぬか。いずれ宰相に用いてやるぞ」。

葛栄に言われて、楊愔はぼんやりとした顔を向けた。

「こやつは物が言えぬのか」。

咄嗟に兄の楊遁が応じた。

「弟は生まれながらに言葉を出すことができません。恐れ多くも天子様の婿にしていたくなどんでもない大変な愚か者で、一族のなかでも、皆から見捨てられているのでございます」。

「そのようには見えぬが」。

葛栄は楊愔をじつとにらみ、その顎に触れ、

「偽りであれば許さぬぞ。いますぐに決めずともよい。親、兄弟、皆とよく

考えよ」。

楊愔父子は軟禁状態に置かれ、葛宋が戦いつつ移動するのに従って各地を転々とした。楊愔は注意深く一切の言葉を口にしないようにした。監視の目は存外緩く、楊愔は書を読むが許された。

ある日のこと、楊愔は書物に没入し、馬蹄の音が近づいて来るのにも気付かなかった。

「それはいかなる役に立つものであるか」。

耳元で大きく響いた。顔を上げると、頭が長く、頬骨の突き出た男がいた。その者が、読んでいる書物のなかの人物であるかのように錯覚した。

「誰だったろう」。

思わず口にした。

男は豪快に笑った。

「そうか、やはり、口をきいたか。思った通りだ」。

まずいことをしたとの自覚が楊愔にはまだなかった。

男は肩を叩き、

「心配いらぬ。俺の前で、わざわざ口のきけないふりをしなくたっていい。婿になれと言われたら俺だって断る。もつとも俺には妻がいるのだがな」。

真黒に日焼けし、齒は輝くばかりに真白だ。

「俺は兄さんを知っているが、兄さんは俺のことを知らぬだろう」。

楊憎は禁を破ったことによりやく気付いたが、この男なら心配ないように思った。

「私は囚われの身です。誰のこともわかりません」。

「兄さんは世に名高い楊家の御曹司。俺は六鎮で最も貧乏な家に生まれた無名の田舎者だ」。

男は自分のことを勝手に話した。語るにつれて訛がひどくなり、十分にはわからなかった。

「俺には妻がいるお蔭で、葛栄様の婿になれと言われても断ることができる。兄さんはとんだ男に見込まれたものだ。同情するぞ。いいことを教えてやろ

う。病気になる。胸を病むのがいい。うんと咳をしろ。この次に葛栄様に呼ばれたら、苦しそうに咳き込み、血をいっぱい吐き出せ。牛の血をたっぷり口に含んでおけ。空高く血を噴き出したら、気を失え。葛栄様はあきらめらるだろう。兄さんのその顔は、病人のように真白だから、仮病とは思うまい。

男はさも愉快そうに笑った。

「御教示ありがとうございます」。

「丁寧に礼を言われるほどのことではない。代わりに、俺に一つ教えてくれ。そいつはいかなる役に立つものであるのか」。

男は書物を指差した。

楊愔はどのように答えていいのかわからなかった。書物は読まずにはいられないもので、何かに役立つから読んでいるのではなかった。

「俺に口をきけぬふりをしなくてもいい。どうしてこんなことを訊くのかというのだな、俺は妻のお蔭で初めて馬を得て都に上った。十年前だ。都を見て、この国は駄目だと思った。まさに俺の思った通りになった。兄さんの一

族は揃って朝廷に仕えて来た。学問のない俺にはわかるのに、兄さんたちになぜわからないのか、俺は不思議でならない。それで、書物を読んでいかなる役に立つのかと訊いたのだ」。

楊愔は、いよいよ答えられなかった。

「もつと端的に訊こう。書物をたくさん読んでいる兄さんの頭で考えて、これからの天下の行く末はどうなるのか。そいつを答えてくれ」。

楊愔にとって全く関心外の問いであった。書物を読むのが自分の人生で、国がどうなるかなど考えたことがない。それでも、書物を読む身として、何も答えられないのは残念であると感じた。孔子にしても孟子にしても天下の行く末は最も大きな関心事であった。

不意に思うところがあり、そのまま言葉にした。

「魏朝が滅ぶのか、葛栄様が天下を治めるのか、私は存じません。ただ一つ、私が思うのは、人をどれだけ信じられるのか、天下の行く末はそこにかかっているのではないでしょうか」。

男は目を剥いた。

「そいつは面白い。俺の考えと全く同じだ。万巻の書を読む兄さんと、一字も知らぬこの田舎者が同じとは。俺の妻は、人と交わりを結ぶのにいくら金を使っても文句を言わない。俺がこの十年の間にしたのはそれだけだ。俺は近くここを去る。ここは駄目だ。新たな交わりを結ぶ旅に出る。兄さんもうまくここから去るのだな」。

「牛の血を試してみます」。

「運よく兄さんも死なず、俺も生きていられたら、また会うことがあるう。そのときに、兄さんと俺が信じ合えると思えたら、天下の行く末を我等の手で定めるのもよいであろう」。

男は馬に乗り、そのまま葛栄のもとから姿をくらしました。その男が高歡であるとは楊愔は最後まで知らなかった。

楊愔は牛の血を吐く練習をし、葛栄の前で実行した。口中に血を含んだまま長い時間いるのは苦しく、天に向かって嘔き出すと、目の前が真っ暗にな

った。血が鼻を塞ぎ失神した。いままでにない感覚が体に広がり、自分がこの世界に間違いないと生きていると知れた。

* * *

長安で反徒と結んだ蕭宝寅は日に日に勢いを増した。朝廷の対応は遅く、長孫稚（ちょうそうじんち）の率いる討伐軍が都を出たときには、長安と洛陽の間の最大の難所である潼関（とうかん）がすでに敵の手に落ちた後だった。長孫稚には楊愔の従兄の楊侃が従っていた。

「関を避け、北に回りましょう」。

楊侃は新たな進路を開く役を志願し、行く先々の村に兵士を送り、次のように言わせた。

「官軍が三つの烽火を上げたならば、それに応じて烽火を上げろ。もし烽火を上げない村があれば、賊に従う村と見なし、軍勢を差し向けて皆殺しにする」。

夜になって楊侃は烽火を上げた。見渡す大地は闇に包まれたままだった。

楊侃は落ち着き払って、

「待っていれば必ず上がる。」

しばらくして、ぽつと一つの火が上がった。間を置いて、また一つ上がり、徐々に増え出し、そして一気に百里の彼方にまで火が広がった。

そのありさまに、潼関にいた賊軍は恐れをなして逃げた。官軍は長安に進み、蕭宝寅は部下に裏切られ、西に遁走した。

楊侃は、一族とともに一つの危機を脱した。

* * *

高歡は、任侠仲間のついで、秀容郡の曾長の爾朱栄のもとに身を寄せた。爾朱栄は六つの州を統治する身となり、秀容郡を出て晋陽を新たな根拠地としていた。晋陽は、楊侃にとつては気の塞ぐ場所であつたが、武将の目で見ると、軍事的に優れた場所であつた。

高歡は旅の間に痩せ細り、衣服も傷んで、みすばらしいありません。爾朱榮は、高歡は使える男だと人からと聞いていたので、少なからずがっかりした。取りあえず馬の世話でもやらせておくかと厩舎に連れた。

「あの馬の毛をきれいに刈れ。それができたら飯を食わしてやる」。

爾朱榮が指差したのは最も気の荒い馬で、誰もが手こずっていた。

高歡は馬に近寄り、しばらく馬と見合っていた。頃合いはよしとうなずくと、馬を縄で繋がず自由を許したまま毛を刈った。

みごとに腕前に、

「どこでその技を磨いた」。

「別に難しいことはありません。性悪な男を御すのと同じなのですから」。

爾朱榮はその返答を奇として、

「約束通り、飯を食わせてやろう」。

酒食を並べると、人を払って二人だけとなり、

「わしがいま何をすべきか、思うところを言ってくれ」。

高欽は即答した。

「馬に鞭打つて都に馳せ上り、朝廷を一新しましょう。他に何がありましたもうか」。

爾朱栄は大きくうなずいた。

* * *

そのころ宮中では、新たに深刻な事態が生じていた。胡太后と皇帝は実の母と子でありながら、二人の間に深い溝が生じ、修復不能となっていた。

母子一体となって元叉を滅ぼしたときには、皇帝は自分もいい年齢になったのだから、これからは母も自分に国の運営を任せるようになるだろうと期待していた。胡太后は権力を握って放さず、お気に入りの方に好き放題を許した。その上、美男子をあれこれ選んでは寵愛した。皇帝のまわりの者は胡太后の悪しき行状を告げ、胡太后のまわりの者は皇帝の不満な様子を告げた。胡太后は自分のことを悪く言う者を皇帝から引き離し、ときに処刑した。朝廷は、胡太后派か皇帝派かに二分されるばかりとなった。

楊一族は二派のどちらにも付かず、どちらにも誠実であるという、およそ不可能であるような難しい道を選んだ。一族全体で意志統一を図るような動きをすれば、それ自体が不穏と見なされかねない。暗黙のうちに心を合せ、徐々に中央の舞台から去って行った。

爾朱榮は、葛昱を討伐するために三千騎を東に出したいと朝廷に申し出た。葛榮に勝てるのは爾朱榮しかいない状況になっていたが、爾朱榮が力を付けすぎてしまうのを恐れ、胡太后は許可しなかった。

爾朱榮は再び同じ申し出をし、兵士を集めた。胡太后は秘かに爾朱榮の周囲の者に働きかけて、内輪もめを起こさせようとした。爾朱榮はそれを察知し、胡太后を嫌った。

皇帝は胡太后に対抗するために、爾朱榮の力を借りようと考えた。秘密の使者を出し、都に来るよう誘った。爾朱榮はこれ幸いと、高歡を前鋒として先行させた。爾朱榮が実際に動き出すと、皇帝は怖くなり、あわてて中止を命じた。爾朱榮は聞かなかった。

胡太后は、皇帝が爾朱榮と手を結んだのを知り、先手を打って我が子を毒殺した。楊愔より一年早くに生まれた元詡はまだ十九歳だった。胡太后は、生後間もない皇帝の娘を男子と偽って皇帝に仕立てた。しかし、嘘はいずれ知れてしまうと、元釗（げんしょう）という三歳の男の子を連れて来て改めて皇帝にした。

爾朱榮はこの愚かしいありさまを見て、朝政を根本的に改めなければならぬとの決意を固め、従弟の爾朱世隆（じしゆ せりゆう）等とともに都に向かった。途中、黄河北岸の河陽（かよう）で、皇族の元子攸（げん しゆう、孝武帝）を迎えて、皇帝に立てた。

河陽の東に黄河を渡る河橋がある。橋から洛陽まではわずかな距離だ。爾朱榮に河橋を渡られては一大事と、胡太后は討伐軍を差し向けた。官軍は戦う前に逃げるか降参するかして、爾朱榮は悠々と河橋を渡った。胡太后は髪を下ろして仏寺に入った。

爾朱榮は黄河南岸の河陰に軍を留め、そこに朝廷の百官を呼び付け、胡太

后と元釗を捕えて連れて来させた。胡太后は爾朱榮の前に出ると、国家のために自分がどれほど務めたか滔々と述べ出した。爾朱榮は衣を払って立ち、胡太后と元釗を黄河に沈めた。

爾朱榮は宰相以下二千余人の百官に向かって天下を乱した罪を責めた。誰も抗弁できなかった。爾朱榮は、百官の周りを兵士に囲ませ、その処分を任せた。百官は惨殺され、ごくわずかな者だけが、日没によつて救われた。二千余人のなかに楊一族は一人もいなかった。

新皇帝の元子攸は、胡太后と百官が殺されるのを見て空恐ろしくなり、皇帝の座を爾朱榮に譲りたいと言つた。高歡は爾朱榮に即位を勧めた。爾朱榮はうろたえた。元來が遊牧民の素朴な酋長である。朝廷の乱れを清めに來ただけで、皇帝になるような野望はなかった。爾朱榮は占いで決めようとした。遊牧民は占いを深く信じ、爾朱榮は古くから一族に伝わる方法を用いた。結果は凶だった。爾朱榮はぞつとし、他の占いを聞いた。やはり凶だった。次々にいろいろな占いを試し、全てが凶と出た。爾朱榮は精神が混濁して地に倒

れた。

爾朱榮は息を吹き返すと、真青な顔で震えながら言った。

「皇帝になろうなどと少しでも思ったのが間違っていた。死んで天に詫びなければならぬ」。

側近が言った。

「即位を勧めた者が悪いのです。天に謝るのなら、高歡を殺して天に捧げましょう」。

高歡は新参者であったから警戒する者が多くいた。

別の者が、四方多事のときに武将を殺すのは我等にとって益にならないと止めた。

結局のところ、爾朱榮が元子攸に詫び、皇帝が赦すというかたちをとって、皇位を巡る騒ぎはひとまずおさまった。

二千余人の高官を殺した兵士は、報復を恐れて早く晋陽に帰りがたがった。

爾朱榮は、ならば皇帝も連れ、都を晋陽に移そうかと考えた。たとえそうす

るにしても、ここまで来て洛陽に一步も入らずに帰るわけにもいくまいと部下に勧められて、爾朱栄は皇帝を連れて入城した。町の人々は殺戮を恐れて一斉に都から逃げた。

爾朱栄は洛陽を見ると、晋陽との規模の違いに驚き、遷都の考えを棄てた。爾朱栄は兵士に掠奪、乱暴を禁じ、都は少し落ち着きを取り戻した。

朝廷には二千以上もの空席ができ、早急に埋めなければならなかった。誰彼構わず連れて来るしかなかったが、せめて目立つところだけはと、それなりの人が選ばれた。魏朝には三師、三公、両大といって、さほど実権はないが位として極めて高い八つのポストがあった。そこに並ぶ八人がいわば朝廷の顔である。三公の一つである司徒に楊椿が選ばれた。腐敗し切った朝廷を一新するには楊一族が欠かせないというのが衆目の一致するところだったのである。

皇帝の元子攸は爾朱栄の娘を皇后として迎えた。爾朱栄は政治のことは全くわからず、宮中の庭園で馬を走らせ、矢を射て遊ぶ以外にすることがなか

った。娘である皇后を呼んで酒宴を開き、酔うと遊牧の民の歌で踊った。

爾朱栄はすぐに都での暮らしに飽き、腹心を残して晋陽に帰った。

このようないきさまに、皇族の一人の元顥が将来を案じて南朝に亡命した。楊昱とともに豳州に反徒を討ちに行った人物である。

楊昱は徐州刺史に任命され、最前線で南朝と戦った。

* * *

河北起義は猖獗を極め、葛栄は百万と号する大軍を率いて、黄河の北の大都市、鄴（ぎょう）を包囲した。鄴はかつて三国時代の曹操（そう）（そう）が拠点とした地で、政治上、戦略上、極めて重要な都市である。

ここを奪えば、葛栄には、名実ともに真の皇帝となる可能性が大きく開ける。魏朝としては一大事である。都から楊椿が、晋陽から爾朱栄が向かい、鄴で合流して戦うことになった。

爾朱栄は七千騎を率い、電光石火と言うよりも速く、楊椿がまた都を発たないうちに葛栄を擒にして反乱を平定した。

楊愔は解放され、父や兄とともに都に向かった。長く続いた悪い夢から覚めたような気分であった。まず行きたいと思うのは、都ではなく華陰の勉強部屋であった。

同じころに、邢邵がふらりと都に舞い戻った。相変わらず、粗末な衣服を身に纏って貴人の家に入りし、人に求められるがままに詩を賦し文を記した。

楊愔は、不可解な幻想を目にした。

* * *

楊津は永安元（五二八年）年の秋の終わりに鄴から洛陽に帰還すると、すぐに荊（けい）州刺史に任命された。賊の捕虜になっていたのを恥じて辞退した。

楊愔も通直散騎侍郎の位を授けられたが、同じ理由で実際の官には就かなかった。それで、その年の冬に父子は華陰に帰った。

楊愔が竹林脇の小さな勉強部に入ると、懐かしい匂いが鼻から入って来るのと同時に、腹の奥底深くからは熱いものが湧き立って、両者が胸のあたりで激しくぶつかり合った。

——やつと本物の自分でいられる。

ここを離れていたのは三年間だった。十八歳の楊愔にとってそれは決して短くない。

全身を竹の香りに浸し、竹の葉擦れの音に包まれて書物を広げると、文字で書き記されたその向こうに、くつきりと現れ出て来るものがあつた。

——いままではこれが見えていなかった。

三年の間も書物を読み続けていた。それはただ文字を追っていただけであつた。

間もなく楊椿は太保に昇進した。かつてない栄誉を先祖に報告するため、楊椿以下の楊一族のほぼ全員が家郷に顔を揃えた。

「華陰のここに留まっていられるのはわずか数日だ。近頃は兄弟が顔を合せ

るのさえ難しい。これだけの者が次にいつまたこうして集まれるかわからない。最も平穏な日々として過ごしたい」。

先祖を祀る廟所に詣でた後に、楊椿がこのように言ったことから、一族の揃う稀有な日々を、最も平凡な日常であるかのようにして過ごした。

屋敷のなかの最も大きな建物である庁堂の階段下に皆が並ぶのが一日の始まりだった。朝日が昇るのに合わせて扉が開けられ、楊椿が現れた。皆は一斉に礼をし、一同を代表して楊津が兄の健康を尋ねた。楊椿がすこぶる良好と答えると皆が口々に祝った。

「なかに入りなさい」。

楊椿の声に、人々は決まった順に階段を上った。楊椿はまだ若年の部類であるから、多くの人々が扉から入って行くのを後方で待った。

二日目であつたらうか、階段を上り終わつた人が、忽然とその場で消え去つた。一人だけでなく、皆が順に消えたので楊椿は恐怖を覚えた。楊椿もなかに入ると、消えたはずの人々がいた。

全員が庁堂のなかに揃うと食事になった。まず楊津が味を吟味して楊椿に勧めた。楊椿が箸を取ると、他の者も箸を取った。楊家の食事は質素なもので、楊椿は一切の好みを言わなかった。

楊椿は半ば食べると、

「この機会に皆に語っておきたいことがある」。

静かに、亡き兄や先祖の話をした。楊椿は七十二歳に達し、楊津は六十歳、末弟でも五十歳を超えていた。長兄の楊播が死んだのは十五年前だ。

堂内に楊家の四世代が揃った。第四世代目としては楊侃の孫が数人いた。楊椿自身の曾孫はまだなく、楊昱の息子に対して「早くよい嫁を見つけてやらねばなるまい」と常に言っていた。その息子というのは十歳を超えたばかりだった。

「兄上も、先祖の誰もが、死と紙一重のところ、かろうじて生の側に踏みとどまれたのは、幸運と言うよりない。そのような幸運がなぜか我等一族には繰り返し訪れた。これからもそうなるのを願って果たして叶うものである

うか」。

楊椿は、話の終わりに毎回のようにそのようなことを言った。

ときの永安という元号とは裏腹に、北魏の政情は永く安定するようには見えなかった。圧倒的な実力者の爾朱榮が北の晋陽にいて、洛陽の朝廷はその監視下にある。その朝廷において、楊椿が一族でかつて例のない高い地位に昇ったのは慶賀すべきことなのか。

楊椿は、兄弟がまだ官に就かずに華陰で過ごしていたころのことを好んで語った。

「何であつたのか、いまとなつては思い出せぬが、我が家ではついぞ見ぬ美味なものを見上るが頂戴して来た。兄上は一人で食べてしまわずに、皆と分けようとして持つて帰られた。たまたま、兄弟の誰かが外に出ているので、帰るまで待とうと言われ、皆が揃つてようやくやく分けて下さった。口に入るのはごくわずかだったが、あの味は格別であつた」。

兄弟分け合うその習慣を楊椿は保ち続け、楊津が肆州に赴任していたころ、

洛陽で季節の嘉味を得ると、「不便な肆州ではこのようなものは得られぬであらう」と、一部を肆州に送り、日数を数えて着いた頃合いになって初めて口にした。

「我等兄弟はいつもここで、朝から晩まで一緒だった。兄上はすでに結婚されて別に住む家があったのだが、夜になってもここから帰らないことが多かった。あちこちに幃幔を垂らして眠る場所を区切り、一旦は床に入るのだが、一人二人とまた出て来て、いつまでも話が終わらなかつた。いったい何を話したのか、いまになってはほとんど思い出せない。あれほどの楽しさはその後にはない」。

日暮れ時に一同はまた庁堂の階段の下に並んで楊椿に挨拶をした。

「今日はまことによい日であった」。

楊椿は満足気に言った。

いよいよ明日は都に帰るといふ夕べに、楊椿は一人一人を指差し、その名を口中に唱え、じつと視線を注いだ。全員が終わると、楊椿に戻り、

「やはりそなたがいい。詩経を最も上手に吟じるのはそなたに違いない。兔爰（とえん）を吟じてはくれまいか」。

楊愔はそつと父の方を見た。父は無言でうなずいた。楊愔の声が夕空のもとに響いた。

有兔爰爰 兔はのんびりとしていられました

雉離于羅 でも雉は網にかかってしまいました。

我生之初 私の一生の始まりには

尚無為 まだ何もありませんでしたの

我生之後 私の一生の終わりに

逢此百罹 この憂いに逢ってしまったのです。

尚寝無咎 もうじつと眠っていたいです。

最後の句に至って不意に声が出なくなつた。それを楊椿が引き取り、終わりの句を唱えてから、再び最初に戻り、

有兔爰爰 兔はのんびりとしていられました

と、二度繰り返した。

「わしはいま知った。我等楊家に今日のこのような日があつたと後世に伝えてくれるのは必ずそなたであろう」。

楊椿はそのように言うと、身を翻して庁堂のなかに消えた。

皆は悄然とその場から去った。

楊愔は父を追い、

「あのようにしてよろしかったのでしようか」。

「兄上がお望みになったのだ」。

「あの詩を歌うのは何だか不吉に感じられました」。

「兄上には我等には見えぬものが見えておられるのだろう」。

「どうして私をお選びになつたのでしょうか」。

「おまえが最も遠いところにいると御覧になつてゐるのだろう」。

翌朝、楊椿が洛陽に帰ると同時に他の人々もそれぞれに散り、華陰には官に就かずにいる者だけが残った。

ひっそりとした屋敷の、最も静かな竹林の勉強部屋で、楊愔は読書に沈潜した。

楊愔は、意図せずに山に逃れた。

* * *

永安二（五九）年春、楊津は皇帝に召され上洛した。楊愔も同行した。いざ竹林の勉強部屋を離れるときに、再びここで書物を読む日はもうあるまいと不意に感じた。背に冷たい汗が流れ、そのようなはずがないと、奇妙な感覚を拭い去ろうとしたが、次にここで書を読む自分の姿は想像できなかつた。

都に着くと、楊津は高い位を授かり、洛陽の邸宅に、魏朝の重鎮が二人一緒に住むという、楊家にとってまこと栄誉なことになった。

兄弟がどれほど地位を上げようとも、楊家の普段の暮らしは極めて質素で

あつた。楊椿は、皆が顔を揃えて食事をとることをことのほか重視した。楊椿の位は名譽職としての色彩が濃く、實際の用事はさほど多くなく、日中の早いうちに屋敷に帰った。楊津は兄を待たせまいと、用を翌日に延ばしてでも食事までに帰宅するよう努めた。ごく稀に楊椿の方の帰宅が遅いと、楊津は門辺に立って兄を待った。

同じような食事がほぼ毎日繰り返された。それでも、楊愔は、今日と同様の食事は次にはないのではないかと毎回のよう感じ、その感覚をどうすることもできなかつた。

四月、楊昱が新たな使命を授かつた。

「おまえのすべきことはおまえ自身が最もよく知っているであろう」。

父の楊椿の言葉を聞く楊昱の表情は、楊愔がかつて見たことのないものだった。

* * *

楊昱は都を守るために滎陽(けいよう)に向かつた。

南朝に逃亡していた元顥が、向こうの將軍とともに、北魏に攻め込んで来た。北魏は七万の軍団を出して国境付近で食い止めようとしたが、北魏の内情に通じる元顥の前にあっけなく敗れた。元顥は無人の野を行く勢いで北魏軍を蹴散らし、北進する途中で、我こそが魏の正しい皇帝であるとして、即位した。朝廷は滎陽を最後の防衛線と考え、楊昱に七万の兵を授けた。

楊昱と元顥はかつて反乱を鎮めるために一緒に戦った旧知の仲だ。元顥は、降伏すれば我が朝廷で厚遇すると楊昱を誘った。楊昱は拒絶した。元顥の攻撃に、北魏の兵士は戦意が乏しくあっさり敗れた。一人奮闘した楊昱も擒になり、同行していた弟や子も掴まった。

元顥は服従するなら赦すと楊昱にほのめかした。

「私は生きるのを望んではいません。ただ、私には八十になろうとする父がおります。私の代わりに一人の弟を残し、孝養を尽くさせるのを許していただけるのなら、何の悔いもありません」。

元顥の配下の將軍のなかには、かつて楊昱によって鎮圧された蜀賊の残党

がいて楊昱の処刑を強く望んだ。

「楊昱は忠節の士である。即位の初めに、そのような者から殺すわけにはいかない」。

元顯は、楊昱の代わりにその家臣二十七人を將軍達に引き渡した。憂さ晴らしに三十七人は殺され、楊昱は滎陽城内に監禁された。

滎陽陥落の報せに都は騒然となった。

* * *

楊愔は、楊椿に命じられて都を出た。

「汝の父の名を決して汚さず、昱に負けぬ働きをせよ」。
従兄の楊侃にそのように言うのが、楊愔に課せられた任務だった。

——他に人もいるであろうに、よりによってどうしてこの自分が。

一族のなかで、楊愔は楊侃を最も苦手としていた。同じ従兄弟同士といつても親子ほどに年が離れる。

楊愔の見るところ、一族の顔は時代が下るとともに軟弱になり、その最た

る者が楊愔自身だ。楊侃の父の楊播は、楊愔の記憶に残る以前に亡くなっているが、武将らしくはなはだ厳めしい顔であった。その弟の楊椿、楊津は順に優しい顔になった。従兄弟のなかで、楊侃は楊一族の古い顔を最もよく残す。

伯父の言葉は、楊侃にとって言わずもがなのことであろう。まして、楊愔ごときの口からは聞かされたくないに違いない。

楊侃は滎陽の援護を命じられ、西方の任地から軍勢を率いて東に向かいつつあった。途中で滎陽陥落の報を聞いたものの、元顥を討つべく行軍を続け、都の近くを通過中だった。

楊愔が今日の宿营地と聞いていた場所を訪ねると、人影が全くなかった。つい先ほどまで露宮の準備が進められていたらしい様子に、数人の従者を走らせ近辺を探った。

楊侃に限って戦を避けて逃げるようなことはあるまいと思うが、我が身を顧みると、それも有り得るように感じてしまう。そのような自分は、伯父の

言葉を伝えるのに、やはり最もふさわしくないと恥じ入った。

楊侃は北に進んだらしいと知れ、夕暮れの迫る道を急ぎ、闇に灯りを見つけてようやく追いついた。

兵士に何事かを指示している楊侃の顔は普段の何倍も恐ろし気で近寄り難かった。

「君はどうしてここに来た」。

ひるみつつもとにかく任務を果たした。

「君は一人で来たのか。叔父上はいまどこにおられるのか」。

「伯父上は都です。私一人で参りました」。

「叔父上はお上が都を出られたのを御存知ないのか」。

楊愔は驚愕し、

「いえ、そのようなことは、恐らく、お上はどうされたのですか」。

楊侃は答えるよりも前に皇帝に召され、楊愔は残された。

火の揺れる向こうで、兵士が忙しそうに動いていた。暗がりのなかのその

影を、現実の世界のものではなく、書物に描かれているものであるかのよう
に感じた。

楊侃は戻って来ると、

「ただちに出発することになった。君は都に帰り、私は叔父上のお教えに従
つたと伝えてくれ」。

楊侃の顔は一段と怖さを増し、楊愔はこわごわ尋ねた。

「何があつたのでしょうか」。

聞かずに去つたのでは楊椿に報告もできない。

「これから夜通し歩いて河橋を渡る。叔父上のお言葉を君が伝えてくれたの
で、迷わずお上にお答えできた。お上はおっしゃった。『そなたの一族は洛陽
に残っている。そなたが朕に従つて黄河を渡り、その後で元顥が洛陽に入っ
たならば、そなたの一族にどのような災禍が及ぶのか、朕は大いに気がかり
だ。そなたは洛陽に帰るのがいい』。私はお答えした。『たかが親族のために
君臣の義を廃することはできません』と」。

楊愔の目が潤んだ。

——伯父上はこうなるのを望んでいたのか。もしもそうなら、自分はこの役目を受けたくなかった。

楊侃は楊愔の肩に手を置いた。

「かつて、源子恭殿が、君のことを括目して見なければならぬと言われた。君はどこか他の者とは違う。君ともう会えないとしたら、括目して次に見る機会を失ってしまうのをはなはだ残念に思う。さあ、行くがいい」。

楊侃はぐいと楊愔を押し、兵士に矢継ぎ早に指令を発しながら去った。

楊愔はやむなく都に戻った。

——自分の思いは何一つ言葉にできなかつた。

夜の間は固く閉ざされた洛陽城の門の外で夜明けを待った。

門が開くのと同時に、中から一斉に人が溢れ出た。皇帝が脱出したのが知れ、我先に争って後から後から続く流れに抗して都の内に入るのは容易ではなかつた。

楊家の屋敷はいつも通りのままだった。

楊椿は全てわかつていたかのように、

「お上が河橋を渡られたのなら、ひとまず安堵してよかろう」。

楊椿は都から動かなかった。ともに都を去ろうと誘いに来る者に、同じ言葉で断った。

「我が一族は都の内にも外にも大勢います。我が一族の行うところは、天下の誰もが見て知るところです。どこかに逃れ、どこかに隠れようなど、少しも考えるところではありません。いるべきところにおいて、我が運のままに従えばよろしいのです」。

皇帝が連れたのはごくわずかな者だけだった。都の人は大慌てで逃げ、元顥は無抵抗で洛陽に入った。

元顥はもとより魏の皇族の一人であるから、本来の場所に帰ったということであったのだろう、すんなり玉座におさまり、百官の顔ぶれを整えた。楊椿は病と称して元顥の宮廷に出なかった。元顥は宮中で祝宴を毎日のように

催した。単身亡命してわずかの期間で皇帝になったことから、全ては意のままだと思ひ込んだのか、いきなり気を緩めてしまった。

黄河を渡つて北に逃げた皇帝元子攸のもとに爾朱榮が馳せ参じると、各地から軍勢が集まり、一転して都に向かつて南下した。黄河北岸にまで爾朱榮が達すると、さすがに元顯も酒宴どころではないと火が付き、都を出て黄河にかかる河橋をはさんで敵と対峙した。元顯は敵の攻撃を斥け、黄河を渡らせなかつた。爾朱榮は弱気になり、晋陽に帰つてまた出直そうと言ひ出した。楊侃が強く止めた。

「ここで退いたならば、民はそれぞれに去就を考え直し、勝負の行方がわからなくなつてしまいます」。

爾朱榮は覚悟を決め、決戦に臨んだ。元顯は敗れ、その報せに都はまたも騒然となった。

楊津は一族の者を連れて宮城に入った。元顯の手の者が持てるだけ持つて逃げた後の宮城ははなはだ荒れていた。

「常にここを清らかに正しくしておくのが我等の役目だ。いかなる姿であるべきか、よく知っておけ」。

楊津はそのように楊愔に言つて、宮城の隅々を掃除した。

それが終わると、都に残る者を招集し、都の門の外に出て皇帝元子攸を迎えた。

楊津以下百官が地に伏して謝罪すると、皇帝は涙を流し、

「悪人どものために諸君の命が危険にさらされたのは朕の不徳によるものだ。朕は諸君と力を合わせて国の再建に取り組む。朕も励む。諸君も励んでほしい」。

元顥は逃げる途中で命を落とした。

楊一族は、楊侃も楊昱も都に戻り、一人も欠けなかった。楊津は司空に昇進した。司徒と同じく三公の一つで、兄弟が三公以上に並ぶのはこの上ない榮譽であった。

国を建て直すとの皇帝の決意は本物ではあっても、爾朱栄の権威がさらに

高まつて、皇帝の意思でできることは極度に狭まつた。

* * *

楊愔はこれまで以上に現実に生きていく感覚が薄れ、さらには自分が何をしているのかわからないまになつた。

一族の人々と一緒にいるのがひどく息苦しく、居ても立つてもいられず、ついには屋敷の門から飛び出した。それは一度や二度ではなかつた。都の大路を駆けまわり、疲労困憊の末に、従者に発見されて連れ戻された。

ある日のこと、走る楊愔の腕がぐいと腕を掴まれた。強い力で楊愔は身動きできなかつた。

「嵩山に行かぬか」。

我に返ると、楊愔よりも十歳余り年長の男がいた。男の顔の向こうに、まだ行つたことのない嵩山の景色が広がつた。

「君はそうする以外にない」。

楊愔は自分が走つてきた理由を知つた。男にすがり付いた。

男は追い付いた従者に向かって言った。

「衣類やら何やら、後で届けに來い。嵩山の入口で、邢邵の庵と尋ねれば、誰かが教えてくれるだろう」。

邢邵はいつも通りの襪樓を纏っていた。

元顥が南から迫って來ていたところに邢邵は都から消え、ある地方の町で殺されそうになった。邢邵には南朝に逃亡した親族がいた。町の人々は邢邵が南朝に通じているに違いないと考え、寄ってたかつて掴まえようとした。王昕（おう きん）という者が邢邵の身を覆い、「この人の才を天下から消してはならない。代わりに俺を殺せ」と叫んで守った。

邢邵はその後また都に舞い戻って來ていた。

嵩山は洛陽東方の山で、隱遁の場として知られていた。楊愔は嵩山に入つて、生きている感覚を取り戻した。

一カ月ほど経った八月に、楊椿は太保というさらに高い位に昇った。三師、三公、両大のうちの三師の一つだ。それを生涯最高の地位として、楊椿は老

齡を理由に官を辞して華陰に帰った。洛陽を離れるに当たって、一家の面々を集め、必ず一門の法を守って千載に名を残せと訓戒した。楊愔は嵩山についてそれを聞かなかった。

楊愔は、幻想の通りに一人だけ残された。

* * *

永安二（五三〇）年九月、嵩山での暮らしが一年を超えたところに、楊寛（ようかん）と名乗る初老の男が訪ねて来た。

「一緒に山を降りて下さい。いますぐにです」。

楊寛は二つの書簡を携えていた。いずれも父の楊津が書いたもので、一つには、皇帝の命令で晋陽に行くから、道の途中で追い付けとあった。もう一つは、楊椿が華陰に帰ったときの訓戒の要約だった。

その二つを読んで、嵩山にこのままいることは許されないと楊愔は考えた。

邢邵が止めた。

「君一人が行ったところでどうかなるものではないだろう。」

「我が一族には為さねばならない家門の法があります。私一人がここで安穩としてゐる訳にはいかないのです」。

今日まで楊愔は安穩としていた。せめてもの言い訳のように、かつて晋陽の県甕山に籠ったときに父に命じられたのと同様に、公文書を書く練習と武術の鍛錬を欠かさぬ日課とした。公文書の練習には邢邵という誰よりも優る師匠がいた。邢邵に、誰の求めにも応じて詩文を書くのはなぜかと問うと、「私にも世に役立つところがあると知って安心したいからだろう」と答えた。世に役立つとは何であるかと問うと、「要は民のためになることであろう。武人ではない者がそれを為すにはまず名を挙げねばなるまい。だが、己を損なつてまでする気はない」。嵩山での暮らしは楊愔の意に適うものだった。邢邵と一緒に虱を取っていると、不思議と生きているとの実感があつた。

邢邵は、山を降りようとする楊愔の袖を引き、

「君の気持ちはわからなくはない。だが、あの楊寛という男が気になる。君は書物の奥深くを読むことでは誰よりも長けている。しかし、人というものの奥を見ることでは劣っている」。

「あの者も一門の人間です」。

楊愔は邢邵を振り切って嵩山を降りた。

「急げば河橋のあたりでお父上様に追いつけましょう」。

楊寛に急かさされ、嵩山で過ごした日々を惜しむ間はなかった。もしも振り返って山を見たならば、山を出難くなっていただろう。

* * *

朝廷は決定的局面を迎えていた。

皇帝元子攸が爾朱栄の力で洛陽に帰還して以来、朝廷の権威は日に日に落ちる一方であった。軍事に関わる号令は基本的に晋陽から発せられ、朝廷はそれに従うしかなかった。西方で反乱が生じたときに、討伐軍を動かす爾朱栄の意に副うよう、朝廷はひたすら努めた。軍馬が不足していると爾朱栄に

言われ、楊侃が駆けずり回ってどうにか間に合わせた。

皇帝は自ら何かしようと考えても、皇后になっている爾朱栄の娘に、

「天子だといったって、どうせ父が立ててやったものではありませんか。父の言う通りにしていればいいのです」。

と、抑え付けられた。

皇帝は爾朱栄の存在を消し去りたいと夢想した。折しも皇后が妊娠したので、出産に合わせて爾朱栄を都に呼び、宮中で暗殺してしまおうと考えた。その計画に楊侃が加わった。

爾朱栄が洛陽に行こうとすると、都で皇帝の動静を監視していた一族の爾朱世隆は、天子はよからぬことを企んでいると、手紙で止めた。

「都の腰抜け連中に何ができようか」。

爾朱栄は一笑に付き、五千騎を率いて上洛した。

爾朱栄が都に着いて、最初に宮中に参内した日に、楊侃は十余人とともに明光殿の東に潜んだ。爾朱栄は明光殿で皇帝や皇后と食事を取った。それが

終わって出て来たならば、階段下で爾朱栄を斬る計画だった。爾朱栄は中座し、楊侃が急いで出ようとしたときには、すでに中庭の方に去った後だった。

皇帝はこの失敗が爾朱栄の耳に入るのを恐れ、楊侃を華陰に帰らせた。それでも皇帝は安心できず、やはり決行するしかないと考えた。

皇子が生まれたと偽って爾朱栄を宮中に呼んだ。皇帝はやはり明光殿で待った。爾朱栄が到着したと聞き、顔色が変わった。近くの方が皇帝の口に酒を含ませた。皇帝は宮殿の東側に座って爾朱栄を迎えた。爾朱栄は入ると西北に坐した。皇帝は南面して臣下に対するのが普通である。東西に向き合うのは、臣下としてではなく客人として爾朱栄を迎えたのである。爾朱栄が頭を下げて皇帝に挨拶をした瞬間に数人の者が飛び出した。その気配に爾朱栄が顔を上げると、皇帝は自身の剣で爾朱栄を斬った。爾朱栄と同行の者三十人がその場で死んだ。

爾朱栄誅殺の成功に、百官が続々と宮中に集まって祝賀した。その陰で、爾朱栄の妻や爾朱世隆等が都を脱出して晋陽へと走った。

皇帝は先んじて晋陽を抑えなければならぬと、晋陽刺史の経験のある楊津に晋陽行きを命じた。楊津はすぐに都を發つた。たまたま邯鄲（かんたん）から遠縁の楊寬が都での職を求めて来ていた。楊津は高山にいる息子連れで来てくれと楊寬に頼んだ。

楊寬は首尾よくこの任を果たせば何かの役職が得られるだろうと、ひたすら楊愔を急がせた。河橋が爾朱氏によつて占拠されてしまったらしいと聞いても、

「とにかくお父上様の後を追いましょう」。

と、我武者羅に進んだ。

河橋には爾朱氏の旗印が立っていた。楊寬もやむなく足を止め、しばし考えあぐねていると、対岸に土煙が上がった。列をなして騎馬武者が橋を渡つてこちら岸に来た。楊愔は藪に身を潜めた。およそ千騎もあろうか、全員が真白な布で身を包み、洛陽の方角へと走り去った。

「この様子では、お父上様も、あの橋をお渡りになれなかったことでしょう」。

「どうしたらいいのかい」。

楊愔は嵩山を出たばかりで、下界における判断ができる状況になかった。

「お父上様は、橋が渡れなくても必ず晋陽を目指されましょう。東に進み、

爾朱氏の目の届かぬところで、黄河を渡ろうとされましょう。私たちも後を追いましょう」。

「万事お任せします」。

* * *

二人がここで見たのは、爾朱世隆が洛陽城に走らせた一隊だった。

爾朱栄が殺されて、爾朱世隆は洛陽を脱出して晋陽を目指していた。道の途中で、同じように都から出た司馬子如（しば しじよ）と出会った。司馬子如は高歓の旧い任侠仲間だ。

司馬子如は爾朱世隆に言った。

「洛陽に戻りましょう」。

「晋陽に帰って出直すつもりだ。ここにはわずかな手勢しかない」。

司馬子如は爾朱世隆に従う兵士を数え、

「洛陽の連中が相手ならこれで十分です。弱みを見せてはなりません」。

司馬子如は爾朱世隆の腕を取り、強引に河橋に戻った。官軍と衝突し、あつさり勝利した。

爾朱世隆は河橋を占拠し、黄河北岸の北中城に入ると、一千騎に白装束を着せ、洛陽に走らせた。

一千騎は洛陽城の門に達すると、爾朱栄の遺骸を引き渡せと要求した。皇帝は宮中より財宝を放出し、約一万の急造部隊を仕立てた。その軍勢は城外に出るとたちまち敗れた。

この最中に爾朱皇后が皇子を生んだ。

官軍は爾朱氏の後続軍が来るのを恐れ、河橋を焼き落としてしまおうとして失敗した。

楊昱は私財を散じて八千の兵を集め、洛陽から東に出て、外の力を結集して爾朱氏に対抗しようとした。

爾朱世隆のもとに、晋陽から一族の実力者の爾朱兆（じしゅ ちよう）が応援に駆け付け、二人は皇族の一人の元暉（げんよ）を皇帝として押し立てた。

楊津は、楊寛が推測した通り、東に進んで黄河を渡り、鄴に入った。

十二月、爾朱氏は洛陽を包囲した。官軍は抵抗をあきらめ、爾朱兆は悠々と都に入った。皇帝の元子攸を守る者は一人もいなかった。元子攸は徒歩で宮城の門から出ると、たまたま馬で通りかかった皇族に、「乗せてくれ」と頼んだ。返事もなく皇帝は置き去りにされた。呆然と立ち尽くしているところを爾朱兆の兵に捕えられ、永寧寺の楼上に幽閉された。皇帝は冬の寒風にさらされた。生まれたばかりの皇帝の子は撲殺された。爾朱兆は兵士が望むところを許した。宮中の財宝も女も兵士によつて掠奪された。

遅れて爾朱世隆が都に入った。爾朱世隆は掠奪を止めさせた。爾朱世隆と爾朱兆はその後の方策を巡って争い、喧嘩別れとなつて、爾朱兆は元子攸を連れて晋陽に帰り、爾朱世隆が洛陽に残つた。

鄴では、洛陽の陥落を聞くと、その地の刺史が、こうなつては爾朱氏に靡

くしかないと楊津に勧めた。楊津は同意せず、東方でなお爾朱氏との戦いを続ける楊昱に合流すべく鄴を出た。

爾朱兆は晋陽に着くと元子攸を殺した。

爾朱氏が皇帝に立てた元暉は皇族のなかでは傍系で人心を集約し難いと、爾朱世隆は考え、もつとましな者がいないかと物色した。目を付けたのが元恭（げん きょう、簡帝）だった。元恭は、皇族内の争いを避けて口がきけないふりをして隠遁生活を送っていた。即位すると、八年ぶりに言葉を発して人々を驚かせ、なおかつ聡明で、朝野の人々は大いに喜んだ。

嵩山に籠っていた邢邵は山を下り、新皇帝の発する赦文を起草した。元恭が自ら筆を執って推敲した赦文を見て、楊津と楊昱も戦いを止め、新皇帝のもとで国を再建すべく洛陽に帰還した。

爾朱世隆は、元恭に人望が集まり過ぎるのを恐れ、皇帝には御璽を押す以外のことは何もさせまいとした。

爾朱氏は、爾朱世隆と爾朱兆のいがみ合いを抱えつつもとにかく一族の結

東を保とうとして、一族の面々を軒並み地方の大官に据え、好き放題を許した。爾朱氏の拠って立つ基盤は軍事力であったから、武將を優遇して官位を乱発し、国庫から財物をばらまいて与えた。俄かに権力を得た人々は、我欲を満たすためにそれを行使し、財産豊かな名族を罪に陥れて何もかも奪い取った。

名族といえば楊一族がいた。爾朱栄の暗殺に楊侃が一枚噛んでいた。爾朱氏が楊一族を温存させておくはずがなかった。

普泰元（五三二）年六月、長安の爾朱天光（じしゅ てんこう）が楊侃を呼び付けた。来て服従を誓うのなら一族の安泰を約束しよう、と、爾朱天光は言った。「自分一人が死んで一族が生きられるのなら」と楊侃は長安に行き、即座に殺された。

七月、爾朱世隆は、楊一族は大がかりな謀反を企んでいると朝廷に告発した。「世々魏朝に忠節を尽くして来た楊一族に限ってそのようなことはない」と、皇帝は楊一族の取り調べを許さなかった。しかし、爾朱世隆の再三の要

求に皇帝は屈し、爾朱世隆は兵団を動員して洛陽の楊家の邸宅を囲んだ。同じ日に、爾朱天光は華陰の邸宅を囲んだ。二つの邸宅において、七十七歳の楊椿から生まれて間もない赤ん坊に至るまで、楊姓の者がことごとく殺された。祖父楊椿の身代わりになると叫んで兵士の前に立ち塞がった九歳の少年も真二つに斬られた。

爾朱氏は楊家の殲滅を図り、全土に号令を掛けた。光州の任地にいた楊愔の兄の楊逸も殺され、生き残る者がいないか厳しい詮議がなされた。

中篇 天下を満たらすは一門の法のあるのみ

楊愔は、何をもって生きねばならぬと考えるようになったのか。

* * *

楊愔は邯鄲にある楊寛の家で書物を読んでいる。

嵩山に入ったときには邢邵に己を託し、嵩山を出てからは楊寛に任せた。

楊寛は邢邵ではなかった。楊寛はこの貴公子をいついかなるときに使うのが最もよいのか、事態の成り行きを見ていた。都の様子が邯鄲に知れるまでに少々の時間がかかり、時機を失したと楊寛は焦った。

書物に没入する楊愔を後からいきなり縄で縛り上げる。楊愔は痛みを感じるよりも前に床に転がされる。目の前の書物が消え、楊寛が見下ろしている。

「気の毒だが、おまえを鄴に連れる。鄴に着いたら、謀反人として処刑され

るだろう」。

口のきき方がいままでと違う。ぼんやりとした顔を向ける楊愔に、

「おまえの一族は謀反人として誅殺された。おまえを役所に突き出せば、少々の褒美くらいはもらえらるだろう。それだって、ここでおまえを食わせて来た分に見合うかどうかかわからない」。

楊愔の耳に言葉は入っては来ても意味が呑み込めない。

驢馬に括りつけられ、鄴に連れて行かれる。ただちに牢獄に入れられる。牢獄には定州でも入ったので二度目だ。同じ饅えた臭いがする。

——あのときに殺されるはずだった。

同じことの繰り返しに恐ろしさはさほどない。

刺史の劉誕（りゅう たん）の取り調べを受ける。その過程で一族が滅亡したあらしを聞かされ、自分一人が生き残ったと知る。

——処刑されれば皆と一緒になるのか。嵩山に入っていて自分だけが遅れた。華陰の屋敷の庁堂で見た幻影を思い起こす。人々が順に消え、最後に自分

も消えると、皆が庁堂のなかに揃っていた。

——あのとときと同じか。

劉誕は楊愔に若干の同情を寄せ、自分の手で斬るのは忍びないと、洛陽に送る。

楊愔は械（かせ）で拘束され、数人の兵士に伴われて洛陽に連れられる。父とともに葛栄のもとから解放されてたどったのと同じ道だ。そのときとの違いに、事の重大さが知れる。

——幻想を見ているのではない。

史書には、楊家の最後の一人が邯鄲で発見されて一族は完全に滅んだと書かれるのだろう。

——それが確かに自分がこの時代を生きた証となろう。

鄴を出て二日目の夕暮れ、野宿の準備を進める兵士から少し離れた場所で、楊愔は空を見上げて思いにふける。

——この地上に人というものが存在するようになってから、このような夕暮

れの空を見上げた者はいかほどいたであろうか。何万、何億、何兆と、恐らくは数えきれまい。そのなかにいまの自分と少しでも似た者がいただろうか。これまでに読んだ書物を思う。いろいろな人物が心に浮かぶ。

——書物のなかのことではない。自分の身にまさにこれはいま起きているのだ。

空は普段と変わらず平然と暮れなずむ。

——天は何をしているのか。

再び書物を思う。理不尽な境遇に陥った者は過去にいくらでもいる。

——天は誤りを為すのか。

嵩山の邢邵を思う。

——世と絶縁し、山にあのままいればよかったのか。

邢邵が止めたにもかかわらず山を降りた。

——何のためだ。家門の法を守るためだ。自分が洛陽で斬られれば家門の法を守ろうとする者は誰もいなくなる。

身震いをする楊悳の背に一人の男が近づく。兵士を指揮する鞏栄貴（きょうえい）だ。

——食事ができたのか。何のために自分は食べるのか。

鄴に連れられて以降、与えられるごく粗末な食事から菜を除いて塩と飯だけを口にかけている。一族を喪った者はそのようにすべきだ。

——それも止めよう。どうせ斬られてしまうのだ。

鞏隊長に声を掛けられても返事をすまいと思う。

その次の瞬間に、全く異なる感情に揺さぶられる。

——この人が助けてくれる。

腹の底が焼けるように熱くなる。

鞏隊長が隣に座る。

「急にこんなことを申しては何なのですが、一つお伺いしてもよろしいでしょうか。楊家の若旦那様でございますから、さぞかし学問を積んでたくさんのお金を御存知なのであります。それでお尋ねするのです。世の中とい

うのは、昔からこのようなものだったのでございましょうか」。

鞆隊長は楊愔よりも少しばかり年が上、二十代半ばであろうか。

「このようとは」。

ぼそりと問い返す。

「例えば、若旦那様のお家が滅ぼされてしまうようなことです。世の中ではそれが普通なのでしょうか」。

「ああ、そのことですか」。

楊愔は首を振り、先ほどの思索に戻って黙り込む。

鞆隊長は言う。

「これから少しはよくなるのでしょうか。もつと悪くなるのでしょうか。あつしには何の学問もありません。若旦那様ならおわかりになるのではないかと思ひまして」。

楊愔は嘆息する。

「学問ですか。私にわかるのは書物にあることだけです。書いてあるのは昔

のことです。これからのことはわかりません。昔を見れば、いまより悪かったときもあれば、よかったときもあつたのだらうと思います」。

「いまがよくないときであるのは天の定めなのでしょうか」。

楊愔は夕空を見上げる。

「私にはわかりません」。

「若旦那様と違つて、あつしはひどく貧乏な家に生まれました。生まれてからずっとお話にならないくらいくでもないことばかりがありました。この前の戦で、家の者はみんな死にました。若旦那様のように御立派なお家のことは人の噂にのぼりましようが、あつしみたいな者がどうなるうと、誰も気かけません。そんなことはいまの世では数えきれないくらいたくさんあるのです。でも、あつしにとつては大切な家族でした。あつしはみんなが殺されたのが悔しくて兵士になりました。復讐してやろうと思つたのです。幸いこの頑丈な体がありました。戦で少しばかりの手柄を立て、こうして隊長にしてもらいました。それで若旦那様を洛陽にお連れするように命じられまし

た。兵士は命令通りに働かなくてはなりません。でも、いまあつしはそうするのがいいのかわからないのです」。

「それがお役目なのでしょう」。

「役目です。だけど、あつしは我慢がならないのです。天の定めなら仕方ないのかもしれませんが。でも、あんな連中が世の中をいいようにしているは天の定めであるはずがないと思うのです。違いますか」。

「誰のことを言っているのですか」。

「あつしを隊長にしてくれた方々です。あつしが兵士になったのはあんな連中のためではないのです。でも、我慢がなくなっても、命令に従うしかありません。あつしにはそれしかできないからです。でも、あつしは思うのです」。

若旦那様は違うのではないかと。それで覚悟を決めて、今日はこうしてお話させていただいているのです。若旦那様には学問がおあります。御立派なお家の名がおあります。あつしとは違います。若旦那様をこのまま洛陽にお連れしてはいけなないとあつしは思うのです」。

「私だっついていまこのありさまです」。

「あつしは道々考えていました。若旦那様を信都（しんと）にお連れしたら、もしかすると、どうにかかなりはしないかと。いや、きつとどうにかかなりです。そうでなくてはならないのです」。

「信都と言いますと」。

「聞くところでは、信都に高歓様がお入りになったそうです。あの連中を打ち負かすのは高歓様だけだろうと、人々が噂しています。若旦那様を信都にお連れすれば、高歓様は喜んで下さるに違いありません」。

「高歓様と申しますと、確か、爾朱栄様が初めて洛陽に來られたときに先鋒となっていた人ですか」。

「いまは爾朱氏と手を切り、信都には、高歓様を慕う人々が続々と集まっていると聞きます。あつしは思うのです、信都に行くしかないと。どうか、あつしに任せるとおっしゃって下さい」。

鞏隊長は急に声を張り上げ、楊愔の械に手をかけ、

「任せるとのこと言葉をいただけましたら、いますぐにこれを叩き壊します」。

楊憎は鞆隊長の目を見る。

——家門の法は、いま自分に何をせよと言っているのか。迷いは許されない。自分が死ねば家門の法を守る者はいなくなる。

「全てを任せます」。

楊憎は頭を下げる。

鞆隊長は械を壊す。

「あつしもこれで重罪人です。これからは若旦那様の僕（しもべ）です。必ず若旦那様のお命をお守りします」。

鞆隊長は地にひれ伏す。

「何をするのです。私の命の恩人です。私こそが従うべきです」。

「いえ、あつしは若旦那様の僕なのです。それがあつしにできる最もいいことだと信じます」。

「どうして私をそのように思うのですか」。

——この人を信じていいのか。

人を見る目がないと邢邵に言われたのを思い起す。

「若旦那様は、あつしがこれまで見たどの人とも違っているからです」。

* * *

爾朱栄が皇帝の剣で斬られたとき、高歓は都から離れた町にいた。晋陽にいた爾朱兆は異変を聞くとすぐに洛陽に向かい、高歓にも同行するよう求めた。高歓は他事にかこつけて行かなかつた。

爾朱兆は都に入った後で爾朱世隆と仲違いして晋陽に帰った。すると、北方の敵が突如として攻めて来た。爾朱兆は高歓に救援を求めた。国家の存亡に関わることだとして、高歓はこの要請には応じ、爾朱兆は危機を脱した。

爾朱兆は勝利の宴で高歓と兄弟の契りを結んだ。高歓は、酔った爾朱兆に、かつて杜洛周に従っていていまは流浪の民と化している約二十万人の扱いを任せてほしいと言った。楊昱が各地に分散させて定住させようとして果たせなかつた人々はこのときもなおさまよい続けていた。爾朱兆はそれを許した。

翌朝、酔いから醒めた爾朱兆は後悔し、昨夜の約束は取り消すと高歓に言おうとした。高歓は東に去った。高歓にそうするよう勧めたのは、旧友の孫騰（そんとう）だった。孫騰は高歓より十五歳年長の策略家だ。

高歓は二十万の民を養うための食糧を送ってほしいと鄴の劉誕に要請した。劉誕は拒絶した。高歓は租税を輸送する車を襲って食糧を奪った。その高歓を、信都に拠点を持つ高乾（こうかん）が呼んだ。同じ高氏でも、高歓と高乾は何の繋がりもない。高歓は六鎮に生まれた鮮卑系の人間であり、高乾は漢王朝の時代から名の知れる漢族の名門である。高乾は、弟の高仲密（こうちゆうみつ）、高敖曹（こうごうそう）とともに、河北起義の混乱のなかで、自力で土地と民を守った。漢人としては珍しい武人兄弟である。

* * *

楊愔が信都に着くと、小さな町に入り切れないくらいに人が溢れ、活気に満ちている。鞏隊長はあちこち手蔓を求め、崔悛（さいりん）の存在を聞きつける。

崔悛は、天下第一の名家の清河の崔氏の出だ。一時期朝廷に仕えていたが、故あつて郷里に帰った。その間に六鎮の反乱が勃発した。各地の豪族が競つて崔悛を自陣營に招こうとした。崔悛は全て断つた。漢人兄弟の高敖曹が三百騎を率いて村に乗り込み、崔悛をさらひ、無理やり我が師と仰いだ。その崔悛を、高歡は信都に入るとすぐに高敖曹からもらい受けた。

「あの人に違いありません」。

信都の官署に通じる道で夜明け前から待っていた楊愔に鞏隊長が言う。

聞いた通りの偉丈夫である。身の丈が八尺、木を刻んだようにくつきりと整つた顔立ちだ。

「若旦那様の道が開けるかどうかのこれが大事な分かれ目です」。

鞏隊長は飛び出し、馬列を止める。護衛の者が劍を向ける。弘農の楊家の楊津の子を連れてたと、鞏隊長は叫ぶ。

「ほう、楊愔であるとな。それはいずこにおられるのか」。

馬上の崔悛は鐘のようによく響く声で問う。

楊愔が進み出て会釈をする。

「おお」。

崔悛は地に降り立ち、

「そなたが司空殿の御息息であるか。まことよく似ておられる。一人そなたが狂刃から逃れ得たのであったか」。

楊愔の手を取り、胸に抱き、突如として哭声を上げる。街中に声が轟く。道行く人が足を止める。

崔悛は人々に向かって言う。

「そなたたちは知らぬか。天下にこのお人ほど気の毒な方はおらぬのだ」。

楊一族に何があったかを人々に語る。それによって楊愔は一族滅亡の経緯がより詳しく知る。崔悛は爾朱氏の横暴を数え、断じて許してはならぬと力を込めて叫ぶ。

「そうだ、その通りだ」。

人々が応じる。

楊愔ははらわたに焦げるほどの熱さを感じる。

崔悛は再び楊愔の手を取り、

「そなたが何のためにここに来たのかは問うまでもあるまい。一人残ったそなたは、爾朱氏に正しい裁きを下したいのである。一族の仇に報いるばかりでなく、天下の民のためにそうしたいのであろう。そうである。そうである。」

はらわたの熱さは身に納めておけないほどだ。

——これは憎悪というものなのか。

「私一人が残されました。一人では何もできません。私のすべきことを求めてここにやって参りました」。

崔悛は深くうなずき、

「そなたに最もいいやり方を教えよう。ついて来るがいい」。

崔悛は馬に乗らず、楊愔と並んで歩く。

「お母様にお引き合わせしようと思う。私の母ではない。この町にいる全ての者にとってのお母様だ」。

もとは信都を治める役人のものだった屋敷が高歎の住居となっている。裏門より入り、すぐ脇の瀟洒な建物へと崔悛は導く。そこで、お母様、すなわち高歎の妻の婁氏に会わせるといふ。

「私などが入ってよろしいのでしょうか」。

楊悛はとまどう。

「清河の我が一族や、弘農のそなたの一族では、このようなことは決してない。ここは違う。我等はいつでもお母様にお会いできる。お母様は、二男の洋（よう）様のために学問の師を求めておられる。洋様は四歳におなりだ。そなたを教師として紹介する。心配するな。お母様に気に入っていただけたら、そなたはもう安心だ。そなたが本当にしたいことができるようになる。高歎様御自身も、お母様に気に入られたから、全てが始まったのだ」。

崔悛の後ろについて部屋の内に入り、我が名を名乗り、深々と頭を下げる。許しがあつて顔を上げる。お母様というからはそれなりの年配の女性を思い描いていたのだが、まだ若さの溢れる美しい女性が座している。

婁氏はこのとき三十二歳。十八歳で高歡を見染め、このときまでに二男二女を儲けていた。子のうちの三人、高洋と二人の姉が脇に立っている。長男の高澄（こう ちよう）は十二歳で大人と同様の扱いを受けてここにはいない。

二人の娘が身を乗り出して新参の客を見ている。目がくりくり動き、瞳がきらきら輝く。高洋は小さな体を斜めにひねって姉の後ろに回る。

婁氏は三人に挨拶をするよう促す。一番上の姉は堂々と自分の名と年齢を言う。二番の姉は名を言ったところで急にきよとんとした顔になり、楊愔を見たまま黙ってしまふ。顔をあからめ、不意に気付いたように年齢を言い、すぐに、

「あんたの番よ」。

と、高洋を前に押し出す。高洋はするりと逃げて母の後ろに隠れる。二人の姉が腕を引っ張って前に出す。高洋は下を向いたまま聞き取れぬくらい小さな声で自分の名だけを言う。

婁氏は高洋の肩に手を置き、

「御覧の通りの子です。この子に学問を授けて下さる教師を探しております。先生は、この子に、第一に何を教えて下さいますでしょうか。」

その声に懐かしいものを感じる。

楊悳の母は早くに亡くなった。いまの妻氏とさほど変わらぬ年齢であった。「孝と悌でありましょう。合わせて家族の和にございます。人として教わるべき第一がそれで、死に至るまで何よりも大切なものであります。」

崔悳が膝を打つ。

「実に感銘深いお答えだ。この方はいま何よりも大切と言われたものを失われたばかり。それだけに、それをお教える最良の教師だ。」

「御一家の悲劇は聞いております。悲しみはいかほどであるか、私どもの想像の及ばぬものがありましょう。もしよろしかったら、先生が御一家のなかでどのようにお育ちになったのかお聞かせいただけませんでしょうか。」

楊悳は問われるがままにかつての日々を語る。それが永久に失われた悲しみに胸が塞がる。

「お母様はどのようなお方だったのでしょうか」。

その問いに涙の堰が切れ、楊愔は答えられない。

崔悛が引き取って、源子恭の前で楊愔が詩を朗唱したことを話す。

楊愔は驚嘆する。

「どうしてそのようなことを御存知なのか」。

「楊家是我等にとつてお手本。我等は楊家を見て何が正しいかを知ったと言つてよい」。

過剰な褒め言葉に、楊愔は身を小さくする。

婁氏は高洋を押し出し、

「この子は立派な大人になりますでしょうか。この子はろくに挨拶もできません。それでも、母親の鼻肩目でしょうか、何となくこの子が大きな仕事をしてくれるような気がするのです。先生の御幼少のころのことを伺って、幼いころに普通に口がきけなくても、それで駄目とは限らないと知り、少し安心しました。この子を先生と比べるではありません。どうかこの子をお導

きいただけないでしょうか」。

楊憎はどのように返事をしていいかわからずに頭を垂れる。

婁氏は急に口調を変え、

「しかしながら、私はいま別のことをお願いしなければなりません。我が夫は困難な仕事に挑んでいます。夫が一人でできることなどごくわずかです。たくさんの方の力を必要とします。力は武だけではありません。武はせいぜい半分です。残りの半分は、幸いにも崔先生が来て下さいましたが、まだお一人です。どうかお願いします、この子よりも先に、まずは夫をお導きいただけませんか」。

「私にそのようなことが務まるとは思いません」。

ここで謙遜するのは自然であるが、楊憎の心に迷いが生じている。

——いまさら何を躊躇するのだ。鞏隊長に「任せる」と言った。それが生きる唯一の道だった。しかし、鞏隊長は信じてよかったのか。高歓なる人物は信じてよいのか。

「先生でなければなりません。先生にももしもお断りされましたならば、この先、夫のもとには誰も来て下さらなくなりましょう。崔先生にも見限られてしましましょう。私にはわかるのです。先生にいていただけなければならぬのです。どうかお願いします。夫だけのことではありません。天下の民のためです」。

婁氏の声に確信が生じる。

——この人を信じよう。

信都に身を託す決意を告げる。

婁氏は喜び、上の姉に、

「すぐにお父様を呼んでいらっしやい」。

娘は跳ねるようにして出て行き、間もなく高歡の手を引いて来る。

高歡は破顔一笑、

「やはりまたお会いできましたな」。

婁氏は、

「またとおっしゃいますのは、先生とは以前にお会いされていたのですか」。

「牛の血を吐き出すよう、わしがお教えしたから、先生はこうして生き長らえておられるのだ」。

楊愔は記憶を呼び戻す。

「まさか、あのときの」。

「そうです。あのときは名乗りませんでした。御本を読むのを邪魔した無礼者であります」。

高歓は、訝しげな妻と崔悛にあらましを告げる。

崔悛は、

「そういうことでしたら、直接お連れするのでした」。

「いや、最初はうちのかみさんに見てもらおうのがいい。わしだって、かみさんの目には適ったからいまこうしていられるのだ」。

高歓は楊愔の腕を掴み、

「失われたものは残念ながら取り戻せません。しかし、新たに作ることなら

できましよう。それをともしやろうではありませんか。先生ばかりではない。この広い天下には、先生と同様の人が大勢いる。名も知れぬ人々が、先生と同様の目に遭っているのです。その者達の悲しみは先生と同じです。先生にも、他の人々にも、取り戻してやることはできなくても、新たに作り出すことならできのではないでしょうか。わしはそれをしたい。天下の行く末は人をどれだけ信じられるかにかかっていると、先生はあのとときに教えて下さった。わしは、先生とも人々とも信じ合って大きな仕事を成し遂げたい。どうか力を貸していただきたい」。

楊愔の目に涙が滲む。

——我が一族は失われた。それでも新たにまた生み出すことができるのなら、家門の法を守るの一人ではなくなる。家門の法はただ我が事のみを言うのではありません。天下に通じるものであるはずだ。

「どうかこの私をお仲間に加えて下さい」。

高歎は楊愔の腕を掴んだまま、

「おまえたちもこちらの先生と信義の交わりを結ぶのだ」。

高歓は、自分の手と婁氏と子ども二人の手を、楊愔の手と重ね合わせる。

「それにしても、先生は以前よりも随分と痩せておられる。余程の難儀をされたましたな」。

楊愔は塩と飯しか食べていないことを告げる。

高歓は顔を曇らせ、

「大業を為す前に御自身のお体を壊してしまつては何にもなりません。聞くところでは、先生の伯父上の楊椿殿は、馮太后の亡くなった悲しみから食事をとらないでいる孝文帝を強くお諫めしたのではなかったですか。信都に來られたからには、先生には、お体を強壯なものにするところから始めていただかなくてはなりませんまい」。

楊愔は、高歓が楊椿のことを知っていたのを驚く以上に、自分が家門の法を理解できていないことに衝撃を覚える。

楊愔は、どのようにして己の前に道が開けると考えるようになったのか。

* * *

高歡の屋敷から下がって、鞏隊長と話をすると、楊愔はたちまち不安に陥る。

「ここで私はやって行けるのだろうか」。

鞏隊長は、いかにも作りましたという感じの笑みを向ける。

「若旦那様ならきつと大丈夫ですとも。高歡様にも、お母様にも、頼むとお願いされたのではありませんよう」。

「私はこれまでに本を読む以外に何もしたことがない。一体何がここでできるのだろうか」。

鞏隊長は、楊愔が高歡と会っている間に、崔悛の従者をつかまえて、信都に集まる人々についてこまごま尋ねた。それを聞けば、楊愔でなくても怖気づくのはやむをえない。

崔悽を除くと、高歡のまわりにいるのは、戦場で何十人、何百人殺したか知れない連中ばかりだ。高歡自身にしてもそうだ。

高歡の最も近くににいるのは全て鮮卑系の武人だ。高岳(こうがく)、高隆之(こうりゅうし)、高徳政(こうとくせい)など高姓の者は、近縁であれ遠縁であれ、何らかの繋がりがあつた。

高岳は命知らずの武將だ。敢えて危地に身を置いて勝利を得るのを得意とする。戦に勝つて戦利品を獲ると、盛大に部下にばらまき、派手な酒宴を催す。見るからに恐ろしげな風貌であるが、部下に人気がある。

高隆之は身の丈八尺、美しい顎鬚、頬髯を自慢し、美鬚髯公(びしゅぜんこう)と自称する。鎧兜を美しく飾り、戦場においてことさらに目立った活躍ぶりを人に見せ付けようとする。特に気に入つた部下にはやはりよい格好をさせ、己がさらに引き立つようにする。

高徳政は目から鼻に抜ける切れ者だ。戦場で手柄を立てるよりも、常に高歡のすぐ近くにおいて、高歡が言うよりも先にその意に合うように事を為そう

とする。自分の才だけが頼りであるから、部下といえるようなものはそれほどいない。

高姓以外で最も重んじられているのは、策略家の孫騰である。孫騰は大きな計略は立てるが、高德政ほどの緻密さはない。話の大きさに比べて胆の小さいところがあつて、戦場で自ら武器を持って戦うのは得意でない。

孫騰は高歡の一番古い任侠仲間の一人で、旧友のなかには、司馬子如や侯景（こうけい）のように、いまは爾朱氏側にいる者も少なくない。

司馬子如は親分肌、勇み肌の豪傑で、戦に滅法強い。都から逃げる爾朱世隆を引き止めて、河橋で官軍を粉碎した人物である。情にあつく、部下を可愛がつて惜しみなく物を与える一方で、気に入らない者には処罰を全く惜しまないという二面性がある。

侯景は何よりも戦が好きで無頼漢である。己の気分の赴くままに行動し、人に命じられて強制されるのを極端に嫌う。

漢族としては、高乾、高仲密、高敖曹の兄弟が目立った存在だ。

鞆隊長は言う。

「確かに、一癖も二癖もありそうなお方ばかりのようです。この小さな町から天下をひっくり返そうというのですから、それでなくてはならないでしょう。しかし、御心配には及びません。若旦那様は暴れん坊どもと同じではありません。文に優れるお方は、崔様だけなのでございましょう。人より先にここにお越しになったことで、きっと特別に大切にいただけたでしょう」。

「取り柄が先に来たということだけではどうなのだろう。崔様もお見受けしたところそこのやわな男ではない。私などがなかに入って行けるのだろうか」。

楊憎は不安に押し潰されそうになる。

「案ずることはありません。若旦那様は他のお方とは違うのです。楊家の若旦那様として泰然と構えていらっしゃればよろしいのです」。

「家名に頼るといふことかい」。

「お家のため、天下のためです、いくらでも家名に頼られてよろしいではありませんか」。

* * *

信都の主だった者が集まる寄り合いに連れて行かれる。

崔悛に従って入って行くと、笑いの渦だ。一見恐ろしげな風貌の武人がずらりと並ぶが、笑い顔を見ればどこかあどけないようなところさえある。

策略家の孫騰が五十歳と、一人だけ重々しい感じがするほかは、ほとんどが三十歳以下で、命知らずの高岳にしてもまだ二十歳で、楊悛と一歳しか違わない。お母様もいてけられ明るく笑っている。

崔悛が楊悛を一堂に紹介し、道行く人々に向かって話したのと同じように、楊一族を襲った悲劇を語る。語り口のうまさもあって、涙を流す者さえいる。

鞏隊長に言われたことを思い出し、努めて泰然と構えている。それで信都における楊悛の立ち位置が自ずと定まる。信都勢力が義をもつて邪悪な爾朱氏に立ち向かうことを天下に示すまたとない旗印に楊悛がなると認められた

のだった。

当面の仕事は崔悛の手伝いだ。信都に続々と人が集まつて来る。人や物資を管理しなければならぬ。種々の書類が要る。時折、婁氏に呼ばれ、高洋や姉達に学問の手ほどきをする。

鞏隊長は高歓のはからいで楊愔の身边警護の役目を与えられ、常に一緒にいることができる。

定期的に開かれる寄り合いで、策略家の孫騰が、信都に誰かしら皇族を連れて来て皇帝に立てるべきだと言う。爾朱氏側に皇帝がいるのだから、対抗上、我が方にもいた方がいいと言うのだ。

高歓は賛同しない。爾朱氏はこれまでに三人の皇帝を立てた。自分達の都合でいい加減に人を見繕って皇帝に仕立てるやり方は、爾朱氏に対する反感を生む一つの要因となっているのは間違いない。他の者もあまり感心しない雰囲気である。

そこに崔悛が例のよく通る声で、孫騰を是とする論を滔々と並べ、高歓に

強く勧める。他ならぬ天下第一の名家の崔悛が言うのだからと、高歡は決断する。誰を皇帝にするかという議論になり、元朗（げんろう）なら連れて来られるという。やや傍系で、これといってよい評判は聞かないが、手近なところでは元朗しかいないということが決まる。

新参者である楊愔は、このような重大事に関わるのははばかられ、寄り合いの後で、我等が皇帝を立てることにどのような大義があるのだろうか、そつと崔悛に尋ねる。

「皇帝を立てば大義が具わる。その逆ではない」。

事もなげに答える。

「私の一族は朝廷に仕え、ずっと忠節を守って参りました。皇帝を自分達で取り替えてよいものなのでしようか」。

「私の一族も同じだ。取り替えてよいかどうかは知らぬ。肝要なのは皇帝に忠節を尽くすこと。そなたも一族の方々と同じように、誠心誠意努めればよい」。

「誰が皇帝であつてもよいものなのでしようか」。

「さかのぼれば、鮮卑族が初めて中原（ちゅうげん、洛陽を中心とした中国の核心部分）に侵入して来たときに、我等清河の崔氏にしても、そなたの弘農の楊氏にしても、鮮卑族の首長に仕えるべきだと考えた人間がいたであろうか。誰もいなかった。鮮卑族は敵だった。我等の先祖はあるときに鮮卑族の皇帝に仕えようと決めた。それが中原に住む人々のためになると判断したからだ。漢族が仕えたことで魏は大国となった。その歴史が魏朝の皇統を作った。その皇統を守る者が皇帝であるのだ」。

「そうしますと、この先、恐らくは遠い将来のことでありましょうが、我等か我等の子孫が魏朝の皇帝でない誰かに仕えようとするようなこともあるのでしょうか」。

「言うまでもないことだ。一つの王朝が未来永劫にわたって続きはしない。いつかは漢人の皇帝を上にかきたいと、漢人が望むは自然であろう。それが叶わないのなら、別の皇帝でもいい。そなたの家も、私の家も、この中原に

おいて、魏朝の皇室などよりは遙かに長い歴史を持っている。我等の根本を見失わずにいるのが肝要なのだ」。

* * *

十月、元朗が信都に来る。宮中に関することを知るのは崔悛と楊愔だけであるから、二人が中心になって即位の儀などの段取りを整える。

新皇帝が誕生し、中興と改元し、大赦令を出す。皇帝がいれば、その下に朝廷がなければならぬ。高歓が大丞相で、以下信都の面々がそれぞれに官位を持つことになる。

朝廷をどのように作り、どのようにそれを動かして行くのかを知っているのは、やはり崔悛と楊愔しかない。朝廷には皇帝の発する詔に始まって種々の公文書が必要だ。それが書けるのも二人だけだ。崔悛と楊愔は俄かに忙しくなる。

崔悛は言う。

「我が方の朝廷が爾朱氏側の朝廷を負かすのは武力によるだけではない。我

等の文書が敵方よりも優れるならば、我が朝廷こそが天下を治めるべきだと人々が認めるようになり、自ずと才ある者が集まって来る。我等は筆で戦うのだ」。

楊愔は崔悛とともに文書を書きまくる。

「どのような種類のものもたちまちまちお書きになる。これまでに朝廷にお仕えしたことがなかったとは信じられない」。

感心する崔悛に、高山で邢邵に習ったことを明かす。

「成程、成程」。

崔悛はやや不興顔だ。邢邵の評判の高さを気に入っていないのだろうと用心する。

日々仕事に忙しくしている楊愔に鞏隊長が言う。

「このようなことでよろしかったのでしょうか」。

「何のことかい」。

「若旦那様をここにお連れする以外の道はなかったのかと、いまになってふ

と思つたりもするのです。若旦那様のことがだんだんとわかつてまいりますと、後悔というのでもないのですが、申し訳なく思えて来るのです」。

「ここでなくて他にどこがあるうか」。

「あつしは自分ではできないことを若旦那様にしていたただきたくてここにお連れしました。それはあつしの身勝手だったのではありませんか」。

「私とそなたは同じ考えだ。だから、そなたに身を託した」。

「若旦那様の御苦労は始まったばかりです。一年や二年ですむものではないのでしよう。この先、長くこのようなが続くのでいいのでしようか」。

「私にはできそうにないことを無理にやっていると、そなたは見ているのかい」。

「いえ、そうではありません。若旦那様はきつとおできになります。でも、それでも何か違ふと感じるのです」。

「そなたが言いたいこともわからなくはない。私はこれまでずっと書物を読んで暮らして来た。それしかしたことがない。それが自分には一番似合つて

いるのだらう。楊家もとのままだったら、ずっとそうしていただらう。だけれど、いまは違う。そなたと私は同じ考えだと言ったが、私は楊家に生まれ、たお蔭で何の苦労もなく育った。そなたとは全く違う。そなたには苦労ばかりがあった。私は一族を失うことで、ようやくそなたと同じになった。それもまた私が楊家に生まれた定めであるのだらう。そなたのお蔭でここに来て、やはりそなたのお蔭でどうかこのようにしていただけるようになった。私をもっともつと励まなければならぬ。そなたに心配されるようではいけない。要するに、私はまだまだ未熟なのだ」。

* * *

日を決めて皇帝元朗のもとで朝儀が行われる。崔悛と楊愔が活躍する場であるが、あくまでも形式的なもので、大事なことはいまままで通り皆が集まる寄り合いで決まる。

二人でせつせと書く公文書も実質的にはさほどの意味がないのだが、「必ずこれが力を持つようになる」。

崔悛は筆で戦うことに情熱を注ぎ、真の意味を持った文書が生まれる。爾朱氏追討の檄文だ。楊愔が草稿を作った。

「さすがだ。一族を滅ぼされたそなたでなければこれは書けない。これを読めば、誰もが武器を手にして立ち上がらずにはいられないだろう」。

檄文は全土に飛ばされる。これによって崔悛と楊愔が高歡のもとにいることが広く知られ、二人がいるのならばと、名のある漢族士人が信都に来るようになる。

檄文に反発して、爾朱兆が晋陽から攻めて来る。高歡はそれを秘かに恐れていた。信都に人は多い。その大半が二十万の流浪の民で、鍛錬を積んだ戦士は多くない。武器や食糧の備えはほとんどない。攻められて守れる状況にない。

策略家の孫騰は、敵が来るのを待っていては必ず負ける、打って出る以外にないと主張する。命知らずの高岳は、洛陽の爾朱世隆の動きを心配する。切れ者の高德政は、爾朱世隆を洛陽から動かさない策を出す。爾朱兆と爾朱

世隆は仲が悪い。晋陽と洛陽に人を放ち、二人の溝をより深める工作をする。

爾朱世隆が洛陽から動かないと見定められると、ただちに高歡は信都から打って出る。爾朱兆の不意を衝き、数で圧倒する敵を破る。

勝利を祝う宴で、高歡は鄴を攻め取ると宣言する。皆が勇む。

「我等は天の時を得た。これを逃してはならない」。

鄴を新たな根拠地とすべく、皇帝以下の全ての者を連れて信都を発つ。

邯鄲の近くで、楊愔の馬を止める者がある。

「楊の御家につながり、多大の御恩を受けながら、讎を為したこの者にどうか罰をお与えください」。

楊愔を売った楊寬だ。罪を詫びて地に打ち付ける額が割れて血が噴き出る。

楊愔は馬を降りる。

「人は時に恩義を忘れます。それもまた常理なのでしよう。嵩山を出てより邯鄲の家で世話になりました。その恩義を返していません。そなたが私を恨まず、私もそなたを恨まない、それでよしとしてはくれまいか」。

かつて楊愔の父は、兄に仇をなした男を赦した。それが家門の法である。鄴では、劉誕が頑健に抵抗する。

高歡は手を焼き、戦いは年をまたがっても終わらない。葛栄が鄴を攻め切れずに爾朱栄のために敗れたことが思い起される。葛栄が負けたことで楊愔は解放されたのだが、今度は逆の立場だ。

「我等はなお天の時を得ぬのか」。

高歡は信都に一度帰るべきかと迷う。

楊愔は婁氏に呼ばれる。

「ここで引き下がったならば、天の時を得ていないと自ら認めたことになります。大業は水泡に帰してしまいかねません。天の時を我等が得る方策はないものでしょうか」。

楊愔は一考する。

「古の軍師は、天を祀って勝利を導いたと聞きます。人の力で本当に天の時を得られるかどうかは存じませんが、人の心を一つに合わせることはできま

しよう」。

「先生に天を祀っていただけですか」。

「お上にお願ひするのがよろしいかと思ひます」。

「失礼ながらお上ではいけません。もしも天が祈りを聞いて下さるとして、私がいいますに、先生のほかに誰がいるでしょうか」。

婁氏の強い要請に、楊愔は潔斎し、天を祀る文を作り、壇を築き、火を焚き、一心に天に祈る。

高歡はそれに合わせて鄴城に総攻撃をかける。天によるのか、人によるのか、楊愔の前で壇上の火が燃え尽きようとしたまさにそのときに、劉誕は降伏する。

同じく潔斎して楊愔の手伝いをしていた鞏隊長がその結果に恍惚となつて言う。

「天は我等が正しいと見そなわされたのでしよう」。

「私には天のことはわからない」。

「若旦那様は不思議なお方です。やはり若旦那様はほかの人とは違つのです。それも私にはわからない。ただ自分に求められたことをしただけだ」。

楊愔の偽らぬ思いである。

高歡は鄴に入城し、

「この者が先生を洛陽に械送したのです。鞏君が罪を恐れて械を壊さなかつたならば、先生のお命はありませんでした。この者の処分をお任せします」。

劉誕の身柄が楊愔に預けられる。

「この方は、鄴の刺史としての職務を忠実に果そうとされました。もしも、私を洛陽に送らないで助けようとし、あるいは、城を囲まれて簡単に降伏したならば、むしろ厳しく罰しなければなりません」。

楊愔は劉誕を解き放ち、

「我が方に仕える気があるのなら私が取り計らつてさしあげましょう。希望しないのなら郷里に帰られるがよい」。

「これよりは老いた母に孝養を尽くすのをお許しいただきたい。二度と官に

は就きません」。

劉誕は東方に去る。

家門の法を守るとはいかなることであるのか、楊愔は手ごたえを感じる。

* * *

高歡が鄴に入ったことで、爾朱氏は危機感を募らせ、爾朱兆と爾朱世隆は諍いを解消し、結束して鄴を攻めると約束する。晋陽から爾朱兆が、洛陽から爾朱世隆が、長安から爾朱天光が、その他各地からも爾朱氏が鄴へと軍を進める。総計二十万と敵は言う。

このとき鄴にあるのは二千の騎兵と三万に満たない歩兵。城に籠っては勝ち目がないと、高歡は鄴を出る。

漢人兄弟の高敖曹が郷里より三千の兵を連れて参戦する。全員が漢人であるのを見て、高歡は言う。

「それでは十分に戦えまい。我が鮮卑の強兵を千ばかり貸そう。好きに使ってよい」。

「これらの者は十分に鍛えてあります。千の兵をお借りしても気持ちいが合わなければかえって勝敗に悪く影響します」。

高歡は笑って高敖曹に任せる。北魏の歴史を顧みて漢人の兵が鮮卑の兵に優った例はない。

爾朱氏側は足並みが揃わず、爾朱兆だけが真先に乗り込んで来て鄴城に夜襲をかける。軍馬が城の周囲を巡り、城門に波状攻撃をかける。その数およそ三千騎。簡単には破れぬと見て一旦は引き下がる。

高歡は、韓陵（かんりょう）の丘に円陣を組む。丘と城を結ぶ道に柵を設け、牛を繋ぎ、味方が不利に陥っても城に逃げ込めないようにする。

楊愔は円陣のなかに一人の歩兵として立つ。

「若旦那様がそこまでなさらなくても」。

鞏隊長が止めるのを振り切ってここに来た。

「城に残って筆を執る仕事をしていても私は咎められまい。だが、私は伯父上を思わずにはいられない。伯父上は、皇帝を無事にお帰しするために、淮

河の南岸に残った。皇帝が川をお渡りになったのを見届けると、円陣を組んで二日二晩、敵の攻撃に耐えた。そのようにするのが我が家門の法だ。我が一族にはいまこの私しかない。とすれば、一族の全ての者がしたことをこの身一つでなさなければならぬ。

土煙が立ち、大地をどよもして敵が向かって来る。

「天の義、天の時は我等にある」。

高歎が号令を發する。

戦闘の場に身を置くのはこれが初めてだ。楊愔の体が自然と震える。

——ここでもしも死ねば楊家は滅びる。戦ってこそ楊家の再興は成る。

楊愔の前に鞏隊長が立つ。

「若旦那様を信都にお連れしたのはこのあつしです。決して若旦那様を死なせたりしません」。

爾朱兆は、韓陵の陣がはなはだ寡兵であるのを見て、飛んで火にいる夏の虫とばかりに、喜び勇んで攻めかかる。敵の激突に韓陵の円陣が歪む。

戦鬪のそのような構図は楊愔にはわからない。目の前に迫り来る敵が見えるだけだ。それさえも幻影に似て、さほどに恐怖を感じない。はらわたが熱くなる。恐怖を消すのは憎悪だ。

——爾朱氏に勝たなければならぬ。我が一族のために。

楊愔は剣を振るう。

爾朱兆は、高歡を仕留めるべく円陣の中央を集中的に攻める。高歡が直接指揮する中軍が崩れ出す。

楊愔は敵に斬りかかる。爾朱氏に勝つにはこの者を倒さなければならない。楊愔の腕に血がほとばしる。痛みはない。鞏隊長が横から飛んで来る。敵は倒れる。

爾朱兆の激しい攻撃を高歡は受け止め切れない。命知らずの高岳が五百騎を率いて爾朱兆の前に立つ。火の出る戦いとなる。敵は後から後から湧いて来る。高岳は一步も引かない。爾朱軍の出足がわずかに緩む。横から高敖曹の率いる漢人部隊が激突する。爾朱軍は斜めにかわそうとする。その後尾を

歩兵部隊が衝く。

楊愔は変化を感じ取る。周囲の者が前に進み出す。楊愔も前進する。

爾朱軍は、横と後ろから圧力を受け、丘の斜面へと押し出される。高歡の中軍が反撃に出る。爾朱兆は平地に戻って態勢を立て直そうとする。爾朱軍が丘を下り出す。下にいた者は後方に退く。その緩やかな動きが、一瞬の後に怒濤に変わる。前の者は後ろの者に追われ、後ろの者は前の者に取り残されまいとする。高歡軍が雪崩となって丘を下る。逃げる敵を倒す。騎馬軍団が敵を遙か彼方へと駆逐し、歩兵隊が後に残される。

静寂が突然訪れる。楊愔は顔を上げる。空に薄い雲が流れ、西日が低く遠く漂う土煙を赤く照らす。

「我が方の勝利です」。

鞏隊長が言う。

楊愔は丘の中腹に立っている。足元に死骸が折り重なっている。向こうの平地に至るまでおびただしい数の死骸がある。

——これが戦か。

腕の痛みを感じる。

——憎しみの報いか。

切り裂かれた肉を見る。

——この手で倒した相手は爾朱氏ではない。この死骸のなかに爾朱氏の者は恐らく一人もいないであろう。

鞏隊長が寄って来て水をかけ、布で腕を縛る。

「この傷だけですんでよかったです」。

膝を折って鞏隊長は泣く。

「すまなかつた。意地を張らずに鄴城より出ないでいれば、そなたも危ない目に遭わずにすんだであろうに」。

楊愔は天を仰ぐ。

——家門の法に憎悪はあるまい。

日暮れまでに戦闘は完全に終結し、騎馬隊は先に鄴城に帰り、歩兵は隊列

を組んで引き揚げる。

城門で高歓が出迎える。楊愔の姿を見つけ、

「先生のお姿を見て安心しました。先生の大切なお体を傷付けてしまいましたか。これはわしの罪です。このようなことは今回限りです。これからはもう二度と先生に戦の場に立っていただくようなことはありません。先生ばかりではありません、わしの真の望みは、誰もが戦の場などに立たなくてすむようにすることです」。

* * *

韓陵の勝利によって情勢は高歓側に一気に傾く。

爾朱兆は晋陽に逃げ帰り、その敗報に、爾朱氏の諸軍は退却する。爾朱世隆は洛陽郊外で配下の將軍の裏切りによって殺され、爾朱天光も囚われの身となる。高歓が洛陽に入るのを邪魔する者はいない。

鄴から洛陽への道を楊愔が辿るのは三度目。械を付けられた身で天を疑つてからまだ一年にならない。

——天の時に適っているのか。そうであるのなら、楊家の再興も存外早くに果たせるであろうか。

楊愔は自信を深めつつある。その思いに沿うかのように鞏隊長が言う。

「若旦那様が信都にいらっしやらなかつたならば、このようにはきつとならなかつたでありましょう」。

「たまたま時期がよかつたのだらう」。

「いえ、若旦那様は他の人とは何か違うところがあるのです」。

「どこに違いがあるのか自分ではわからない」。

「例えばです、若旦那様がいらっしやると、何時の間にやら若旦那様のために何とかしなければいけないと、そんな気にさせられてしまいます」。

「それは私が頼りなく見えるということなのかい」。

「どうなのでしょう」。

鞏隊長は笑い、すぐに真面目な顔になり、

「この前はこの道で、若旦那様を洛陽にお連れしてはいけなかつたと思

いました。いままたここで、若旦那様のために、あつしが何をしなければいけないのかと考えるとしたら、どうなのでしょう、やはり洛陽には行かずにすませることのような気がしています」

「何を言い出すのかい」。

あつたはずの自信が揺らぎ始める。

「もうこれで十分なのではありませんか。若旦那様が信都にいらしてここまで来たのですから」。

「私のことをまた心配してくれるのかい。いつまでも心配をかけてしまうよ
うだ。ありがとう」。

楊愔は自分の弱さを思う。

——楊一族の先祖の誰にもまだ及ばない。

「あつしには、若旦那様を信都にお連れした責任があります」。

「そうしてくれたから斬られずにすんだ。私の前に道が開けた。いまはまだ
始まったばかりだ。全ての楊家の人々に代わって私は生きて行くのだ」。

楊愔は強い調子で言う。

か。
楊愔は、どうして世の外に逃れなければならぬと考えるようになったの

* * *

高勲は洛陽入城を目の前にして、邙山（ほうざん）の麓で足を止める。皇帝を別所に置き、主だった者を集める。

高勲が言う。

「我等には信都でお立ちいただいた帝があられる。我等は道を掃き清め、お上をここにまで御案内申し上げた。一方で、洛陽には先にお立ちになった帝がおられる。天が二つないように、地に帝はお一人であろう。我等はいかにすべきであろうか」。

策略家の孫騰が言う。

「洛陽に先に入って様子を見て来た者に聞いてみましょう。」

それに応じて、報告者は言う。

「洛陽のお帝はお姿といい御見識といい、まこと御立派なお方であられます。皇帝としては元恭の方が人心を集めるのによさそうなことを言いかけると、高歓はうなずき、一方で孫騰は苦り切った顔で咳払いをする。報告者は急に、「それ故にこそ、後に制し難き恐れなきにしもあらずと存じます」。

正反対のことを付け加える。

漢人兄弟の高乾が洛陽の皇帝は廃すべきだと言う。

別の者が、天下のためには皇帝は賢明な人物であるべきだと至極全うなことを言う。

高歓は膝を打ち、

「よろしい。天下の事を第一に考えるべきである。信都のお上にはここにお留まりいただく。我等は洛陽に入り、あちらのお上に臣下の礼をもってお目にかかろう」。

これで決まりだろうと楊愔は思う。

「それはなりません」。

崔悛の声だ。

高歓が不快そうに理由を尋ねる。

「もしも賢明であることを言うのなら、大位に登られるべきはただお一人です。我等が考えるべきは、賢、不賢ではありません。義があるか否かです。我等は爾朱氏征伐の正義の御旗を立てました。我等は、我等の皇帝を上に乗った王師をもって逆賊を成敗しました。都の皇帝は逆賊が立てたのです。勝利した我等が逆賊の皇帝を戴いたのでは、いったいどこに王師の義があるのでしようか」。

大位に登るべきただ一人と崔悛が言ったのは高歓であろう。

高歓はまた膝を打ち、あっさり崔悛に同意する。

「先生のお教えがなければ危うく間違えるところでありました」。

洛陽の皇帝元恭を崇訓仏寺に幽閉する。

ところが高歡は依然として邙山から動かず、孫騰と相談して第二の手段を採る。元朗はやはり皇帝にふさわしくないと考えたからだ。郊外の村に隠れ棲む元脩げん しゅう、孝武帝こうぶていを連れて来る。元朗から元脩へと正しく位が伝わるならば、崔悛がこたわる王師の義も継承される。

高歡は洛陽に入り、元脩が即位し、太昌と改元する。

朝廷の顔ぶれが一新される。爾朱氏に重く用いられていた者は追放され、大丞相高歡以下、信都で形だけ整えた朝廷の面々がほぼそのままでの正式のものとなる。爾朱氏政権に参与していた者でも、司馬子如、侯景といった高歡の旧友はしかるべき地位で優遇される。

高歡の入城に合わせて、新しい政権に期待する人々が集まり来る。胡太后政権末期からの混乱が終わって平和な世になってほしいと誰もが願う。

邢邵が都に舞い戻る。邢邵は爾朱氏の立てた皇帝元恭のために赦文を書いた後で、爾朱氏の横暴が際立つようになってから姿をくらましていた。楊愔は、天下のために高歡に推挙したいと、邢邵に申し出る。

「私は求められて断ったことがありますん」。

邢邵は相変わらず粗末な衣服のまままで高歡に会う。高歡は名高い邢邵を得たのを喜ぶ。

邢邵は楊愔に言う。

「君も、書物だけでなく、幾分かは人も見られるようになったようだ」。

徐帰彦（じょ きげん）という九歳の少年が高歡に目通りを願う。高歡の旧い恩人の子で、父母と死に別れて孤児になり、生きる術を求めて洛陽に来た。

高歡はその子を憐れみ、「そなたの子として育ててくれ」と命知らずの高岳に託す。改姓して高帰彦となる。

もう一人、家族と死に別れた者が楊愔の前に現れる。楊幼卿（よう けいけい）だ。亡き伯父の子である。運命の日にはまたま屋敷から離れた場所において助かり、名を替えて山中に潜んでいた。

「我等は二人になった。一人から二人に増えた。二人が三人に、三人が四人にと、必ず増えて行くであろう。力を合わせ、我が一門を蘇らせよう」。

楊幼卿の顔に我が一門ならではのものを見て楊愔は泣く。

楊幼卿は言う。

「生き残ったのは私だけだと思っていました。伯父上の戒めを常に胸に抱いて、今日まで生きて参りました」。

一門の法を守れとの楊椿の訓戒を、楊幼卿はその場で聞いていた。

楊幼卿は楊愔より少し年が上で、二人は対照的な少年時代を送った。楊幼卿は華陰の学舎で柰の実を拾う方に熱心で、年長の従兄の楊昱が都から帰って来ると、必ず小言を食らった。学問にあまりにも不熱心なことから、父親もあきらめて屋敷の内であらぶら遊ばせていた。そのことが爾朱氏の凶刃から逃れる幸いを生んだ。楊幼卿は生き残って深く反省し、学問に励みつつ時が来るのを待っていた。

「及ばずながらも、昱兄さんを手本にして、我が一門の法を実践したいと、山から出て参りました」。

楊幼卿は力強く言う。

崔悛が、その楊幼卿を新朝廷の重要な地位に抜擢してくれる。弘農の楊家は再興しなければならぬ家筋であると考えてくれるからだ。

爾朱氏に奪われた洛陽の楊家の邸宅が返還される。一門の復活に向けて大きな一歩であると楊悛は感じる。

* * *

宮城の太極殿で新しい百官が皇帝に拝謁する。臣下としての最高位にある高歡が一人だけ抜け出て最前列に立つ。その後ろを高歡旗下の武将達が固める。

半ばよりも後ろに立つ楊悛は、儀式が進むにつれて、不可解な感覚に襲われる。

——あの朝と同じだ。

太極殿から人が消えて行く。最初に消えたのは壇上の皇帝だ。驚いてよくよく見れば皇帝は玉座にある。しかし、楊悛の感覚としては消えてしまっただけでそこにいない。

次に高歓が消える。そして、高岳、孫騰、高隆之、高德政、司馬子如、高乾、高仲密、高敖曹と、前に立つ人々が皆いなくなる。崔悛を探すがどこにもいない。見返ると、太極殿に立っているのは楊愔ただ一人である。冷たい汗が背中を流れ下る。

拜謁の儀は滞りなくすみ、人々は何事もなく戻って来て、太極殿から下がる。

その出来事を一人心に留めておけなくて鞏隊長に話す。

「もう申し上げますまいと思っていました。でも、もう一回だけ言わせて下さい。もう十分なのではないでしょうか」。

「そなたはいつも心配してくれる。私はまだまだ心配させてしまう人間であるのだろう。確かに私は弱い人間だ。楊家の全ての人の代わりに生きると意気込んで、まだまだ未熟だ。弱くて未熟であるから、妙なものを見てしまうのだろう」。

「弱いか未熟とかではないと思います。若旦那様はそのようなお方なので

す。すぐに嵩山に参りましょう」。

「山が私の本当の居場所だと思うのかい」。

楊愔の心の底で嵩山に行きたい気持ちちが頭をもたげる。

——元に戻ってしまおう、

「いまは行けない。幼卿兄さんが山から出て来てくれて、私が行く訳にはい
かない」。

「わかっておるのです。お家のためにも、天下のためにも。でも、あつしは
思うのです、いまを逃しては、若旦那様は山にお帰りになることができませ
ん」。

「私は始めたのだ。まだ始まったばかりだ。これを成し遂げなければならな
い。山のことはもう言わないでくれ」。

楊愔は自分を納得させるように言う。

母の弟の源子恭が都に来る。源子恭は爾朱氏に迎合しない難しい立場を貫
いていた。

「括目して見なければならぬと言いましたのは十年余りの昔。今日こそそれを実践しなければなりません」。

源子恭は甥をじっと見つめ、顔を曇らせる。

「どうかなさいましたか」。

「胸が痛みます。そなたの顔の向こうに、亡くなられた方々が見えるような気がしました。そなた一人にこれからどれほどの労苦があるうかと思わずにはいられません」。

「私一人ではありません。幼卿兄さんもいます」。

「そうであつた」。

源子恭はさらに悩ましげな顔になり、

「お二人のために、微力ながらもお手伝いしましょう。楊家はまことに立派なお家。それだけに難儀なことも多かろうと思えます」。

*

*

*

高歡の決断は早い。新皇帝元脩の即位からわずか五日で、主だった者を連

れて鄴に帰る。

高歓以下の武将にとって洛陽は見知らぬ世界である。一方で、漢族士人にとっては馴染みがよい。都の有する見えぬ力によって己の率いる集団に亀裂が生じるのを高歓は恐れた。主だった武将としては美鬚髯公の高隆之が洛陽に残る。

楊愔は高歓に従い、楊幼卿は洛陽に残る。

「離れても、家門の法は一つである」。

従兄と誓い合う楊愔に不安はある。

崔悛は言う。

「王師の義は立てることは終わった。大事なのは次に我等が何をするかだ」。

五月、崇訓仏寺に幽閉されていた先の皇帝の元恭が毒殺される。爾朱氏によって皇帝に立てられてから一年とわずかである。

七月、高歓は、爾朱氏の最後の生き残りの爾朱兆の討伐に出る。洛陽から高隆之が参戦する。二方向からの攻撃に、爾朱兆は晋陽を棄て、爾朱氏発祥

の地、秀容に逃げる。

高歡は晋陽に入る。先に爾朱榮が見て取った通り、晋陽は軍事的に優れた場所である。高歡は晋陽に大丞相府を開く。崔悛と楊愔はその立ち上げの仕事を任される。

楊愔は晋陽に入るときに少なからず緊張する。かつて父に呼ばれてこの町に来たときは気を病んで山に籠らなければならなくなった。父が仕事をしていた建物がそのときそのまま残っていて、高歡はそこを使うように言ってくれ。それがよかったのか、恐れていたようなことは起こらずにすむ。それでも、晋陽の風光が楊愔に馴染み難いところであるのは否めない。

大丞相府は朝廷と類似の機能を持つ統治機構で、当面の主目的は、高歡が指揮する軍団をより強固にして六鎮起義以来の国の乱れを鎮めることにある。国の形としては大丞相府は朝廷の下に位置する。実際の政治を動かすのは大丞相府であるべきだ。そうでなければ、国を改めることができない。洛陽との関係をいかにして行くのか、大丞相府を作るのはなかなか難しい。

崔悛は自信に満ちて大胆である。その腕力で大丞相府は短期間で実態を有するようになる。それに並行して高歓の権威が高まる。大丞相府が朝廷以上の力を持つのならば、高歓は実質的に皇帝を超えることになるであろう。

大丞相府が整備されるに伴って、かつての「お母様」の笑い声のあった寄り合いはなくなる。楊愔は寂しく感じる。

混乱の余燼は各地に燻る。そのなかで、一人の人物が頭角を現し始める。宇文泰（うぶん たい）である。高歓と同じくかつては葛榮率いる反徒のなかについて、高歓と同じく武将達の心を掴み、己の力をもって独自の行動を取るようになった。宇文泰は長安を拠点とし、皇帝の詔を一応は奉じこそすれ、大丞相府には必ずしも従わないという姿勢を見せる。

十一月、ごく短期間だけ皇帝であった元暉と元朗が相次いで殺される。元朗は信都で立てた皇帝で、楊愔はその名のもとに数々の詔を書いた。その死を憐れむ気持ちがあつても湧いて来る。

「我等の任務の内に、過去に皇帝だった人を記憶に留めることは入ってない」。

崔悛はすこぶる割り切っている。

同じ月、高歡は、長女を皇帝元脩の後宮に入れると決める。長女とは、婁氏の脇にいて弟の高洋とともに楊愔に挨拶をした少女だ。あれから一年とわずかしか経っていない。

楊愔は婁氏に呼ばれる。

「母としては、娘が皇后になるのを喜ぶべきではありません。妻としては、夫の大業のために娘がお役に立つのを喜ぶべきであります。それでも、爾朱榮様のお嬢様を思わずにはいられません。お嬢様は皇后となりましたけれど、夫とされた方も、御自身でお生みなった皇子様も喪つてしまわれました。娘には何を申せばよろしいのでしょうか」。

これから皇后になる少女に楊愔は直接に会えない。自分の思いを率直に言うこともできない。史書に記される優れた皇后の二三の例を婁氏に示す。

晋陽城の門の外で、皇后となる少女の乗る車を楊愔は見送る。幸あれかしと祈るのだが、大丞相府の一員として、少女に過酷な運命を与える側に楊愔

は立っているのである。

この婚儀は朝廷と大丞相府が一体であることを天下に示す慶事である。大丞相府は初期の重要な時期を乗り越え、楊愔はしばし職務から離れることを許され、家郷の華陰に帰る。

* * *

郷里の屋敷は以前とまるで違う。爾朱氏によって破壊され、急いで造られた真新しい一つの建物だけが目に付く。

覚悟を決めていたのに、そこに足を踏み入れると、その場で倒れそうになる。かつての庁堂に匹敵する広さの床に、隙なく棺が並べられている。数えようとして、そのあまりの多さに、心は数え上げることが拒否する。これが爾朱氏のために犠牲となった我が一族である。

仮に屋敷内に埋められたまま一年半が過ぎた。このたび葬儀を営むのに合わせて、皇帝から、死者に対して生前よりも高い官位が贈られた。上から順に、太師、太傅、丞相、大將軍二人、太尉、録尚書及び中書令二人、僕射、

尚書五人、刺史及び太守二十余人である。一度の追榮がこれほど盛んであったことは過去に例がない。同時に亡くなった人がそれほど多く、一族の國家への貢獻がそれほどまでに大きかったのである。棺は追榮を得た者に限らない。官に就いていなかった者や女性はそれよりもさらに多い。

葬儀の当日、楊愔の心を表わすように、雪が野を覆う。ことさらに風が強く、楊愔は裸足で哭しつつ葬送の列の先頭を歩く。墓所まで二十余里（二里は五〇メートルほど）。亡くなった人々の一人一人を想う。全員を追思するには二十余里でも短い。会葬者は方に及ぶ。

家門の法を守り一族を再び隆興に導くことを死者に誓う。屋敷に戻ると、何もなくなつた安置所の広さに身が竦む。

——まこと幻であつたのか。

竹林脇の勉強部屋もない。屋敷に長くいることはできない。

「再び必ずここに賑わいを取り戻そう」。

従兄の楊幼卿と言ひ合つて、北と東に別れる。

——二人から三人、三人から四人。四人から五人。

従兄の姿が見えなくなるまで、楊愔は心に数を増やし続ける。いつか一族の学舎に多数の子弟が集うようになることを願う。

晋陽への道を歩み出すと、ふっと邢劭が現れる。

「また腕を掴んでもよかろうか」。

手を伸ばして来る。かつて邢劭に腕を掴まれて嵩山に入った。楊愔はわずかに身を引き、

「これからどちらにいらっしやるのでしょうか」。

「山水に呼ばれるままに」。

「都でのお仕事はよろしいのですか」。

「私を必要とするのならまた戻るときもありませんよう」。

邢劭は飄然と消える。

鞏隊長が楊愔の背後でぼそりとつぶやく。

「よろしいのですか」。

華陰は家郷である。楊愔はもはや振り返らず、また邢邵を追うこともせず、決然と歩み出す。

* * *

夢に楊侃を見る。あるときは、楊椿の言葉を伝えようとしてどうしても声が出させない。あるときは、楊侃に厳しく叱責される。夢は一度や二度ではない。

——あるとき自分は何を言うべきだったのか。

夢から醒めて、当時の気持ちを思う。伝えるよう命じられた楊椿の言葉に違和感があったのは確かだ。それに代わる何か楊愔自身にあったのかという判断としない。

——もしもいま楊侃に会ったならば自分は何を言うのか。

かつて晋陽に爾朱榮がいたときに、洛陽では皇帝元子攸が爾朱榮を消し去ってしまったと考えていた。楊侃は皇帝のために自ら剣を取ることを志願した。

いま晋陽に高歡がいる。洛陽で皇帝元脩は何を考えているのか。洛陽には従兄の楊卿兄がいる。楊卿兄は楊侃ではなく楊昱を見習うと言った。楊昱は相手が皇族でも憚らずに諫め、胡太后に向かって事実をありのままに伝えた。

楊愔と楊卿兄は同じ行動をとろうと連絡を取り合っていない。楊椿は「我が一族の行くところは天下の誰もが見て知るところだ」と言った。家門の法に照らして思うところを堂々と言えよ。しかし、「それでいいのか」と楊侃に問われて答えられる自信が楊愔にはない。

楊愔は、大丞相府での執務中にも、時折、ぼんやりと夢のなかにあるようなことになる。

崔悛が言う。

「お疲れであろうか。なお悲しみが深いのであろう。他の者には厳しいが楊愔には優しい。

高歡は秀容の爾朱兆を攻め、自害に追い込み、權威が一段と高まる。

楊愔は、信都でのように高歡と気軽に話すようなことははやらない。会う

のは公的な場だけだ。

高歡の長女は正式に皇后となり、夫である皇帝と、父である大丞相との關係を取り結ぼうと健気に努める。二十代半ばの血氣盛んな皇帝元脩は、十歳ほども違ふ少女が心を砕いたところで氣にかけない。皇帝は国を元來の正しい姿に戻すことに情熱を燃やす。

皇帝元脩の前には、皇帝元子攸の失敗例がある。高歡に対抗し得る軍事力がなければ、たとえ高歡を殺したとしてもその先がない。漢人兄弟の高乾に目を付け、皇帝は高乾を都に呼ぶ。宮中の宝物を与え、己の意のあるところをほのめかす。高乾は、臣下の礼として賜わりものは拝受しつつも、秘かに晋陽に赴き、高歡に皇帝になるよう勧める。そうなればどちらに忠誠を尽くすべきかで悩むようなことはなくなる。「妄言を吐くな」と高歡は高乾の口を覆う。高歡は、皇帝を自称して滅んだ葛栄と、高歡自身が即位を勧めた爾朱栄の失敗を見ている。

皇帝は、高乾が高歡に会いに行ったと知って激怒し、高乾を呼び付け、死

を命じる。高乾は皇帝の命令に伏す。皇帝は、高乾の弟の高仲密と高敖曹に刺客を送る。二人の弟は晋陽に走る。

皇帝は高歡誅滅を決意する。楊幼卿は楊昱に習って強く諫める。

「弘農の楊家はいつから高歡の僕になったのか」。

皇帝は大怒し、楊幼卿に死を命じる。

楊幼卿の死の報せに、楊愔は、雪の降りしきる葬送の列に我が身を置く。

あのときにはなかった真新しい棺が一つ最後尾に付け加わっている。無人の荒野の彼方から彼方まで棺が並び、ただ一人、自分だけが天に向かって哭している。

——幻だ。

楊愔は、その日を境に、全ての現実から遠いところに行ってしまう。

鞏隊長に何を言われても応えない。

——自分が従兄を死なせた。

そのことだけを思う。

大丞相府に姿を見せなくなつた楊愔を婁氏が心配し、雁門の温泉でしばらく療養させてはどうかと夫に勧める。

高歡は同意する。

「具合がよくなつたら、また戻つてもらおう。仕事の方は誰か代わりがいるだろう」。

大丞相府において楊愔の代わりになりたいと望む者は大勢いる。何しろ漢族士人で崔悛に次ぐ第二位である。

楊愔は鞏隊長に伴われて雁門に行く。

雁門は秀容よりもさらに北の地だ。世間の煩わしきから離れて静養せよという婁氏の厚意ではあるのだが、六鎮出身者であればこの風光が心の慰めになるとしても、華陰で育つた貴公子にとつてはそうではない。雁門はあまりにも索漠として、湯につかつて体は温もりを得ても心は凍るばかりだ。

——二人が一人に戻り、それもいなくなる。

湯煙が降りしきる雪に見える。葬送の列に、また一つ真新しい棺が加わる。

天に向かつて哭す者はもういない。

湯から飛び出し、裸のまま野を走り、地に倒れ伏す。

——待つまでもない。ここで死のう。

雁門で神経を擦り減らす楊愔に嫌な噂が聞こえて来る。楊愔に代わって大丞相府での仕事を引き継いだ者が、楊愔が回復したら洛陽に派遣したらいいと高歡に勧めていると言う。大丞相府と朝廷の関係を修復できるのは楊愔しかない、高歡もその気になっているらしい。

——楊侃に顔向けならない。

楊愔は、信都に着いたばかりのころの慄きを思い起す。高歡のもとにいたのは、崔悛を除けばみな武将ばかりだった。

——そのなかに混じってやっていけないとそのときに感じたのが正しかったのだ。

楊愔は、高歡と婁氏を信じた。しかし、その二人だつてこの北方の風光で育ち、もとより相容れるべくない人々だったのだ。鄴から洛陽に入るまでは

まだよかった。それから違う。

——一門復活を思い描き、人々が助けしてくれると思っていた。何という甘い考えだったのだろう。

楊愔は洛陽からの日々を思つて慄然とする。

——死んだのは漢人ばかりだ。

楊愔は鞏隊長にすがる。

「そなたは前からわかつていた。山に帰るべきだった」。

鞏隊長は信都に連れたことを謝る。

「以前とはまるで違います。この厳しい時期に高歓様に背いて逃亡するので。並々でない御覚悟が必要です」。

「全て任せる。この世の中からどうか私を消しておくれ」。

楊愔は、何に拠って己は生きられると新たに考えるようになったのか。

* * *

永熙二(五三三)年夏、皇帝は己の号令の及ぶ諸州から兵を集め、洛陽で大規模な閱兵式を行う。高歡に対しては、長安で身勝手に振る舞う宇文泰を討伐する準備であると告げる。皇帝は多くの兵力を調達できたことに自信を持ち、宇文泰と手を結んで高歡を滅ぼそうと考える。

高歡は、洛陽が長安と近いことを懸念し、北東に離れた鄴に皇帝を移そうと決め、同年七月、晋陽を発つて洛陽に向かう。宇文泰の動きを牽制すべく一軍を長安に差し向ける。

晋陽の大丞相府には高歡の弟が残る。その輔佐役として崔暹(さい せん)が抜擢される。崔悽と姓は同じだが、清河の崔氏より一等下る博陵の崔氏である。もとは漢人兄弟の高乾の家の書生で、妹が高乾の弟の高仲密に見染められてその妻となったことから出世の道が開けた。楊愔と同様に有能で、楊愔と異なり気が強い。

皇帝は十万の軍勢を率いて洛陽を出る。黄河を跨る河橋で決戦に臨もうと

し、いざそのときになって怖気づき、皇后も何もかも置き去りにして長安に走る。漢人兄弟の高敖曹が追う。皇帝はかろうじて追手を振り切る。

高歓は洛陽に入り、残っていた朝廷の重臣を、皇帝の暴挙を制止できなかつた罪で処分する。皇后は母のもとに送り返される。

十一歳の元善見（げんぜんけん）を新しい皇帝にする。逃亡した皇帝元脩は宇文泰に迎えられる。東西に二人の皇帝が並び、北魏はこのときをもつて東魏と西魏に分裂したとされる。実質は北魏の分裂というよりは、新しい二つの勢力の台頭である。

高歓は遷都を実行する。遷都の議を朝廷で立て、その三日後には百官および四十万戸の民を洛陽から動かす。皇帝元善見が鄴に着くと、高歓は、孫騰、司馬子如、高隆之、高岳といった鮮卑系の最も古い仲間と皇帝の周りを固める。鄴を鮮卑系の武将の監視下に置いて高歓は晋陽に帰還する。

長安に逃れた皇帝元子脩は依然として血気盛んで、宇文泰は処遇に頭を悩ませ、ついには毒殺する。代わって一緒に逃げて来た元宝炬（げんほうきよ）

を皇帝に据える。

天平二（五三三）年春、高欽は北方の敵を鎮めるために晋陽を離れる。事を終えて戻ると、ある婢（ひ）、下女がそつと告げ口をする。長男の高澄が、父の留守を狙って、父の愛妾の鄭（てい）氏にちよつかいを出したという。

「あれはいつからそんなにませたことをするようになったのだ」。

高澄はこのとき十五歳。漢人教師の指導のもとで、真面目に勉学に励んでいるはずだった。

鄭氏の婢を呼んで問いただと、確かに高澄が来て悪さをしたという。

「いまからこれでは、この先どうなるか知れたものでない」。

高澄を呼び付け、杖（じょう、刑罰を与えるための棒）で打って、部屋に閉じ込める。

妻の婁氏にも怒りをぶつけ、

「おまえの仕付けが悪いからだ。もうわしの前に顔を出すな」。

高欽は、婁氏には高澄と会うことも禁じる。

高歡は韓陵の戦に勝って洛陽に入ったところから次第に多くの妾を持つようになった。かつて皇后になった爾朱栄の娘も後室に入れ、澈(ゆづ)という男児を儲けていた。妻の婁氏との間は次第に冷め、この事件をきっかけに、爾朱栄の娘を正室にして、幼い澈を跡継ぎにしようと高歡は考え始める。

鄴から司馬子如が皇帝の様子を報告するために晋陽に来る。高澄は秘かに司馬子如に人を送って救いを求める。

司馬子如は高歡に会って要務をすませると、何気なく、婁氏の様子を尋ねる。高歡は苦り切った顔で、

「旧友の君であるから、家の恥も隠さずに言っておこう」

息子が悪さをしたので澈を後継者にするつもりだと言い、婁氏については、「あれはもとをただせば商人の娘。以前はあれでもよかったが、わしも大丞相の身だ。元の皇后を正妻とするくらいでないとなるまい」。

司馬子如はうなずくだけで何も言わない。

久し振りに酒を酌み交わして昔語りでもしようということ、かつての苦

労を語り合う。二人の最初の出会いに話が及んだところで、司馬子如は、ぼろぼろになった靴を取り出して目の前に置く。

「見覚えがありませんか」。

高歓ははつと気づく。涙がぼろりと落ちて、

「妙に酔ったか」。

気まずそうに顔を拭う。

その靴は、高歓と司馬子如の友情が永遠に続くようにと、婁氏が二人のために同じものを縫った片割れである。

司馬子如は言う。

「あの極貧の時代から今日までずっと支えて来られた『お母様』と、二人の婢と、どちらが正しいことを言うと考えるべきでありましょうか」。

高歓は靴を頭上に戴き、

「わしが間違っていた。どうか君の手で調べ直してくれ」。

司馬子如は、全ては二人の婢が仕組んだことで、冤罪であったとする。二

人の婢は自害させられる。

司馬子如は婁氏と高澄を高歡の前に連れる。

婁氏は遙か遠くで身を床に投じ、頭を叩き付ける。一歩進み、また叩き付ける。高澄はその横で一歩ごとに地に這いつくばって父を拝す。二人が繰り返すその動作を見て高歡は泣く。

「わしとお前たちの間に、いつこのような隔たりができてしまったのか」。

自ら歩み、妻と子を順に抱擁する。

高歡は司馬子如も交えて四人で酒を酌みかわし、

「我等父子、我等夫婦が元通りになれたのは君のおかげだ」。

司馬子如は言う。

「欲得で靡き来る者、あるいは権勢に恐れて従う者の心は浅く頼りになりません。古い信こそ大切にしなければなりません」。

「わしは思い違いをしていた。全てが意のままになると思い上がっていた。古い信があればこそ、今日のわしがある。古い信は、いまから作ろうと思っ

て作れるものではない。決して壊してはならないかけがえのないものだ。妻と息子は我が内に戻った。思えば人を信じることこそが我が大業の基だ。ああ、そのことを教えて下さったあの方をわしは探さねばならない」。

* * *

目の前に海が広がる。楊愔は波音に包まれて水平線を見つめている。彼方に魏の外の世界がある。

東の海に浮かぶ田横島。楊愔は劉士安（りゅう しあん）と名乗って近隣の人々に学問を教えている。小さな島であるから弟子とてわずかだ。島の人々から受け取れる謝礼らしきものは、一握みの野菜、一匹の魚があれば多いくらいで、暮らしが成り立つものでない。鞏隊長が畑を耕し、漁師の手伝いをし、ときに劉誕や王元景（おう げんけい）が秘かに送ってくれるもので命を繋ぐ。劉誕はかつて楊愔が救った鄴の元の刺史で、王元景は田横島を含むこの地方の太守だ。

楊愔は雁門を逃れると、岸边に衣冠を棄てて入水自殺と見せかけ、嵩山に

走った。かつての知り合いの僧を訪ねると、ここは洛陽に近すぎると、東方に連れられた。退隠した劉誕に出会い、田横島に隠れるのを勧められた。

波音と反対側に薪を割る音がある。鞏隊長が本格的な冬の到来に備えている。鞏隊長が近くにいと安心できる。

——海の向こうに何があるのか。

この海上の島にも東魏の支配は及ぶ。人々は貧困にあえぐ。どの家も子供は多い。満足な格好をした子はいない。ちよつとした病ですぐに死ぬ。文字などには一度も触れずに生涯を終える。お上は、このような島からも目こぼしなく租税を取り立て、屈強な若者を、労役のためあるいは兵士にするために連れ去る。

島の子供とかつての華陰の屋敷での少年時代との違いに楊愔は心を痛める。鞏隊長は言う。「若旦那様のようなお方は、この広い天下にほんのわずかです。後はみんな同じです。あつしも、この子供達よりまじった訳ではありません」。楊愔は、せめて字の手ほどきくらいはしてやりたいと思う。そ

それが何のためになるのかはわからない。ここの子供達と懸け離れた暮らしをしていたことの罪ほろぼしのようなものだ。

島で楊愔が生きていけるのは太守の王元景の支援があるからだ。王元景は、楊愔であるを知っていてその事実を隠してくれている。太守としての王元景は、民衆から様々な取り立てをする役を担っている。王元景が贈ってくれるものももとをただせば島の民衆から取り上げたものである。

楊愔は、人によってこの身が生かさされ、不条理によって幸いを得ていることをつくづく感じる。

海の彼方の世界を夢想する。そこには自分達のものを取り上げに来る役人はおらず、子供達が皆幸せに暮らす。

——遠い世界を想うまでもなく、もしもこの島が外から隔絶した世界であるのなら、この島には外から誰も来ず、島から外に持ち出されるものもない。一生この島のなかで、誰もが同じように暮らして行けるのではないのか。どうしてそれができないのか。

楊愔の胸が塞がる。

——海の向こうには行けない。

家郷の華陰を想う。まさに幻のような日々があつた。

——取り戻したい。

胸は焦げるばかりに痛む。一門を再興するとの夢は潰えた。

——海の向こうに行けず、家郷にも行けない。この島で不条理によつて生きてどうなるのか。

繰り返し寄せる波の彼方を眺め続けていると、ふっと舟が現れる。

——ここも世間から離れた別世界ではない。

舟はゆつくりと近づいて来る。

この海で見る舟は、島の漁師のものか、本土から来る役人のものか、稀に訪れる商人のものだ。いま波の上にあるのは、漁師や商人の舟よりは大きく、役人の舟とも違う。

薪を割る音が止まる。鞆隊長も気付いたのだろう、浜辺に降りて来る。

「何があつても若旦那様をお守りいたします」。

舟はほど近い岸边に着く。楊愔を捕えに來たのなら、狭い島だ、逃れようとして逃れられものではない。

舟より降りて來たのは想像すらない人々。楊愔を見つけ、先頭に立つて駆け寄つて來たのは、

「ああ、兄上でございますな」。

目の前に立つのは一見してまさしく楊一族の顔。従弟の楊宝猗（ようほうい）だ。

——これは幻に違いない。

叔父の子の楊宝猗は一族の葬儀のときに葬つたのだ。

「どうして君がここに」。

楊愔の目が霞む。

「全てはここに記されています」。

楊宝猗が差し出したのは源子恭の書簡。手にして、涙に曇つてすぐには読

めない。

書簡は告げる。楊家は楊愔一人になつたのではなかつた。楊宝猗のほかに楊愔の妹など幾人かが生存している。楊家にまた同じ悲劇が繰り返されるのを恐れ、源子恭は秘かに匿つて世の推移を見ていた。

高歡が源子恭を訪ね、驕つた心を改め、天下のため、万民のためにこれからの生涯を捧げる、そのためには楊愔がいなくてはならない、と言つた。

源子恭は、高歡の言葉は真実であると感じ、楊宝猗を用いてほしいと要望した。楊宝猗は高歡の近くでその言動を見て、間違いないと確信した。

「家門の法を守るのに、いまこのときを逃してはなりません。楊家のために、天下のために、晋陽にお帰り下さい」。

楊宝猗は楊愔の手を取る。

楊愔は海を見る。

——魏の外には出れない。戻らなければ一門の再興はない。このまま島にいたのでは子供達を幸せにすることもできない。

「どうしたものでしょうか」。

楊憎の心はすでに定まっていて、それでも鞏隊長に問う。

「お家のこと、あるいは天下のことは、あつしには考えられません」。

「何なら考えられるのかい」。

鞏隊長は答えない。

「私が心配でならないのかい」。

鞏隊長はうなづく。

——せめて自分にできることをしなければ。

「楊家の全ての人々のしたことを自分がする。それが初心であった。まだ何もしていない。叔父上のお手紙をいただき、宝猗君がここにまで来て、このまま島にいることはできない。私は晋陽に行く」。

鞏隊長はすつと一歩退く。

「若旦那様を信都にお連れしたのはあつしです。その責任はあつしなりに果たします。この次にもしも何かあったときには必ず馳せ参じます」。

楊憎は鞏隊長の顔を見つめる。

「何を言っているのかい。これまで通り私のそばにいてくれるのだろう。」

「あつしには若旦那様を連れて逃れた大罪がごさいます。」

「高歓様は赦して下さった。」

「あつしがいては若旦那様の妨げになります。」

鞏隊長は頑として聞かない。

* * *

晋陽の城門の外で高歓が待っている。大丞相自身の出迎えは異例だ。

「大業は一朝一夕には成りません。信都で申したように、先生とも人々とも信じ合って大きな仕事を成し遂げたいと、いま心の底から思っています。わしはかつての自分のその言葉に背いた。先生が帰って下さらなければ過ちは永遠に正せなかった。」

そのように高歓は言くと、脇に控える源子恭に、

「どうか甥御殿を括目して見て下さい。」

源子恭はしばし楊愔を見て、

「この者の目は、書物に記されている事柄の奥に血の通った人間の叫びがあるのを読み取れるようになったと思われます」。

高歡は大きくうなずき、

「先生をどのようにお迎えするのがよいのかわしはずっと考えていました。妻が申すには、最初にお願ひ申し上げた通り、倅を御指導いただくのがよろしかろうと。わしがいけなかつたとはいえ、一度は逃亡した者をすぐに元通りに用いることには口うるさく言う連中もいましょう。源子恭殿がいま言われたのを聞いて、妻の言う通り、学問の師としてお迎えするのがよいとまます考えます。それが大業への近道であるようにも思ひます。どうかそのようにしていただきたい」。

楊愔は高洋付きの教師となる。

高洋は七歳になった。相変わらず、母の後ろに隠れてもじもじしている。婁氏が引つ張り出して前に立たせ、両肩を抑える。

「さあ、しっかり御挨拶なさい。そなたの先生がまた来て下さいました」。

高洋はうつむいて頬を膨らます。母の手でぐいと押し出されて急に顔を上げる。睨み付けるような目でぎこちなく弟子としての礼を行う。楊愔は一步退き、臣下としての礼を返す。

婁氏は言う。

「先生はどうかそのようになさらないで下さい。この子が大丞相の倅でありまして先生の弟子です。この子は厳しくしないとすぐに甘えてしまいます」。

高洋は信都で会ったころとほとんど変わっていない。対して、兄の高澄は十五歳という年齢よりもかなり大人びている。父の妾に手を出した騒動はともかくとして、家臣の前に立つと威圧感を与えるまでになっている。高洋は、その兄を大の苦手としている。高洋の下には、同母弟と異母弟を合せて数人の弟がいる。弟達は折々に長兄の前に並んで挨拶をしなければならぬ。二男である高洋には弟を代表として言うべきことがあるのだが、もじもじと言い出せない。兄が焦れて怒りそうになると、泣き出さんばかりで、ますます

言えない。見かねて、二歳下の高浚（こうしゅん）が代わりを務める。高浚は淀みなく言葉を並べる。高洋はその横で悄然とうつむき、涙が垂れ落ちるのにも気がつかない。高浚が高洋付きの下男を呼び、「早く拭いてさしあげなさい」と叱る。高洋は真赤な顔で涙をすすする。

楊愔はかつての約束通りに、家族の和の大切さを最初に説く。高洋は素直に聞く。

晋陽に戻って、高歡は、最初に信都で会ったときと同じように気さくに振る舞ってくれる。婁氏とも話す機会が多い。晋陽の雰囲気は良好で、源子恭の書簡に記されていたのは真実であったと知る。

源子恭が匿ってくれていた人々と再会する。楊宝猗とともに同じ家で暮らせるようになり、一門の再興がわずかながら進んだ気になる。

邢邵が何時の間にか晋陽にいて、以前と少しも変わっていない。

* * *

ある日のこと、高洋に教えていると、高歡がすっと入って来る。楊愔は驚

き、慌てて大丞相に対するのにふさわしい挨拶をしようとする。

「先生にそのようにされては困ります。わしも先生に教え導いていただかねばならない身なのですから」。

何を教わっているのかと、高叡は息子に問う。

高洋は、突然の父の出現に身を縮め、小さな声でやっと、

「あのう、『漢書』であります」。

答えてから心配そうに楊愔の顔をのぞく。

楊愔はゆつくりとうなずき、

「太原（たいげん）公様は歴史に御興味がございまして、『漢書』から御興味のありそうな箇所を抜き出してお話申し上げます」。

高洋は太原公に封じられている。太原とは晋陽の別名だ。

「そうか、わしも聞きたいものだ。どうだろうか、今日は『漢書』よりも時代が少し下がって、孫堅（そんけん）父子について聞かせてはもらえぬか」。

楊愔は求めに応じて三国時代の呉国の草創期について語る。

漢朝の終わりの混乱期に生まれた孫堅（そん けん）は、一介の武人から一躍群雄の一人に数えられるまでになった。ところが、思いもよらぬ場所まで来た矢に当たって三十七歳で死ぬ。手塩にかけて育て上げた軍団はそっくり人の手に渡る。十六歳だった長男の孫策（そん さく）は、血の滲むような苦勞の末に父の軍団を取り戻す。いよいよこれからだというときに刺客によって命を奪われる。二十六歳だった。後を継いだのが弟の孫権（そん けん）で、十九歳だった。孫権は二十九年後に呉国の皇帝になった。

高歡は高洋の肩に手を置く。

「大業は一代で成るのは難しい。二代、三代と受け継がれて初めて大きく花開く。先生のお家も、二代、三代と御苦勞を重ねて、あれだけ大きくなられた。我が大業が成るのか、先生のお家の再興が成るのか、いずれも長く遠い道のりです。わしは必ず成就すると確信しています」。

高歡は楊愔を連れて部屋を出て、

「あれはあのような倅です。まこと頼りない。しかし、倅達のなかでこのわ

しを超える者がもしもあるとしたら、洋であろうかと思つています。いまのままでは勿論如何ともしようがない。それでもあやつには何かがありそうに思ふのです。父親の欲目と笑つて下さるな。どうかしっかりとお導き下さい」。

ある日、高欽は息子達を集め、たくさんの結び目があつてこんがらかつた紐を一本ずつ渡す。

「これを解きほぐしてみよ」。

皆は堅い結び目を解こうと爪を立てて懸命に取り組む。

高洋だけは紐を手にしたままぼんやりと何もしない。

「おまえは何をしているのだ」。

父が一喝すると、高洋は刀を抜き、紐をばつさり切る。

「何をした」。

高洋は真赤な顔で言う。

「乱れたものは斬るだけです」。

父は笑い、後に楊愔に言う。

「あれは追い詰められると大したことをするようだ」。

* * *

「どうも先生でないとうまくいかぬ」。

高歡の一言で、楊愔はほどなく大丞相府に復帰する。

大丞相府は以前より大きくなった。初期の大丞相府は、晋陽の軍団に奉仕する色合いが濃かったのだが、都が鄴に移ってからは、国の統治上の様々な面に大丞相府関わるようになった。組織が拡張され複雑になればいろいろな問題が生じる。

大丞相府において、漢人の文官としては崔悛が第一の地位にある。漢族士人は、崔悛の意に適わなければ大丞相府に加わるのが難しい。崔悛は非常に自負心が強い。自分が推薦した人物でも、その者が目立った仕事をするようになると、必ず欠点をあげつらう。相手が有能であるほどそれが激しい。同姓の崔暹などはしばしばその害に遭う。崔悛は高歡の信頼が厚く、毒舌の多くも実は事実根差している。誰も黙らせることができない。隣に楊愔

が再び並ぶようになる。と崔悛はいくらか独断を控え、やはり楊愔がいてくれた方がいいと大丞相府の人々は歓迎する。

田横島を出たときに、楊愔にはいろいろな思いがあった。楊家の再興、島の子供達の幸せ、天下の安定。それらに向けてすぐに何が大きなことができる訳ではない。大丞相府をよい状態にして行くことがいまできる一つである。

高欽は多忙だ。最も大きな仕事は国に平穩をもたらすことで、そのために頻繁に戦場に出て行く。戦はほぼ間断なくあり、軍団を指揮できるのは高欽しかない。皇帝がいる鄴にもしばしば行かなければならない。朝廷と大丞相府の関係は依然としてなかなか難しい。

長男の高澄は、そのような父に、せめて自分が都に常駐することで父の負担を軽減したいと申し出る。

「おまえはまだ若すぎる」

高欽は許さない。

司馬子如や孫騰など鄴にいる重鎮は、御曹司にぜひ来ていただきたいと揃って高歓に願ひ出る。

実は、重鎮の目論見と高澄の考えは正反対である。重鎮は若い高澄を甘く見ている。重鎮は皇帝を操りつつ、ついでに自分達の思うところを好きに行っているというのが近頃の実態である。高澄が来てくれればますますやりやすくなると思っている。高歓にはそれがわかっていいるから、息子に対して「うん」と言わない。

側近の孫攀（そんけん）が全く逆のことを言う。

「都に行かれましたならば、お坊ちやまはまるで見違えるようになりましょう。向こうの連中のあてのはずれた顔がいまから目に見えるようです」。

孫攀は高歓の信頼が極めて厚い能吏である。鄴にいる重鎮の孫騰の一族の者で、孫騰が大きなことを言う策略家であるのに対して、孫攀は緻密に事を運ぶのを得手としている。高歓が戦場にあるときには必ず孫攀が脇にいる。混乱しがちな戦場において、孫攀に任せておけば万事遺漏がない。

高歓は孫攀に勧められて、息子を試そうと考える。

「都に誰を運れるか、自分で選べ」。

高澄は崔暹を指名する。

高澄は都に入ると、年齢に似合わぬ威厳をもって重鎮の前に立つ。崔暹は、崔悽の重しから解放され、水を得た魚のように働く。崔暹は重鎮が相手でも全くひるまない。国の政は法に則って厳正に行わなければならないと堂々と主張する。都の雰囲気はひきしまったものになる。

高歓は孫攀を都に派遣し、息子の働きぶりを視察させる。重鎮はこれ以上息苦しくされては適わないと、孫攀を籠絡すべく連日酒宴を催して歓待する。大いに酒を呑んで意気投合するのが武将達の流儀である。孫攀は元来が酒が得意でない。一族の年長者である孫騰に酒を無理強いされ、孫攀は酒宴の最中に命を落とす。

高歓は激怒する。

「わしの右肱を折ったのは誰だ」。

司馬子如は真青になって晋陽に走り、平身低頭で謝る。

「代わりになる者をすぐにわしの前に連れて来い。そうでなければ許さぬ」。

司馬子如は慌てふためき、

「誰か探してくれ。頼む」。

楊愔に懇願する。

楊愔は邢邵の意見を聞き、崔悛の同意も得て、魏収ぎしゅうを推薦する。

漢族士人の若き才人であり、奇跡の生還者である。かつて爾朱栄が二千人の高官を惨殺したとき、残り数人となって陽が落ちた。誰が言ったのか、「腕もだるいし、もうよそうではないか」。殺戮に飽きた人々は、「後は勝手に自分で死ね」と、死骸の山の脇に数人を放置して立ち去った。そのなかに魏収がいた。ある人は、天がその才能を惜しんだのだと評した。

高歓は魏収を使ってみるがあまり感心しない。孫肇ほどに仕事が速くないと崔悛に向かってぼやく。

「魏収がよろしいと最初に申したのは邢邵でありました。邢邵も魏収も才は

まあまあありましよう。それはともすれば浮華に流れる都のようなところで喜ばれる才であります。戦の場で有用であるとは言えますまい」。

崔悛は以前から邢邵を好まない。魏収より優れる者として陳元康（ちんげんこう）を推薦する。陳元康は漢人兄弟の高敖曹が秘蔵する能吏で、それを崔悛がもらい受けて高歓に渡した。高敖曹は崔悛を師と仰いでいるので断れない。

高歓は陳元康を得て大いに喜ぶ。戦場に出て、馬上で思い付くままに並べる指示を、陳元康は後ろに従って一つも余さず記憶し、直ちに文書にして各方面に回す。真夜中に高歓に呼ばれても、闇のなかで筆を執って誤ることがない。ときに高歓は激怒するが、陳元康は常に冷静で、何時の間にか高歓の気持ちを鎮めてしまう。

楊愔は一人の友を得る。裴讓之（はい じょうし）という。聞喜（ぶんき）の裴氏といえ、弘農の楊家と同程度の名族である。裴讓之は十六歳で父を喪い、母に厳しく躰けられた。詩文に優れることで名を頭わし、高歓は子弟の教育

のために晋陽に招いた。

思えば楊愔には友といえる者はこれまでいなかった。邢劭は友というよりは師に近い。鞏隊長はあくまでも僕としての分を守った。幼少の頃より従兄弟と交わることも少なく、皇帝に殺された楊幼卿や、田横島に迎えに来た楊宝猗とも、家門の法を守ることでは志を一つにしつつも交わりは淡い。

裴讓之の風姿はまことに温雅である。しかし、内に秘めるものは堅固だ。公休が得られると二人で山野を巡り、かつて籠っていた具甕山にも行くなどし、詩賦を作り、思うがままに語り合う。これまで味わったことのない喜びがある。かつて伯父達が兄弟で夜を惜しんだのはこのようであつたらうかと思う。

裴讓之とともにいると、心が休まると同時に、田横島を出たときの思いが新たとなつて身が引き締まる。一門の伝統を受け継ぎ、自分の代で大きく発展させ、天下のため民のためになりたいと、二人とも同じように思うのである。

* * *

高歡は軍団を指揮して東奔西走の日々である。東魏は北と西と南を敵に囲まれる。三方で戦い続けるのは労苦が大きすぎる。せめて一方向だけでも戦火をおさめたいと南朝と和平交渉をする。当時の南朝は梁(りょう)国で、その初代皇帝蕭衍(しょうえん、武帝)は帝位にあること三十年を超え、国情は極めて安定している。仏教の篤い信奉者である蕭衍は平和を好み、高歡の申し出を受け入れる。

友好の礎を築くために、東魏の都の鄴と梁の都の建康の間を、使節団が交互に往き来することになる。漢人国家である南朝梁には、中華文明の正当な後継者は自分達であるとの自負があり、鮮卑族の北朝なんぞは武には強くても文化の程度は劣ると見下している。高歡は、梁の朝廷を驚かすに足る優れた人物を選んで建康に行かせようと考えてる。多くの者がやはり崔悛であろうと思う。当人には別の考えがあつて、より温雅な人物を推薦する。

東魏の使節団は建康に着くと、我が方の美点をことさらに南朝皇帝に示す。

優れた文章を書く者もいると、選りすぐりの作品を皇帝に献上する。そのなかに楊愔が書いたものもある。南朝の皇帝は、これらの文章を書いた者に会うてみたいと言う。

使節団が帰還すると、高歡は楊愔に言う。

「次は梁からの使者を鄴で迎えます。その次のときに、建康に行っていただけないでしょうか。先生を御覧になれば、向こうの皇帝は必ず驚きます。先生は天下にお一人のお方です。南朝にも先生のようなお方は決しておりませんでしょう。先生を、魏朝の使者としてだけでなく、わしの家族の一員として、向こうの皇帝にお見せしたい。わしは先生の家を再興させると約束しました。先生がわしの家族の一員となつて下されば、先生の家を再興はすなわちわしの家の繁栄ということになります。どうかわしの思うようにさせてはもらえませんか。つまりわしの婿になつていただきたい。まさかここで牛の血を吐き出すようなことはなさるまいと思ひますが」。

高歡は大笑する。

楊愔は、脳裏に一瞬だけそうする自分の姿を想像する。

——なぜだろう。

心に尋ねるが、断るべき理由はない。楊愔は二十代後半になった。一門の再興を目指すには子孫を持たねばならない。

高歡の婿になるといっても、先に皇后となつていまは晋陽に戻っている高歡の長女も十代の半ばを過ぎたばかりだ。高歡は、年齢の釣り合う娘を一族から選んで養女として楊愔に娶せようとする。

* * *

天平四(五三七)年、東魏は豊作に恵まれ、一方で西魏は凶作に見舞われる。南の憂いもなくなつたいまこそ東西の対立に決着を付ける絶好の機会だと、高歡は軍を西に出す。

食糧不足に悩む西魏は敗戦を重ね、高歡は破竹の勢いで長安に迫る。沙苑(さえん)において、宇文泰が指揮する敵の主力軍と激突する。高歡は優勢に戦を進め、彼我の情勢を見て勝利を確信する。それが油断を生み、思わぬ大

敗を喫してしまふ。西魏軍の猛反撃に、一転して東魏軍は退却に次ぐ退却を重ね、あれよあれよという間に洛陽が陥落してしまふ。

煮え湯を吞まされた高歓は、翌五月、軍団を立て直し、洛陽を奪還すべく晋陽を発つ。八月、洛陽郊外の邙山で両軍が激突する。漢人兄弟の一人の高敖曹が戦死する。高歓は意気阻喪する。

高敖曹はあくまでも漢人だけで編成した軍団を指揮した。東魏において唯一無二の存在だった。鮮卑系の武人は漢人を弱虫だと馬鹿にするが、高敖曹だけは別格だった。高歓は戦場においては鮮卑の言葉で指揮をするのだが、高敖曹がいるときだけは漢語を用いた。高敖曹は、漢族と鮮卑族が手を携え合つて新国家を建設して行くことを端的に示す象徴的存在であった。

洛陽攻防戦は、高歓の旧友で最も獍猛である侯景の活躍によつて、最後は東魏軍が勝利をおさめる。結局のところは鮮卑系の武将の強さが際立つ結果となった。

宇文泰は洛陽から撤退するに際して、有用な人物を長安に連れ去つた。裴

讓之の弟の裴諏之（はい しゅし）がそのなかにいた。

高歡は事が宇文泰に関わると冷静でいれられない。裴諏之が向こうで高い位を授けられたと聞いて大怒し、裴讓之とその四人の弟を獄に入れる。

「裴諏之はどこに行つた。すぐにここに連れて来い」。

裴讓之は静かに答える。

「三国の世に、諸葛瑾（しょうかつ きん）と諸葛亮（しょうかつ りょう）の兄弟がいました。兄の諸葛瑾は呉に、弟の諸葛亮は蜀に仕えました。兄弟が別々の国仕えたことで、呉の皇帝が諸葛瑾を獄に入れたとも、蜀の皇帝が諸葛亮を獄に入れたとも聞きません。二人とも皇帝の信任厚く、それぞれに国家のために大きな仕事をしました。私の母はここ晋陽におり、私は大王様にお仕えております。愚かな者でも、孝と忠を失うまいとするものです。もしも私に誠ありと認めていただけないのならば、道を求めにこの世の外に行くまでです」。

裴讓之は獄中で自決する意志を示す。

高歓はすぐに感悟する。裴讓之のように一族が東西に裂かれた者は少なくない。その扱いを誤ると国力を削ぐことになりかねない。

「先生の誠の万分の一でも息子どもにお授け下さい」。

裴讓之を獄から出し、引き続き子弟の教育に当たらせる。

* * *

高歓はかねて計画していた婚礼を行う。

楊愔の妻になったのは、高歓が特に選んだだけのことはあつて美人で才媛である。大丞相の婿となつて婚姻はよいことづくめのはずであつたのだが、この妻が楊愔を苦しめることになる。

一つは家風の違いだ。妻は漢人風の教育をいくらか受けたとはいえ、鮮卑族の伝統が根元にある。かつて楊家は皇族の娘を嫁に迎え、夫の死後、再婚を巡る考え方の相違から、危うく大事に至りそうになつた。家風の違いは初めは見えにくく、露わになつたときには抜き差し難いことになつている。

もう一つは気性の違いだ。妻は気が強い。高歓の養女であるのを鼻にかけ、

とかく我意を通そうとする。

さらにもう一つの要素もある。楊愔は異性に対し寡欲である。妻は多欲であり、派手な遊興を好む。楊愔が仕事に専念しようとする、妻は、自分が大切にされていないと怒る。

——牛の血を吐き出すべきであったか。

あらぬ後悔をする。

* * *

南朝に行く使節団の準備が始まる。楊愔は晋陽を発つて鄴に行く。心からほっとする。妻から解放されたのがこれほど嬉しいのかと、自分でも驚く。

使節団の副使に任命される。使節団を派遣するのは、形式上は高歡ではなく東魏の皇帝である。団長は皇族だ。

我が朝の盛んなるところを誇示するために、使節団の隊列はことさらに美々しく飾られる。胸を張って道を行くと晴れがましい気分になる。

楊一族は代々北朝に仕えた。それでも、楊愔の心の底に、南朝への憧憬が

あるのは否定できない。漢人国家である南朝は、向こうの人々が誇る通りに、中華文明の正当な後継者であるのは間違いない。もしも楊家の先祖が、鮮卑族の南下を避けて南の地に移住していたならば、楊家の人々は南朝に仕えていたであろう。爾朱氏によって滅ぼされるようなこともなく、楊家一門は大いに栄え続けていたかもしれない。

楊愔は夢想する。

南朝の都で向こうの皇帝に会う。北朝にもこのような人物がいるのかと向こうの皇帝が驚く。「どうだ、このまま健康に残る気はないか」と向こうの皇帝は問う。楊愔は無論断る。向こうの皇帝は残念がり、「我が朝の珍宝をもって君の身を購おう」と言う。田横島で魏の外に出たいと願っていたことはこのようにして実現する。

たわいもないこのような空想をするのは、結局のところは妻のせいであるうと気付いて、楊愔の心は暗く沈む。

黄河を渡り、碣磔(けつたつ)とうとう町に入る。楊家と縁の深い仏寺がそこに

ある。楊愔は一行よりしばし離れて寺に立ち寄る。

精廬に入つて礼拝すると、僧が迎えて、

「思いがけずお越しいただきましてまことに有難うございます。このよい折に、是非、御覧に入りたいものがございます」。

小さな部屋に案内される。奥の壁に一幅の画が架かる。

「これにございます」。

僧の言葉が耳に入り、その画に目を向けた次の瞬間から、楊愔の記憶は途切れる。何が我が身に起こったのか全くわからない。

気が付いたのは二日ほど経つてからだ。使節団はやむなく楊愔を残して南に去っていた。

画は父楊津の肖像。端然と座す姿が丹念な筆致で描かれている。父は若く、年齢はいまの楊愔とそれほど変わりが無い。全く異なるのは、神々しいばかりの尊さ。父の絵姿の前で、楊愔は大量の血を吐いて床に倒れた。牛の血ではなく自分自身の血だ。

意識が戻ってからもしばらくは高熱が続く。夢うつつに鞏隊長の腕にすが
る。

十日ほどして起きられるようになり、鄴から迎えの輿が来て、それに乗っ
て都に帰還する。

——どうしてこのようになったのか。

楊愔にはわからない。

使節団の副使としての任務を果たせなかったのを、皇帝からも高歡からも
咎められるであろう。それはどうでもいいことのように思える。大事なのは、
なぜ父の絵姿の前で血を吐かなければならなかったかだ。

都に着くまでの間に一つの結論に行き着く。

——父に叱られたのだ。

楊愔は父の書簡を受け取って嵩山を出た。しかし、父には会えなかった。

——父の子として自分は何をすべきなのか。

それを問わなければいけない。

——家門の法を守る決意のもとこれまで生きて来た。しかし、自分は叱られた。何が間違っていたのか。

都に着くと、すぐに皇帝に呼ばれる。思いのほか、お褒めの言葉を頂戴する。高歓も大層喜んでいると言う。

南朝の皇帝が、楊愔が父の絵姿の前で倒れたのを聞いて、「孝の極みだ。かような者が北朝にいるのか」としきりに感嘆し、褒め称えたのだった。

高歓からは、病が癒えるまで鄴でゆっくり静養せよとの使いが来る。楊愔はしばらく都に留まる。

——父の子として自分は何をすべきなのか。その答えがなければ晋陽には帰れない。

楊愔は書を読み、ときに鄴の街を歩く。

東西を山に挟まれた晋陽と異なり都の上には広い空がある。街を行く人は、晋陽では半ば以上が鮮卑系であるが、鄴では大半が漢人である。耳に入ってくる言葉が違う。

勢いのいい呼び声につられて立ち寄ったのは露天の並ぶ小さな市場。近
の人々が日を決めてここに集まり、売り買いをしている。商う者も、買いに
来る者も、ごくみすばらしい身なりだ。楊愔だけがそぐわれない。並べられて
いる品は畑や川の産物、それに檻樓やごみのような衣類、道具類である。従
者は、ここは来るべきところではないと言う。

楊愔には何か心惹かれるものがあり、市の立つ日を聞いて足を運び、次第
に顔馴染みができる。見るからに高貴な風体に相手は警戒するが、徐々に話
ができるようになる。一人と親しくなればまた一人増える。それぞれの身
の上を聞く。戦乱に迫られてあちこちをさまよい、都でならば何とかならう
かと流れ着いた者がほとんどだ。しかし、何とかなるものではない。都に流
入する者がいまも絶えない一方で、同じ数の者が消えて行く。市場に今日あ
る顔が次にもあるとは誰も思わない。朝廷に名を列ねる人々が豪華な暮らし
を見せつけている傍らで、誰からも気付かれることなしに死ぬ。国はそのよ
うな人々に目を向けない。田横島の子供達が放置されているのと同じだ。

庶民は羨望と憎悪をないませにして「四貴」あるいは「勲貴」という言葉を口にする。四貴とは、孫臏、司馬子如、高岳、高隆之の四人だ。四人とも高歓の旧友で、その権勢は赫々たるものがある。その四人に次いで、戦場での功業をもつて高い地位に昇った武将が勲貴である。四貴も勲貴も、形式上は皇帝から官位を授かって皇帝に仕える臣下であるが、皇帝よりも優位に立って、我欲を満たすために国家の機構を使っている。高澄と崔暹が都に来て、四貴も勲貴も幾分か慎むようになった。それはあくまでも表面上で、実際はより巧妙になって、国の富みは国のために使われるよりも四貴や勲貴の方に流れて行ってしまう。

市場に集まるような人で最も幸運なのは、何とか手蔓を得て四貴や勲貴の屋敷に入れた者だ。屋敷では最下等でどれほどき使われようとも、食べる物と寝る場所が確保できて、ここに来る者からは羨まれる。「大した出世だ」と、そのような連中の噂をし、その者にすがって自分もと皆が願う。

楊愔はかつての楊家の屋敷を思う。当時は書物を読むだけで、屋敷の使用

人とはほとんど話したこともなく、その者の境遇に思いを馳せたこともなかった。

——自分は何であったのか。

かつて嵩山を出たときに邢邵に言われたことを思い起こす。

——人というものをもっと知らなければいけない。

市場に足繁く通う。

楊愔はいかに自分が恵まれていたかを改めて知る。豊かな家に生まれたただけでなく、優れた人々に囲まれ、皆が導いてくれた。楊家の人々は勿論のこと、源子恭も邢邵も鞏隊長も崔悛も高歡も裴讓之も、その時その時に出合う人が皆で導いてくれた。

——自分は人に生かされていたのだ。それに気付くこともなかった。

楊愔はこれまでの歳月を思う。

——自分は何をして来たのか。自分にはどれほどの意志があったのか。

父の絵姿の前で倒れた理由を知る。

——家門の法は守るためにあるのではない。新たに何かをするためにある。父も含めて楊家の人々はそうして来たのだ。自分が目を向けることのなかった民衆のために何をすべきなのか。為すべきことを見出し、それを為さなければいけない。そのために自分は生きるのだ。

楊 愔は、世の人と己の違いはどこにあると考えるようになったのか。

* * *

晋陽に帰った楊愔を妻は極めて不機嫌な顔で迎える。

楊愔は、そのようなことには煩わされまいとする。高歡の養女であるからあからさまに疎かにはできないから、妻のためにそれなりの労力を費やさねばならない。

ある日のこと、人目を忍んで高洋がそつと訪ねて来て、楊愔の顔を見ていきなり涙ぐむ。

高洋は十歳になり、いまは裴讓之など幾人かの教師に学問を習っている。

「どうかなさいましたか」。

高洋はもじもじと言いよどみ、それでも懸命に言葉を出し、

「悲しいのです。いいえ、悔しいのです。怒つてもいます。だって、先生が
とんでもなく酷い目に遭わされているのですから」。

「私ですが。私は何の酷い目にも遭っていません」。

「父上がいけないのです」。

高洋は唇を噛む。

「何をおっしゃいますか。大丞相様にはこれ以上ないほどによくしていただ
いています」。

「あの女です。父上はどうしてあんな女を選んでしまったのでしょうか」。

高洋はぼろぼろと涙をこぼす。

楊愔はとまどう。

高洋は泣きながら、さらに驚くべきことを告げる。楊愔の留守の間に、妻

は高隆之の息子をしばしば家に導き入れていたという。高隆之は泣く子も黙る四貴の一人だ。

「僕は我慢がなりません。だから、僕はしようと思っっているのです。僕だって何もできない愚か者ではないのです。先生さえよろしかったら、僕に任せていただけないでしょうか。父上にあの女を引き取らせませう。どうかそうさせて下さい。僕だってできると思っています」。

楊愔は返事ができない。

「わかります。先生からは何もおっしゃれません。何もおっしゃらないで下さい。僕が勝手にします。きつといつか僕は埋め合わせをします」。

それから間もなくして、高歡は楊愔と顔を合せると、

「暴れ馬を御す術をわしはどうか会得したと思っっていました、雌馬だけは別だったようです。先生のお体を損なうてしまつては何もありません」。

高歡は養女を離縁させ、楊愔は独り身に戻る。

その同じ年（天象一（五三九）年）の五月、高歡は次女を鄴に送つて皇帝元善見

の妻にすると決める。

高洋がまた人目を忍んで訪ねて来る。

「僕は悲しいです。悔しいです。怒ってもいません。先生は家族の和を最初に教えて下さいました。父上はどうしてそれを壊してばかりなのでしょう。上の姉さんを洛陽に送り出すときに、母上は姉上に向かって泣く泣く言いました。父上と帝の間をしつかり保つようになさいと。姉上が嫁いだ先の帝はもうこの世にはおられません。そして、今度はもう一人の姉上です。姉上はまだ十三歳です。上の姉上と全く同じ目に遭わせようというのです。これが人の子の親の為すことですか。家族の和はどうなるのです。悲しくて、悔しくて、怒っています」。

「大丞相様も同じお気持ちであります。国ために、民のため、大業のためにそうしなければならぬのです」。

「そうですね。僕にだってわかっているのです。大業は一代では成りません。全ての家族がそのために身を捧げるのです。孫堅、孫策、孫権です。だ

けど僕は思うのです、父上が大丞相なんかになっていなかったならば、僕の家族はどうだったろうかと。二人の姉上は全く違う人を夫にできるのです。だって、あんなにすてきな姉上なのです。それが揃って不幸になるのを僕はじっと見ていなければならぬのです」。

高洋はぼろぼろと涙を流す。

「そのお気持ちに寄り添いたいと私は心から思っています。しかし、国家の大事です。私には、残念ながらできることはありません」

皇帝は十六歳になった。大丞相府との力関係をどうかしたいと考え始めておかしくない年齢である。四貴や勲貴の横暴は皇帝の耳にも入っているだろう。皇帝自身、あるいは皇帝周辺の人々、さらには、生きるか死ぬかの瀬戸際に暮らしている人々なかにも、皇帝の復権に願いを託す者がいても驚くに当たらない。

「先生を苦しめようとして申したではありません。先生にしかお話できないからここに来てしまったのです」。

* * *

洛陽攻防戦以来、西魏との間に大きな戦争はなく、東魏は以前と比べて幾分か穏やかな歳月が続く。

このようなときに、一致して危難に立ち向かっていたころよりも、かえって人というものは露わになるようである。大丞相府に集まる漢族士人は、鮮卑系の武人と張り合いつつ、漢族士人同士でも競い合っている。己の美点を見せようとして、かえって醜悪なところを見せてしまうこともある。楊愔が人それぞれの生き様に向ける視線は、嵩山を出たときに邢邵に疑われたのと比べて格段に鋭くなっている。

邢邵と魏収と楊愔の三人は揃って家柄がよく名文章家である。個性の違いは案外と大きい。邢邵は貴人の前でも粗末な衣服で平然としているが、魏収は時と場所に合せて細心の注意を払って衣服を選び、楊愔は一族の者がかつて着ていた通りの衣服を身に付ける。邢邵は自身の心のままにものを言い、魏収は相手の心を読んでものを言い、楊愔は家門の法に照らして慎重なもの

を言う。邢邵は人と競うということを最初から知らず、魏収は人と競うまでもなくその上を行こうとし、楊愔は競うとすればただ一門の先祖に及ぼうとするだけである。

その三人で晋陽に学校を作った。高歡の子弟や高歡のもとに集まる人々の子弟に学問を授ける。四貴や勲貴が横暴な振る舞いを改めないのは、一つには学問がないからである。三人で学校の必要性を説き、高歡の妻の婁氏の強力な後ろ盾を得て、開校に至る。

貪婪は学問のない武人だけではない。学問のある漢族士人でも欲望のままに不法行為に走る者がいる。その最も悲しい例が、人もあるうに崔悛である。崔悛は若くて美しい馮（ふう）氏を妾に持った。馮氏は奢侈を好み、美しい財宝、美しい着物、美しい装飾、美しい建物等を求めてやまない。崔悛は馮氏を溺愛し、湯水の如くに金を注ぎ込む。金はいくらあっても足りない。資金獲得のために賄賂を求め、崔悛は漢族士人の誰に何の職を与えるかということに関して絶大な権限を持っている。賄賂を贈る者はいくらでもいる。

崔悛とは無關係に己の地位を築いた漢族士人もいる。その一人が杜弼（とひつ）だ。杜弼の名は以前から広く知られていて、高歡が自分で招いた。杜弼は剛直な一徹者だ。相手が高歡であつても、正しいと思うことは必ず言い、言い出したら決して引つ込めない。そこが高歡に気に入られた。

武人の貪汗を抑えなければならぬと、高歡に向かつてきつぱりと最初に言ったのが杜弼だった。以後、繰り返し言い続ける。

二年ほど前に、高歡は杜弼に次のように答えた。

「貪汗は必ず改めねばならないとわしも承知している。しかし、この悪弊はいまに始まつたことではない。すでに胡太后のときに習俗と言つていいほどになつていた。そのころにわしは初めて洛陽に来て、そのあまりの醜さに絶望して都を去つた。貪汗によつて爾朱氏が滅んだのはつい昨日のことだ。いまだのようなことが為されているのか、わしも知らないわけではない。しかし、いまだだちに厳しくするわけにはいかない。我が将士の多くは潼関の西に親族を持ち、宇文泰はその親族を通して我が将士を招ねこうとしておる。

また我が文官の多くは、衣冠礼楽の整った国を理想とし、長い伝統を誇る南朝を憧れの目をもって見ている。わしが綱紀を正すと宣言し、実際に取り締まりを始めたとして、これは窮屈で適わんと感じた将士はどうするであろうか。宇文泰の招きに応じて西に走るであろう。士人は南朝に走るであろう。人が流散して何をもって国家となすのか。そなたの言うことよきはわかつている。いま少し待ってくれ。わしは決して忘れはしない」。

その後も、杜弼は同じことを言い続け、宇文泰との決戦に赴こうとする高歡を追って、

「外寇を討つよりも先に内賊を除くべきです」。

「内賊とは誰だ」。

「万民から不法な掠奪をする勲貴などは全て内賊です」。

「そうか。そなたはそこまで言うか。ならば付いて来い」。

高歡は杜弼を城外に連れ、道の両側に兵士をずらりと並べ、弓に矢をつがえ、刀を振り挙げ、槍を構えさせた。

「あの者どもはそなたが内賊を嫌うのをよく知っている。あの者どもに、わしはそなたを決して傷付けてはならぬと命じる。あの間を歩いて向こうの端まで行き、それからここに戻って来い。話はそれからだ」。

高歡は杜弼の背中を押した。杜弼は顔を青くし汗ぐっしよりに濡れて、一步を踏み出せなかった。

高歡は横に控える楊愔に言った。

「先生は韓陵の戦を覚えておられましょう。あの一戦で、我が方が敗れていたらならば今日の我等はありません。先生はあるとき韓陵の戦場にあつて、我等が勝つと思われましたか」。

「戦場で私に見えていたのは目の前の敵だけです。我が方が優勢なのか劣勢なのか、終わるまで全く知れるところではありませんでした」。

高歡はうなずいて杜弼に言った。

「戦士は皆、身を鋒刃に触れさせ、百死に一生を得て戦い抜く。一人の兵が敵を倒し、一人の兵が敵に倒され、その総計として敵が勝つか我が方が勝つ

かの結果になる。勲貴なる者は、百死に一生を得る戦場を幾度となくかいくぐった。財を貪る害が大きいのはわかっている。しかし、国の興廃にとつて、死を顧ずに戦場に立つ戦士の価値の方がいまはもつと大きいのだ。それを、楊先生は身をもつて知っておられる」。

楊愔はここで言わずにはいられなかった。

「韓陵で我等が勝利したのは、我が将士が強かっただけではありません。爾朱氏の横暴を天下の民が憎み、我等が心を一つにして、その横暴に立ち向かったからです。もしもあのときの天下の民の憎しみを我等が受けるようになっては、いかに強い戦士を擁していても勝てないのではないのでしょうか」。

高歡は顔色を改め、

「先生はまこと怖いことをおっしゃる。まさにその通りです。貪汗をなくさねばならぬのをわしは決して忘れはしない。いま直ちにはできない」。

高歡はこのとき杜弼を晋陽に残して遠征に出て、沙苑で宇文泰と戦って敗れたのだった。

* * *

東魏は毎年のように豊作に恵まれ、政治は次第に安定して来る。

興和四（五四）年夏、高歡は都に出向いて朝廷に臨むと、いきなり驚くべきことを発表する。四貴の一人の孫騰を罷免すると言う。続けて、姉の夫を獄に繋ぐ。

策略家の孫騰は高歡より年長で、国の最長老格である。鄴では誰よりも高い地位にあり、誰よりも多くの賄賂を得ていた。孫騰に贈る金品の多寡で、朝廷の事は決まるとまで噂される。高歡の姉の夫は、義弟の威を借りて、ひどく貪縦不法である。高歡は義兄に死を覚悟せよと申し渡す。

高歡の意図は明らかだ。一罰百戒である。四貴や勲貴は揃って高歡に詫び、二人を赦してほしいと哀願する。高歡はその願いを入れ、二人を解放し、諄々と教え諭してから晋陽に帰る。

長男の高澄がその後を引き継ぐ。実務を担うのは、崔暹や、その親族の崔季舒（さい きしよ）といった漢族士人である。崔暹と崔季舒は違法行為の動か

ぬ証拠を集め、四貴や勲貴を断罪する。都における綱紀肅正は、四貴や勲貴と、漢族士人の鬭争という側面があり、同時に、高澄が四貴や勲貴の上に立つために必要な過程でもある。

楊愔は、崔暹のやり方に自分が与することはないと感じる。ことさらに人を罪に落とすのは綱紀肅正の近道ではあっても、一門の法にはないことだ。かつて父の楊津は、絹を納める民衆に対して、品質の劣る物を持って来た者を罰したりはせず、よい品質の物を持って来た者を一杯の酒で賞した。

気の強い崔暹は対決を好む。初めから相手を罪に落してやろうとの意図があれば、法を恣意的に運用できないものでもない。崔季舒は医术に通じ、医者が病人を診断するのと同様に、国の病巣を綿密に調べる。二人はまずは地位のさほど高くない者から手掛けて幾つかの成功例を積み上げ、次第に大物を狙う。

崔暹は、私怨を混じえて漢人兄弟の高仲密を標的に選ぶ。高仲密は、高乾と高敖曹の二人の兄が相次いで死んだ後は、高歡に特に重んじられ、親戚縁

者が多数頭職に就いている。秘められた悪事は当然のことながらある。

崔暹の出世の始まりは、妹が高仲密に見染められたことだった。その妹が、高仲密に棄てられて先ごろ家に帰って来た。理由が、美人で名高い李氏を高仲密が新しい妻として迎えるためだと聞いて崔暹は怒った。

崔暹は高仲密の周辺を洗う一方で、高澄を手引きして、高仲密の新妻の李氏を覗き見させる。高澄はなはだ色を好む。「あれを何とかできぬか」。崔暹は罠を仕掛け、李氏を出し抜けに高澄と会わせる。李氏は驚いて逃げる。高澄は腕を掴み、無理やり従わせようとする。李氏は死にもぐるいで拒み、衣服が裂けたありさまで夫のところ走る。

高仲密は憤慨し、崔暹が全く予期しなかった方向へと事件が発展する。高仲密は東魏に対し反旗を翻し、西魏と手を結んで、国を転覆させようとする。

事の次第を聞いた高歓は、崔暹を殺せと高澄に命じる。高澄は、己の色好みで再びしくじったので、崔暹だけに罪を被せるの恥じ、崔暹を庇う。晋陽と鄴の間を人が行き来し、高澄は崔暹のためなら自分の命を差し出すと意地

を張る。高歡はいつまでも息子に対して怒っていられない。高仲密の手引きで宇文泰が攻めて来て、防戦に出なければならぬ。陳元康が間に入って崔暹の罪はうやむやにする。

東魏と西魏の数年ぶりの本格的な戦闘となる。双方ともに激しく戦い、敵の契が高歡の間に達する。危うく高歡は免れる。苦しい戦いの末に高歡が優勢になり、宇文泰は退却する。深追いは禁物と諸將が高歡を止める。陳元康だけは「これは天が授けて下さった勝利です。時を失うべきではありません」と追撃を強く主張する。高歡は我が身の疲労に挫けて軍を引く。

高仲密は西魏に亡命する。妻の李氏は逃げ切れず囚われの身となり、鄴に送られる。反臣の妻には死が与えられるべきであるが、高澄は自分のもとに呼び、「今日はよもや前のようなことはしないでらう」と迫る。李氏は黙って従う。

高澄は一人の女のために父を戦場に死なせかねなかつた失点を補おうと、四貴や勳貴に対して極めて強い態度に出る。

最初の標的は最長老の孫騰だ。

「貴様の態度は何だ。俺に対して礼を尽くして敬え」。

衆人の前でいきなり孫騰を怒鳴り付ける。孫騰は子どものころから高澄を知り、孫みたいな存在であるから、馴れ馴れしく接し、これまでそれで通っていた。「何を急に威張り出して。馬鹿馬鹿しい」といった顔をする。高澄は左右の兵士に命じ、剣で孫騰を囲ませて、門の外に追い出す。

「顔を洗って出直して来い」。

孫騰が謝って臣下の礼を取るまで会わない。

次の標的は美鬚髯公の高隆之だ。たまたま弟の高洋が高歓の代理で皇帝に会うために都に来る。高洋を宮中に連れるのは高隆之の役だ。高隆之は美々しく飾るのが好きで、高洋の衣服にも細かく心を配る。かいがいしく世話をしてくれる高隆之に向かって、高洋は昔通りに「叔父上」と敬って呼びかける。高歓は高隆之を弟として遇して来たので、高洋にとって高隆之は叔父に相当する。

高澄が激しく弟を叱る。

「何だその呼び方は。おまえはいつまで子供のままなのだ。高隆之はおまえよりも位が低い。名で呼び捨てればいい」。

高洋は身を縮め、物も言えずに震える。高隆之が汗にまみれになって謝る。

もう一人の四貴の司馬子如を高澄は獄に繋ぐ。親分肌の司馬子如は目下の者の面倒見がいい。面倒を見てもらったら当然のこととして金品を贈る。司馬子如は遠慮なく受け取る。法に触れる賄賂だという認識は双方にない。司馬子如は叩けばいくらでも埃が出る。崔暹と崔季舒の調べで、何度死罪になっても足りないほどの罪があり、司馬子如は逃れようがない。ここで高歓が乗り出し、高澄に命乞いをする。かろうじて司馬子如は救われる。

高歓は鄴の四貴や勲貴に書状を送り、次に崔暹が誰かの罪を挙げたときにはもはや救い切れないから厳に慎めと戒める。

半年ほどして高歓は鄴に行く。出迎える百官のなかに崔暹の姿を見つけると、その前で馬を降り、手を執って精勤を称え、自分の乗っていた馬を与え

る。一度は殺せと命じた崔暹であったのだが、高歡はそれを巧みに使う。

四貴や勳貴が反撃に出る。崔暹と争つてもなかなか勝ち目がないので、手始めに崔暹のある同輩を標的にする。高隆之がその者を死に値する罪で告発する。法に照らして確かに死罪となれば漢族士人側にとって打撃である。

楊愔は、崔暹のやり方を首肯するものではないが、高歡に助命を願う。法を超えられるのは高歡だけである。高歡は高澄を晋陽に呼び、一緒にその者を連れて来させる。

北朝において漢族士人が生きるのは昔から容易でない。力のある者に迎合することもあろうし、死を覚悟してでも漢族の伝統を守ろうとすることもあ
る。人それぞれに懸命である。

都の市場での楊愔の決意は、すぐに外に現れ出る形になるものではない。
大きな目標を胸に抱き、情性に流されず、わずかずつでも前に進もうとする。

* * *

杜弼は、綱紀肅正で崔暹に抜かされたかたちとなり、別の場で己の名を高

めようとす。

あるとき、公開の場で僧侶と論争する。魏朝が仏教を重んじる伝統は変わらない。仏説を巡って、本職の僧侶を相手に論じて一步も引かない。朝に始まり日暮れが迫っても、杜弼は滔々とまくしたてていよいよ意気軒昂である。僧侶は疲労困憊し、ついには頭を下げてしまう。

次に、やはり公開の場で老子を巡って論争する。相手は邢邵だ。楊愔もその場で二人の議論を聞く。楊愔が邢邵の側を持つのは自然な心情であるが、その点を差し引いても、邢邵の方に分があると思えない。しかし、杜弼は口数の多さで負けまいとする。朝に始まってやはり日暮れが迫り、邢邵は議論に倦み、杜弼が勝ったことになって終わる。

その後、しばらくすると、邢邵は自ら地方の職を求めて晋陽を去る。「まだ見ぬ山河がこの国はたくさんありますので」。

粗末な衣服に身を包んで飄然と消える。

魏収は、国史の編集を命じられ、都に行くことになる。魏朝の国史編纂と

いえば、かつて崔浩の筆禍事件で多数の漢族士人が殺されたことがある。

魏収は楊愔に言う。

「名誉ある仕事だと、私が喜んで引き受けたと見る人もいるでしょう。確かに名誉です。しかし、いずれ必ず喧しいことになります。それに耐えられるのは私だけでありましょう」。

魏収のための送別の宴が開かれる。崔悛もいて、きつと場違いなことを言い出すに違いないと誰もがひやひやする。日頃、崔悛は魏収を扱き下ろしやまず、その言葉の汚さは尋常でない。ところが、この日、崔悛の口から出て来るのは全くの正反対である。美辞、賛辞の洪水で、魏収はここ千年来に一人の人で、肩を並べる者を求めるならば遠く班固（はんこ）にまでさかのぼらなければなるまいとまで言う。班固が書いた『漢書』はあらゆる史書のなかでも最も重んじられている。崔悛は露骨だ。己の一族ことを国史によく書いてもらいたい一心なのである。

魏収が晋陽を去ると、真に心を許せる友である裴讓之も高澄に呼ばれて都

に行く。

「離れても我等の思うところは一つです」。

裴讓之は楊愔の手を取って別れを告げる。「二つ」というのは、漢族士人の伝統に則り天下のために身を捧げようということだ。

裴讓之はその風姿をもつて朝廷人に賞賛される。晋の時代の王謝（おうしや）の人々を思わせるところがあるという。王氏と謝氏はその時代に隆盛を誇った二大貴族で、後代の門閥貴族の憧れの的である。裴讓之は気品に満ちて温雅であり、意志は強固で、晋の世を支えた王謝の最もよい部分に似る。高澄は皇帝に拝謁するとき必ず裴讓之を連れる。剛の高澄と柔の裴讓之の対比はみごとである。

高澄の威名は年々高まり、その一方で、色好みもまた年々昂じて行く。

皇族の元氏につながる玉儀（ぎよくぎ）という女がいる。何かの事情で元家から棄てられて妓女になり、一時期、孫騰の家に置かれていた。やはり何かの事情でそこから棄てられ、町に逼塞しているのを高澄が見て気に入る、寵

愛するようになった。玉儀は皇室の血筋であるのだからいつまでも日陰者にしておくのは可哀想だと、琅邪（ろうや）公主という称号を与えて表の世界に出してやろうと高澄は考える。しかし、崔暹は賛成してくれないだろうと、別の者に向かって遠回しに、

「何よりも崔暹の厳しい言葉を好む。それを聞くと身が引き締まる思いがある」

それを人伝に聞いた崔暹は、三日ほどして、高澄の前から座をはずす際に何食わぬ顔で名刺を落す。高澄は呼び止め、

「大事なものが落ちたぞ。それをどこに持って行くつもりなのか」。

「公主様に御紹介いただけました折には、いつでもすぐにお出しできるようにと、携えておるのでございます」。

高澄は満面の笑みを浮かべ、崔暹の腕を取って奥へと連れ、玉儀と会わせる。

* * *

高歡は、群百の武將、群百の文官と遙かに所を異にする高みにいて、国にとつて代わる者のいない唯一無二の存在である。

杜弼は、高歡に皇帝になるよう勧める。高歡は頑として聞かない。杜弼は、朝廷と大丞相府の二重構造を解消した方が国は安定して強くなると主張する。高歡は逆の考えだ。高歡がいる限りは、一見不安定であるようないまの在り方がむしろよいのであろう。

西魏の宇文泰は、北方の強国である柔然国と連合を組んで東魏に圧力をかけて来る。高歡は、柔然国との境に長城を築くなどして対抗する。柔然国は背後に広大な国土を有し、攻めて行っても勝利を得るのが難しい相手で、どうしても防戦一方となる。杜弼は、柔然国と姻戚関係を結んで和平を成り立たせようと提案する。高歡は同意する。

杜弼は、柔然国王の娘を高澄の妻に迎える使命を帯びて敵国に行く。柔然国王は、高澄では駄目だ、高歡自身が妻にするのでなければ娘は出せないと言う。柔然国王は頑固で、剛直一徹者の杜弼もたじたじで帰って来る。

「この話はなかったことにするしかあるまい」。

高歓が嘆息するのに対して、

「国家の大計のために私は身を引きます」。

妻の婁氏は、柔然国王女を迎えるよう、夫に強く勧める。

高歓は、高澄が妾と通じた一件より身を改め婁氏と平穏な日々を送っていて、新たに妻を持つ気など毛頭ない。しかも五十歳という年齢である。

しかし、国のためにと妻に説得され、高歓は柔然王女を迎える。

武定三（五四五）年八月、柔然王女が晋陽に来る。婁氏は、正妻として使っていた館を明け渡す。高歓はその前に跪いて謝る。

「私のことはもう決して顧みませんように」。

婁氏は夫の前から去る。

高洋はこっそり楊愔のもとに来て泣く。

「二人の姉さんばかりか、今度は母上もです」。

柔然国王は娘に弟を添わせ、

「子が生まれるのを見届けてから帰るのだ」。

と、嚴命する。

王女は極めて気が強く、柔然の言葉しか口にしない。高歡は柔然の言葉を習い、礼を尽くして王女を迎える。

王女は子を早く儲けるために、毎夜必ず来ることを高歡に求める。たとえ病気でも許さない。

* * *

武定四（五四六）年のある日、楊愔は一人だけ高歡に呼ばれる。

灯りのない部屋の奥。

「これが最後と思う宇文泰との決戦に出る」。

高歡の声は聞き取り難いほどに低い。

楊愔は秘かに抱いていた予感が当たってしまったらしいことに怯える。

——この国はどうなつて行くのか。

高歡は苦しげに息を吐き、

「思えば、天の時を得たいまを逃してはならぬと陳元康に言われたのに、兵を引いてしまったのが悔やまれる。あのときのわしにはなお力があった。わしがいる間に決着を付けておかなければ国家に百年の禍根を残す。次の一戦にわしは全てを賭ける」。

暗がりの向こうの高歓の表情は何い知れない。

「先生にお約束したことがまだ果たせていません。先生のお家を再興すると申したのがその一つ。戦のない国にすると申したのがその一つ。まだ他にもあります。次の一戦に勝てば、戦はほぼ終わりです。南も西も北もおさまりません。ここまで長くかかりました。ようやく次に進めます。田横島から先生に出て来ていただいたのは、これからのためでありました。最初にお会いしたとき、先生は、人を信じるのが天下を決めるとおっしゃいました。人を信じるのは難しい。わし自身、情けない過ちが数多くありました。戦から帰ったならばこの国を作り変えるつもりです。それには先生のお力が必要です。わしは先生を信じます。先生の望みをお聞かせ下さい。先生でしたら

この国をどのようになさるでしょうか。

楊愔は自分の思いを告げる。自分の幼少期を語り、田横島の子供達を語り、都の場末の市場を語る。

「全ての子に幸せを与えることができる、それが理想の国であると思います。」
高歓は嘆息する。

「やはり先生は他の人と違います。そのようなことを誰からも聞いたことがない。わしは極貧の家に生まれ、子供のころは食うや食わずで、六鎮のあちらこちらをさまよっていた。わしが先生と同じことを言ったら笑われてしまうでしょう。だが先生には似つかわしい。やはり先生は信じなければいけない人です。今度の戦から帰ったならば、もっと詳しく先生のお考えを聞かせていただきます。」

高歓は晋陽を発ち、西魏との国境の町、玉壁を攻撃する。

高歓の目的は宇文泰を戦場に引きずり出すことだ。宇文泰と直接雌雄を決しようというのである。

宇文泰は高歡の挑発に乗らない。玉壁を固く守らせ、自身は長安から一步も出ない。死力を尽くした攻防戦は五十日に及び、東魏側の戦死者、病死者は七万人に達する。

高歡は精根尽き果てて退却する。

* * *

高歡が晋陽に帰還するよりも前に、楊愔は高洋とともに鄴に行けとの司令を受ける。

婁氏に呼ばれる。

「国の大事に口を挟むのは許されません。私はいまの立場をよく承知しています。先生に一言だけ申し上げたかったです。どうか洋を信じてやって下さい。あの子のことは他人にはわかるまいと思うのです。あの子を先生にお託しします」。

楊愔は畏まってその言葉を受ける。

すぐに高洋のもとに行くと、高洋はひどく沈鬱な面持ちで、

「いますぐでもよろしいでしょうか」。

即座に晋陽城を發つ。同行するのは、他に燕子献えん しけん と鄭頤てい いだ。二人はいつも高洋の最も近くにいる。

高洋が急ぐのは、入れ替わりで高澄が晋陽に来るためである。この国に間もなく大きな異変がある。それは口にするのが憚られ、重苦しい旅になるところを、燕子献と鄭頤が救ってくれる。これこそが自分達の最も肝要な仕事であると二人は決めているかのように、高洋のまわりに終始なごやかな空気を作ろうとする。二人を、阿諛追従あるいは輕佻浮薄と人は見るであろう。楊愔もこれまではそのように感じ、二人と親しく交わることはなかった。実際に一緒になってみると、気持ちちが和やらぐのはまことに有難い。

燕子献は、一時期は敵の宇文泰に仕えていた。若いころに人相見に「富貴は東方にあり」と言われたのが心にあつて、思い切つて長安から晋陽に來た。続く者があるのを期待して高歡は燕子献を重く用いた。吏事に精通し、仕事熱心である。温厚でもあることから、養女を与え、高洋の近くに置くことに

した。

鄭頤は、その学識をもつて、高歛一家の教師として招かれ、楊愔が田横島に逃れたところから高洋付きとなった。高洋は鄭頤によく懐き、いつも離れずにいる。楊愔の見るどころ鄭頤の学問は一流とはいえず、時々おかしなことを言う。それでも、黒を白と言ひ張るようなことはせず、誤りも愛嬌がある。

高洋は都に着くとすぐに皇帝のもとに挨拶に行く。宮廷への先導役は裴讓之だ。裴讓之は一段と恰幅がよくなり、宮中の儀礼にもすっかり馴れ、堂々としている。その後ろで、高洋は背を屈めいかにもおどおどと歩む。十八歳になつてゐるのに、見かけはまだ子供だ。裴讓之が主人で、高洋が要領の悪い従者のように見えさせる。皇帝の前で、高洋はぎこちなく体を動かすだけで、全ての受け答えは裴讓之が代わつて行ふ。

すぐに年が改まつて武定五（五四七）年となる。元旦の朝儀に、高洋は高歛の代理として大丞相の座に就く。このときも裴讓之に任せ、高洋は一言も発しない。

高洋は皇帝の前に出るときだけでなく、人前でほとんどのを言わない。

裴讓之、あるいは楊愔、あるいは燕子獻か鄭頤が代わりをする。高歡の二男は使いものにならないとかねてから囁かれていた。高洋は噂通りの愚鈍であったと都の人々は受け止める。

* * *

年初の様々な行事が終わると、楊愔は一日の閑を得て、裴讓之と連れ立って町の外に出る。馬を走らせ、韓陵の丘に立つ。

「ここから全てが始まったのです」。

楊愔の胸に万感が迫る。

丘に春の草が萌え出ている。淡い霞のなかに鳥の声がある。まことに長閑な風光である。ここにあのときは累々と死骸が折り重なっていた。

裴讓之が言う。

「始まりがあつて、終わりを免れたものはありますまい」。

「あれから十五年です。まだ短いとも言えます。しかし、時は待つてはくれ

ません」。

楊愔は、戦場の叫び、戦場の匂いを思い起す。

——あのとときの戦死者の一人に自分がならずにするだのはなぜだったのか。戦闘の場に立ったのはあの一回だけだ。「先生にはもうお立ちいただけに、ようようにします」と高歡が言ってくれた。高歡は、あの前も、あの後も常に戦場にいた。

裴讓之が言う。

「いま草が伸び始め、これから溢れ出て来ましよう。夏には丈高く伸びて、この丘を覆い尽くしましょう。それも秋には枯れ、蕭条として冬を迎えます。そして次の春にはまたこのようにして芽生えるのです」。

「そのような繰り返しのなかに我等もいるのでしょうか」。

——十五年の間に、多くの人が消えた。生きてはいても醜く枯れた人もいる。いま秋を迎えつつあるのか。それとも突然の冬となるのか。

裴讓之が言う。

「我等の先祖も常にそうであつたのでしよう」。

「先祖が為したそのままを我等も為せばよろしいのでしようか」。

「何があるうとも心を揺るがせないようにしたいものです」。

鄴城に戻ると、燕子献と鄭頤が青い顔で待っている。晋陽からの報せがあつたかと構えて尋ねると、そうではなく、侯景が反乱を起こしたという。

侯景は高歡の若いころからの任侠仲間で、群を抜いて勇猛である。高歡は侯景を警戒し、都からも晋陽からも離れた地に置いていた。いまは黄河の南の地にいる。侯景が叛旗を翻したのなら、これからの動き如何では、内乱にとどまらず、西魏や南朝を巻き込んだ国家間の戦争に発展しかねない。

三人で高洋に会うと、至つてのんびりと、

「野遊びはいかがでありましたか。鄴に来てからは気詰りなことばかりです。明日は私も野に出ようと思います。今日はこれで早寝としましょう」。

侯景の事など全く耳に入れず、陽がまだ西空に残っているのに床の用意を言い付ける。

翌朝早くに四人で城を出る。

侯景が事を起したことが知れ、四貴や勲貴が騒ぎ出す。もとはと言えば崔暹が悪い、崔暹の首を斬って侯景に謝るべきだと、口々に言い募る。命がけで戦う武将をつまらぬ罪をあげつらったりするから、侯景は嫌気がさしたのだ。人々は、高洋が留守番をする高澄の邸宅に押し寄せる。

高洋が野遊びに出ていると聞いて、

「この大事なときに何をしているのだ。どうせあの愚か者に何を言っても埒が明かない。晋陽に直談判だ」。

人々は早馬を晋陽に走らせる。当の崔暹は高澄に従って晋陽にいる。

高洋は夕刻に帰ると、病と称して門を閉ざし、誰とも会わない。

皇帝の周辺には様々な憶測が流れる。

晋陽では、四貴や勲貴の怒りの声に、崔暹を斬るのもやむをえないかと高澄は判断する。陳元康が止める。

「一人を斬れば、必ず二人を斬らねばなりません。三人、四人となつ

て、乱れを大きくするだけです」。

高澄は四貴や勲貴の要求を突っぱねる。

侯景は反乱の同調者を誘う密使を四方に放つ。高澄が進める綱紀肅正に不満を抱く仲間が多い。その密使を邢邵が一網打尽にする。邢邵の任地は侯景の根拠地と隣接し、前々から警戒していたのだった。

侯景は目算がはずれ、南朝と連合を組もうとする。高澄は南朝皇帝に急使を走らせ、両国の友好をこれまで通り保ち、侯景を受け入れないよう要請する。

三月、高澄は大軍を率いて晋陽を発つ。高澄が軍団を指揮するのはこれが初めてで、陳元康がびったり寄り添う。行軍の途中で高澄は都に立ち寄る。大軍を城外に置き、皇帝と酒宴を催す。皇帝の前で高澄は舞う。

このときすでに高歓はこの世の人でなくなっていた。それは高澄と陳元康だけの秘密とされ、高澄は皇帝の前で舞うことで、父が健在であることを示した。父の喪に服する者は酒宴で舞ったりしてはならない。

高澄は楊愔を呼び、

「弟には山水の楽しみを尽くさせてやってほしい。春の盛り、ますます楽しいことが多かろう」。

高澄は高歓の遺言に従って侯景を破る。逃げる侯景は今度は西魏に救いを求める。

高澄は晋陽に帰り、すぐに晋陽から高德政が来る。古くから随一の切れ者として高歓に仕えて来た側近だ。高德政の眼光は鋭く、四貴や勳貴も皇帝も、高德政に睨まれると軽々に動けない。

六月、高歓の死が発表される。

それまでひたすら野遊び興じていた高洋は喪に服し、また門を閉ざす。

楊愔は高洋の心を推し量る。まことに愚鈍と疑いたくなることもある。しかし、真意は必ず別にあるはずだ。偉大なる父の死後に兄弟が争うことはままある。皇帝がそこにからむと事ははなはだ難しい。皇帝の妻は高洋の姉だ。

皇帝の元善見は十一歳で即位し、十二年が経った。高澄は二十七歳だ。皇

帝は偉丈夫で文武に優れる。力があり、敏捷で、矢を射て当たらぬことがない。学問を好み、沈着冷静である。皇帝としての資質を十分に具えている。

楊愔は、家門の法を思い、韓陵で裴讓之と語ったことを思う。

都では目立った動きがないままに時が経過し、八月、高澄が来て、皇帝に会って父の死を報告する。三月に皇帝の前で舞ったときとはまた一段と風格が具わる。その姿から、父から子への権力の継承が完了したことが誰の目にも明らかだ。高歓の力の源は晋陽の軍団にあった。高澄は、侯景征伐の遠征で軍団を初めて指揮し、その後、軍団を完全に掌握したのだった。

鄴の郊外、漳水（しょうすい）の西に陵墓が築かれ、高歓の遺骸が葬られる。漳水は都城を南北に分けて西から東へと流れる川だ。高歓は五十二歳。天寿を全うしたとは決して言えない年齢だ。

楊愔は葬送の列に加わる。秋の涼風のなかに身を置いて、楊一族の吹雪の葬列を思い起す。

——これからいかなることになるのか。

高歓がいなかったならば天下の様相は全く異なっていたであろう。高歓がいなかったならば楊愔の人生は全く異なっていたであろう。

高歓と最後に会ったときの言葉を思う。これからの国づくりについて高歓と語り合うことはないままに終わった。

——子供達に幸せを与えたい。そのようなたわいもない夢のような話を聞いてくれる者がまたいるのだろうか。そのような思いを抱くのは自分だけであろう。そのような自分であるから、世の人とは違っていると見られるか。

楊愔は、いつから己の運命は自ら開けると考えるようになったのか。

* * *

高澄は、父がそうであったように、晋陽を拠点として都との間を行き来する。都にいるときは、鄴城の北東にある柏堂に滞在する。

高洋はおおむね都にいる。兄に代わって皇帝に睨みをきかすのが期待され

る役目であるが、実際には切れ者の高德政が万事取り仕切る。都の南にある双堂で終日ぶらぶら過ごすことが多い。

高澄は、父から子への権力の移行期に、陳元康と高德政の二人に全面的に頼った。二人とも父の側近だった。己の権力が安定し始めると、高澄は、もともと近しかった漢族士人を政権の中枢に据えようとする。崔暹が第一の腹心であるが、四貴や勲貴の反発が強く表立っては使えづらい。そこで剛直一徹者の杜弼を起用する。高歓にも遠慮のなかった杜弼は、高澄に対してはなおさらで、一度言い出したら何が何でも己の考えを通そうとする。高澄は辟易し、杜弼にお引き取り願って、次に崔季舒を用いる。崔季舒は崔暹の縁者でその仕事を手伝っていたが、崔暹ほどには目立たずさほど嫌われていない。崔季舒の仕事は綿密である。しかし、高澄の期待に応えられるだけの十分な力量がない。

高澄は双堂に乗り込んで来て高洋に言う。

「楊愔を借りる。おまえの大切な先生であることはよくわかっている。国の

ためだ。しばらく使わせてもらおうぞ」。

楊愔は高澄に送り出されて高澄のもとに行く。

「かつて大丞相府を立ち上げたときと同じようにして朝廷を作り変えてほしい。二年か三年でそっくり人を入れ替えるくらいでよい。いずれ大丞相府は解消する」。

高澄の表情や声も父より厳めしい。

高澄の指示は簡潔で問い返されることを想定していない。その考えは明らかだ。大丞相府を解消するとは、高澄が朝廷を統べるようになるという意味だ。

——もしかすると、自分が為すべきことを為す時が来るのを意味するのか。

楊愔は家門の法を深く思い、高澄に言われたことに取り組む。

人事は貪汗の最大の温床である。楊愔は朝廷の人事を任されると、能力を有する者を最も適切な地位に就ける、その原則を完全に貫く。都の貧しい市場で学んでから、人というものに多大の関心を寄せ、人の行動を仔細に観察

し、誰がいかなる人物でいつ何をしたのか、詳細に記憶している。

賄賂は一切受け取らない。自薦にしても他薦にしても聞くだけで必ずしも従わない。四貴や勲貴あるいは様々な人が介入しようとする。いかなる誘いにも乗らず、いかなる脅しにも屈しない。

賄賂を取らず縁故を重んじない楊愔のやり方に不満な者は多い。声高に賄賂を受け取れとか、こねに従えとか言うわけにもいかないから、楊愔は貧乏人が市場で少しでも大きな瓜を選ぶような実の下品なことをしていると批判する。楊愔は笑って聞き流す。まさしく市場で瓜を選ぶのである。

楊愔は高澄に呼ばれる。

「これからはわしも先生とお呼びします。どうして父までもが先生とお呼びしていたのか、その訳がようやくわかりました。先生はお強い。杜弼も強いが、あれは見かけだけのところがある。先生は緻密だ。崔暹も崔季舒も緻密だが、あの二人は人が隠そうとしているものを暴くのが得意だ。先生のような方は他にいらっしやらない。いずれ大丞相府を解消したときに何をするの

「か考えておいていただきたい」。

楊愔は高澄を間近に見て、まだまだ高歡に及ばないところは多いと感じる。その一方で優るところもある。決断が速くて直ちに実行する。厳格であるのいまは優れた点であると見てよいだろう。四貴や勲貴、あるいは皇帝に対して断固とした姿勢で臨んで、国を作り変えて行くには強さが必要である。幼少のところか漢人教師に教えられて、中華文明の伝統をよく理解している。

欠点としては、厳格であるのと裏腹で、短気で自制心に欠けるところがある。人の話を辛抱して聞き続けることができず、杜弼を使いこなせなかった。側近に対して感情的に怒鳴り付ける場面がよくある。色好みの悪癖もある。楊愔はこれから何ができるかを考える。最後の戦で勝利していたならば高歡とともに行っていたことであろう。

* * *

反乱を起こした侯景は、西魏か南朝か右顧左眄したあげく、南朝の皇帝に、自分を用いれば北朝を打ち負かして全中国が統一できるであろうと夢のよう

な話を持ちかける。鮮卑族によって奪われた北中国を取り戻すのは南朝の長年の悲願で、南朝の皇帝は誘いに乗りそうになる。杜弼は、もしも侯景を用いたならばその毒牙によって南朝の都は灰燼に帰すであろうと、南朝皇帝に警告する。南朝皇帝は迷った末に、東魏との修好を選ぶ。

侯景は行き場がなくなり、起死回生の大勝負に出る。わずか数千騎で南朝の都を急襲する。南朝の兵は平和に馴れて弱く、たちまち都は包囲され、悲惨な首都攻防戦の末に、南朝皇帝は侯景に降伏する。杜弼の警告通り都は廢墟同然となり、南朝皇帝は憂憤の余り八十六歳で死ぬ。

武定七（五四九）年四月、東魏の皇帝元善見は、高澄を都に呼んで王号を授ける。過去の歴史に照らして、異姓の臣下が王になるのは皇位に昇るための下準備である。

高澄は宮中に参内すると、王号を辞退する。臣下としての礼儀であつて、過去に新たな王朝を開いた者は必ずそうした。皇帝は王号を受けるよう強く要望する。それは心からの言葉ではなくても、皇帝はそのように言わなければ

ばならない。高澄は固辞し、人々と相談すると言って皇帝の前から下がる。これも前例通りで、人々に勧められ、やむなく皇帝の命に服すということになる。

ところが、高澄に向かって陳元康がきつぱり言い切る。

「早過ぎます」。

高澄は表情を変えない。

「だから辞退して来た」。

高澄は晋陽に帰る。

陳元康は、高歓でさえ皇帝にならなかつたのに高澄では無理に決まってい
ると考えている。陳元康だけでなく、晋陽では大方そのような空気である。

都では、年々成長して行く皇帝を見ているので、万に一つの遺漏もないよ
う早く事を進めたいと考える者が多い。楊愔もその一人だ。皇帝になった高
澄が新しい国づくりを力強く進めることを思い描いている。民のためには早
い方がいい。皇帝元善見あるいは皇后のことは考えまいとする。同情は事の

軽重を誤らせる。

同じ年の七月、高澄は都に来て、皇帝に皇太子を立てるよう求める。皇帝の幼い子を皇太子にし、次いで皇帝からその皇太子へと位を譲らせる。高澄がよりすんなり即位しやすくなる。楊愔等都の人間が用意した段取りであるが、陳元康がまたしても止める。

「早過ぎます」。

有無を言わさぬ勢いの陳元康の袖を引いて崔季舒が耳元でそつとささやく。陳元康はにわかにはうろたえて口を鎖し、翌日になると、掌を返したように、高澄に皇統の受け継ぎ、すなわち受禪を勧める。

崔季舒の目を逃れることは誰もできない。陳元康も悪い貪汗の病に冒されていた。事実があらさまにされればその罪は死に当たるほど重い。崔季舒は、受禪に貢献すれば帳消しにしてもらえたとほのめかした。

八月、皇帝は皇太子を立て、いよいよ高澄の即位は大詰めとなる。

* * *

楊愔は柏堂に呼ばれる。

門前で馬を降りると、門衛が扉を開け、

「いつものお部屋にございます」。

従者と馬は厩舎の方に行き、楊愔は一人で、そのいつもの部屋へと歩む。

柏堂に人影は少ない。高澄は大丞相の身にありながら、柏堂に警護の兵を置かない。例の瑯邪公主のためである。高澄は都に来ると、柏堂に瑯邪公主を呼んで遊ぶのを大きな楽しみとしている。瑯邪公主が人に見られずに自由に出入りできるよう兵士を遠ざけているのである。

高澄の色好みは高歓の死後ますますさかんである。瑯邪公主や高仲密の新婚妻であった李氏のような昔からの馴染みに加え、新しい女性も次々に増えている。高歓が晩年に迎えた柔然国の王女もその一人だ。早くも子供までできている。柔然王女の場合は、単に色好みだけによるのではない。北方の遊牧民の旧くからの慣習では、父や兄が死ぬと、その妻妾は子や弟が引き継ぐことになっている。そうしないと妻妾は生きる場を失ってしまうからだ。柔然

国と和を保つには、柔然国の慣習を尊重しなければならぬ。

楊愔は広い庭を横切る。白昼でありながら誰に会うこともなく静まり返っている。密談するのにもってこいである。

——自分がどうしてここに来ているのだろう。

顧みるまでもなく、高澄との縁はしばらく前まではほとんどなかった。今日は陳元康と崔季舒も来ると聞いているが、その二人とも親しくしたことはない。楊愔は不思議な巡り合わせを感じる。

——自分のことより、これからのことを考えよう。

ここに呼ばれたのは、いかなる段取りで受禪を進めるのか、最後の詰め相談だ。歴史には数多くの前例がある。腹のなかには鍊って来た案がある。

——受禪は到達点ではなく出発点だ。

楊愔はその先を考える。

何をするのか。魏朝が進めて来た漢化改革の総仕上げだ。胡太后の時代から国政は乱れ、漢化改革は大幅に後退した。民衆は疲弊し、反乱が相次いだ。

全ての子供を幸せにしたいと高歡に告げた。それは全ての民衆に普通の暮らしを与えることに他ならない。かつて楊昱は、行き場を失った二十万の民に生業を与える任務を授かったのだが、残念ながら果たせなかった。二十万の民は巡り巡って高歡の養うところなり、爾朱氏打倒の原動力となった。楊昱の事業を成就させるには何をしたらよいのか。民にとつての正業は自ら土地を耕して生きる糧を得ることだ。全ての民に土地を与えよう。魏朝は孝文帝の時代に、民に等しく土地を与える均田制を実施しようとした。しかしそれは極めて不十分にしか行われなかった。民に配るのに十分な土地を国が保有していなかったのと、実施するのに必要な行政能力を朝廷が備えていなかったからだ。

国に土地がないのは、力のある名族、豪族に囲い込まれているからだ。名族、豪族による土地所有を抑え、民に与える土地としなければならぬ。それをするには、楊家の大邸宅において営まれていた暮らしを否定するようことにつながる。楊愔は自分の恵まれた少年時代に強い郷愁を覚える。しか

し、全ての子を幸せにすることの方が重要である。

——家門の法は守るためにあるのではない。これから新たなことを為すためにある。天下の民のためにすることは、一門の再興に必ず通じるであろう。

朝廷に能力がないのは、国のため民のために働こうとする人間よりも、権力を私欲のために行使する貪婪な人間が朝廷に並ぶようになったからだ。人事の刷新はすでに進めて来た。綱紀肅正をさらに徹底する必要がある。そのためには法の整備も急務だ。

民が正業を得れば、国は民より税を徴取できる。これまでは名族、豪族に横取りされていたものも国庫に入るようになる。税は公平でなければならぬ。かつて、楊津は絹の長さを測る物差しを正しいものに改めて、実質的に税収を増やした。公正な税こそが国を豊かにする。

兵制の改革も必要だ。兵士は国家の兵士であって、將軍の私兵ではない。皇帝は爾朱氏の軍団に敗れ、高歡の軍団に敗れた。兵制の改革は晋陽の軍団には不都合なところもあるが、国のため民のためには必要だ。武は鮮卑族、

文は漢族という長年の区分を打破しなければならぬ。漢人の兵を鍛え、鮮卑系の人々に学問を授ける。漢化改革の先には鮮卑族と漢族との完全な和合があるのだろう。

——自分にこのようなことができるのだろうか。

楊愔は自分の弱さを思い、その一方で心勇むものがある。

——自分がどうしてここに来ているのか。偶然なのか。運命なのか。自分には為すべきだと思ふものがある。そのためには自分で運命を切り開かなければいけない。自分には家門の法がある。きつとできるはずだ。

あくまでも静寂が支配する庭の先に何が待ち構えているのか、運命を思う楊愔に予感するものが果たしてあったのだろうか。

後篇

死日には一人の佳伴も得ず

楊愔は、腰を抜かして裸足で逃げたと笑われた。

*

*

*

柏堂の小部屋に、高澄、陳元康、崔季舒、楊愔の四人が顔を突き合わせている。

「お食事をお持ちしました」。

外から声がかかる。

高澄が立って戸を小さく開け、

「食事だと。誰が持って来いと言った。勝手にここに来るでない」。

怒鳴って小者を追い払う。

「いまましい奴だ。いま思い出した。あやつだったのだ。昨日の夢に出て

来て、いきなりわしに殴りかかって来おった。あやつはよろしくない。近く殺してしまうしかないだろう」。

その小者を蘭京(らん けい)という。南朝の徐州刺史をしていた蘭欽(らん きん)の子だ。東魏と南朝が戦った折に蘭京は捕虜となり、眉目麗しいことから、高澄が近くで使うようになった。蘭欽は息子を解放してほしいと訴え、蘭京も強く願っている。しつこく言う蘭京を高澄は杖で打ち据えたことがある。

四人は密談に戻る。間もなく戸が開く。高澄が顔を上げる。蘭京がぬっと入って来る。

「どうしてまた来た」。

高澄が怒鳴る。

蘭京は膳を突き出し、

「きさまを殺すためだ」。

投げた膳の下から刀が現われる。高澄はのけぞる。その足に刀が振り降ろされる。血しぶきが飛ぶ。高澄は牀下に潜ろうとし、陳元康が上に覆いかぶ

さる。数人が踏み込んで来て、陳元康とその下の高澄を滅多刺しにする。

楊愔と崔季舒は開いた戸から這い出る。崔季舒は厠に走り、楊愔は庭に転げ出る。靴が脱げ、足を滑らせる。立とうとして膝に力が入らない。

「どうぞここに」。

顔の前に人の背がある。腕を伸ばすよりも早くに、その者に負われる。

男は走る。柏堂の門は開け放たれている。都の大路を走る。

「そなたは、よもや」。

「いずこに参りましょうか。田横島とおっしゃって下されば、ただちにお連れいたします」。

「どうして、そなたが」。

「いざというときにはとお約束しました。それがいまだからです。いまなら行けます」。

楊愔は目を閉じ、両腕を放す。地に転げ落ちる。鞏隊長がその体を抱える。

楊愔は我が足を指し、

「このざまだ。こんな私に何ができようか」。

「田横島へ行きましょう」。

楊愔は首を振り、

「いや、双堂に行く」。

「この次はもうないと思います」。

「私しかない」。

鞆隊長は肩を落とし、すぐに思い返して、

「もう一度お乗りください。双堂までお送りします」。

「有難う。頼む」。

楊愔は鞆隊長に負われる。

「いつもそなただ。どうして何度も助けようとしてくれるのかい」。

「あつしには、若旦那様を信都にお連れした責任があります。世の中のためには何がよいのかわかっていません。でも、あつしは、若旦那様を。いえ、もう言うのはよしましょう」。

「そなたはいつも私のことを心配してくれた。ありがたいと思う」。

「最初にお会いしたときから、若旦那様は他の人とは違うと感じました」。

「昔から変わった子であつたらしい。大人達は私を笑つたり褒めたりした。なぜなのか私にはわからなかつた。いずれにしても、靴が脱げたこのざまだ」。

「さあ、双堂です」。

鞆隊長は楊愔を降ろす。

「田横島に帰るのかい」。

「あつしにはわかりません」。

鞆隊長は、楊愔の次の言葉を待たずにふっと消える。

双堂の門に顔見知りの門衛がいる。楊愔に気付いて駆け寄つて来る。

「火急の用だ」。

楊愔が裸足であるのを見て驚き、すぐに門を開ける。

いつもの所で高洋は書見をしている。茫洋とした顔を楊愔に見せる。

「柏堂で一大事です」。

高洋の目が動く。

「履物はどうされました」。

高洋は立ち、

「誰ぞ履物を持って。先生にお履きいただく物を持って」。

「私の履物などは」。

高洋の顔が改まる。

「先生が辱めを受けるようになってはいけません」。

楊愔はたつたいまあつた事を告げる。

「わかりました。よろしいですか、兄上は難を免れ御無事です。先生はそのことを、とりたてて慌てることなどなく、私に知らせて下さったのです」。

楊愔が靴を履くと高洋は部屋を出る。

「いまから申し上げることを燕子献と鄭頤にやらせて下さい。それを終えたら柏堂に来て下さい」。

高洋は振り返らずに、十指に余る事柄を並べ、馬を呼び、すぐに鞭を当て

る。数人の護衛兵が後を追う。

楊愔は、他にも双堂にいるだけの兵を柏堂に行かせる。何事かと出て来た燕子献と鄭頤に高洋の指示を伝える。

楊愔も馬に乗って再び柏堂に行く。門のあたりを高洋の兵士が固める。

なかは静かで、庭に高洋が一人で立っている。

「天は私を見逃してくれなかった」。

高澄はすでに死に、陳元康は虫の息だ。崔季舒は厠に籠って無事。蘭京とその仲間は全て斬られた。

柏堂に次第に人が集まって来る。高洋は門前に出て、

「事はすでにおさまった。心配はいらぬ。蘭京が私怨をもって乱暴に及んだ。

兄上の傷は浅い。賊は全て誅した。兄上はしばらく御療治されるであろう。

その間は陳元康が代わりを務める。追って兄上御自身から御沙汰がある。それぞれ職務に戻るがよい」。

人々は一応納得して柏堂を去る。

高洋は楊愔に言う。

「三日後に晋陽に発ちます。都はそれまでに始末を付けます。晋陽は三カ月でも難しいかも知れません」。

その日のうちに、高澄の無事を知らせる使者として鄭頤が晋陽に走る。全土の軍に対して同様のことをする。皇帝には、陳元康を中書令にするよう諮る。大丞相高澄の代わりをするにはその地位にあることが望ましい。皇帝の裁可が下る。陳元康はその夜のうちに死ぬ。

翌日、崔暹と崔季舒を鞭打って辺境の地に流す。侯景がかつて反乱を起こしたようなことが繰り返されないよう事前に手を打ったのである。高洋がそのための司令を出すのとほぼ同時に、美鬚髯公の高隆之が来て二人の処分を求めた。四貴は二人を憎む。

崔季舒は厠に走って難を免れたものの朝廷から追放され、事件について口を鎖したまま都を離れる。柏堂にはもう一人、漢族士人が来ていた。王紘（おうげん）という。密談には加わらず、高澄の身があくのを別室で待っていて

騒ぎを耳にした。すぐに駆け付け、賊と切り結んだ。高洋が到着してすぐに平定できたのには王絃の働きが大きかった。その王絃も事件については何も語らない。

次の日、陳元康の名で、主だった者に晋陽行きを命じる。出発は明日。人々は準備に忙殺される。柏堂で何が起こったのか憶測が流れるが、関わっていない暇がない。

高洋は楊愔に言う。

「先生には都に残っていただきます。都のことはお任せします。思う通りになさって下さい。誰かに相談したり、私のもとに使いを走らせたりする必要はありません」。

出発の朝に、高洋は八千の兵士を連れて宮中に参内する。剣を携える二百人の兵士とともに昭陽殿の階段を昇り、皇帝に一言だけ告げる。

「我が家の用事で、しばしの間、晋陽に参ります」。

高洋は都を去る。

裴讓之が楊愔に囁く。

「貴殿の靴を笑う者がいます。気を付けられよ。」

* * *

都是平穩である。楊愔は、朝廷の要所に有能な人間を配置してある。

柏堂で起こったことは概ね人に知られるところとなるが、表向きは高澄も陳元康も生きているとされる。

翌年一月になって、高洋は兄の死を晋陽において正式に発表する。

晋陽における権力の移譲は難事業である。高洋は、高歡の側近であった切れ者の高德政に頼り、母の婁氏の力も借りた。それでもなお軍団を完全には掌握し切れず、晋陽から容易に動けない。

楊愔は、高澄のために行うはずであった受禪の準備を進める。邢邵を都に呼ぶ。王朝の交替を天下に示す詔は後世に残る名文であるべきで、邢邵でなければ書けない。

晋陽では、高洋に受禪の意志があると知って婁氏が怒る。

「おまえの父は竜のようで、おまえの兄は虎のようであった。それでも皇帝に仕えて一生を終えた。おまえは一体何者なのか。父や兄に比べてどうなのか。まさか己が優れるとも思っているのか。これまでにおまえは何をしたのだ。おまえは丞相になって何日たったのだ。皇帝になろうなどという途方もない望みをどうして抱くのだ」。

母の劍幕に高洋は抗弁できない。

婁氏は高德政を呼び付ける。

「そなたが倅をそそのかしているのか。我が家に大きな災いを招く恐ろしいことをなせしよとしているのか」。

「受禪とは、私ごとが勝手に考えたりするようなものではありません。天の声によるものにごさいます」。

「天の声とはいかなるものだ。天の声だと言うのなら、それを私に示しなさい」。

高德政は都に来て楊愔に言う。

「民の声を拾い集めて下さい」。

天は、邪心のない子供の口を通してその声を人の世に告げるとされる。王朝の交替期には、その前触れとなる歌を子供達が歌う。楊愔は市井の声を採取する。

高洋は賭けに出る。軍団に号令をかけ、晋陽を出て平都城に入る。兵士に囲まれた隔絶した場所で受禪の議を衆に謀る。寂として声もなく、高洋の意図した通りになるかと思えたときに、剛直一徹者の杜弼が口を開く。反対意見を滔々と並べ、とどめのように言う。

「我等は宿敵宇文泰を思わずにはいられません。あちらには魏の天子がいます。宇文泰が天子を擁して大義を高々と掲げて攻めて来ましたらばどうなりましたらうか。天下の人々の心の帰するところを思わなくてはなりません。宇文泰にはお父上でも何度も煮え湯を吞まされたのに、我等はいかになりましょうか」。

杜弼が勝ち誇ったように衆を見回すと、普段は全く目立たないある者がぼ

そりと言う。

「敵が我等と本気で争うのならば、必ず我等と同じことをするでしょう」。
杜弼は言葉に詰まるが、それでも、結局のところ衆の意見を一つにまとめるには至らない。

そこに鄴から司馬子如が乗り込んで猛然と反対する。高洋を昔から知る者は、高洋など皇帝になる玉ではないと見ているのである。

高洋はやむなく晋陽に戻る。

高德政は都から晋陽に帰って、天の声を婁氏に示す。新たな天子の出現を預言する歌を子供達が歌っている。

それだけでは婁氏を納得させるには不十分であると見て、高德政は様々な占いをする。全ての占いで受禪が吉であると出る。

五月、晋陽から鄭頤が都に来る。

「いよいよです」。

婁氏もついに折れたと言う。

高洋は晋陽を発つ。乗る馬が突然倒れて死んでしまう。高洋は恐れをなし、平都城に入り、そこより進もうとしない。高德政は、受禪になお納得していない杜弼と司馬子如を先に都に行かせる。

楊愔はその二人に受禪の準備が完璧であることを見せる。

「天がこの時を選んだのです」。

二人はここまで進んでいるのを途中で止めるのはよくないと判断し、平都城に帰って一転して高洋に都に行くよう勧める。

高洋は都に入る。

受禪になお賛同しない者がいる。美鬚髯公の高隆之だ。あからさまに反対はしないが、「あの小僧が皇帝とは片腹痛い」との思いが態度に出る。

「あれは一体何のための道具だ。むやみに振り回して怪我でもせねばよいが」。高隆之が鼻先で笑ったのは、土を盛って壇を築く道具である。普通の壇ではない。天を祀って皇位に昇るための壇を築く特別な道具だ。

高洋は高隆之を呼び付けて叱責する。

「あれは私が使うのだ。そなたがとやかく言う必要はない」。

高隆之は一応のところは謝るが上辺だけである。

皇帝の元善見は早くから覚悟を決めていて、楊愔が差し出す讓位の詔にあつさり名を署し、

「これよりどこへ行けばいいのか」。

「北城に新しいお住まいを御用意いたしてございます」。

「で、いつ移るのか」。

「いまにございます」。

皇帝は表情を曇らせる。楊愔は東の廊下を指し示す。

皇帝はわずかに唇を震わせ、玉座を下る。東の廊下を数歩進んで足を止め、

「後宮の者たちに別れを告げに行つても構わぬか」。

楊愔は答えない。

高隆之がすかさず言う。

「いまのところは天下はなお陛下の天下であります。まして後宮に戻られる

のに何の支障がありませんか。」

高洋が即位するまでの間は高隆之が言う通りであろう。

皇帝は後宮に向かう。一步入ると、女性達が一斉に泣く。皇帝は一人一人に言葉をかける。

皇帝は車に乗って雲竜門より出る。宮城との永遠の別れである。王公百僚が見送る。裴讓之の頬に涙が下る。高隆之が声を漏らして泣く。自慢の鬚を伝うしずくを美しい仕草で払う。

高隆之は己の身を美しく飾るのを好む。宮中の人々が裴讓之ばかりを誉めそやすのが面白くなく、南朝の使節として向こうの皇帝に会った人を師匠として礼法を習い、衣服を立派に整え、皇帝の前で自分こそが最も美しく見られるよう努めた。恭謙であればあるほど美しくなると教わり、高隆之はそのようにし、次第に皇帝に対する尊崇の念を強めるようになった。元善見は名君になり得る資質を十分に備えていたから、高洋を見下す高隆之にしてみれば、皇帝を見送るのに涙を流すのは当然だったのである。

* * *

高洋は皇帝になり、国号は齊（せい）、天保と改元する。齊を称した国は古来多数あり、普通は北齊と呼ぶ。高歓に献武皇帝、高澄に文襄皇帝の称号を贈る。婁氏は皇帝の母、皇太后になる。婁皇太后は晋陽から鄴に居を移し、晋陽の大丞相府は朝廷に吸収される。

高洋は楊愔に言う。

「大業が成就するか否かはこれからです。朕が皇帝として任に堪えられようかと危ぶむのは母上ばかりではありません。朕はいかに努めても二つは負えません。朕は齊を脅かすあらゆる敵からこの国を守ります。もう一つを先生に負っていただきます。齊をどのような国にして行くかです」。

婁皇太后は楊愔に言う。

「私はあの子が皇帝になるのを止めようとはしました。しかし、やはり母親なのでしよう、最後には我が子の願いを叶えてやりたいと思うようになりました。あの子にはどこか不思議なところあって、あの子ならできそうな気もす

るのです。それにあの子には先生がついています。先生を信じて、あの子の思いを叶えてやることにしました。あの子は皇帝になり、私は皇太后になりました。願ってなったものではありません。それでも、皇太后となったからには、皇太后としての在り方をよくよく考えなければなりません。最も悪しき例を私は見ました。胡皇太后です。元来は優れたお方であったのでしよう。ところが、最後は実の息子である皇帝のお命を奪ってしまわれました。痛ましい限りです。先生は家族の和が大切であると教えて下さいました。家族においては子が母に従うのでよいでしょう。しかし、あの子は皇帝です。皇帝は天下に一人です。母であっても皇帝の意思を曲げてはならないのです。私は皇太后としての在り方を考え、政治向きのことには一切口を出さないと決めました。あの子は父にも兄にも及びません。それでもあの子が皇帝になったからには、父にも兄にもできなかつたことをあの子はしなければなりません。母の欲目でありましょうか、あの子にはそれができるような気もするのです。私が心強く思うのは、あの子には先生がついておられることです。

どうかあの子のことをお願いします。

楊愔に内政を任される。もちろんそれは楊愔一人でできることではない。漢族士人が総力を挙げて取り組まなければならない。しかし、全ての漢族士人が心を一つにしているわけではない。漢族士人と鮮卑系武人との間には依然として深い溝がある。

誰を皇后に立てるかで早速に衝突が生じる。高洋の正室は漢人の李希宗（りきそう）の娘で、殷（いん）と紹徳（しよとく）という二人の男児がいる。楊愔等は李氏が皇后になるべきだとし、高洋もその意向である。

美鬚髯公の高隆之と切れ者の高德政が反対する。

「漢人を天下の母にすることはできません。改めて家柄のよい女性を選びます」。

受禪に関して高隆之と高德政は考えを異にしたが、今度は声を一つにする。鮮卑系の武人はそれに同調し、武人との摩擦を恐れる一部の漢族士人もそこから側にまわる。高德政は婁皇太后を味方にしようとする。婁皇太后は以前か

ら息子の嫁とあまりよい関係にない。

楊愔は婁皇太后に呼ばれる。

「あの子が皇帝になろうとしたときに私は反対しました。高德政は何とかし私を黙らせようと思いました。いまあの子が皇后を選ぶに当たって、高德政は私にものを言わせようとしています。高德政は優れた男であると思つています。私は皇太后になって政治向きのことには一切口を出さないと決めました。皇后を選ぶのは国の大事であると同時に、我が家のことでもあります。あの李氏を、倅の嫁として、私は気に入っているわけではありません。高德政の望むようにしたいと思わないわけでもありません。しかし、先生と高德政とどちらをより深く信じるべきなのでしょう。私は先生のことをもっとよく知っておこうと、魏収殿に頼んで、史書の草稿を見せてもらいました。先生一族について詳しく記されていました。それを読んで私は心を決めました。あの子のことは先生にすっかりお任せします。私は先生を信じます。ですから、どうか先生はあの子のことを信じて、立派な皇帝にしてやって下

やう」。

頭を下げる婁皇太后の前でただ恐縮する楊愔に、

「先生は、史書の草稿を御覧になりましたか」。

「いえ、見ておりません。そのようなことをして、もしもここは直してほしいなどと魏收殿に申したならば、史書は正確さを欠いてしまいました」。

「先生がそのようなことをする人ではないと私は知っています。私が何を讀んで感心したのか、先生にも讀んでいただきたいと思えます」。

史書の草稿が楊愔に渡される。楊家の人々の事績が詳しく記され、楊椿が示した訓戒がほぼそのままに納められている。

婁皇太后は言う。

「先生が御一家のことを思うのと等しく、あの子が我が一家の大業を思ってくれるのならば、斉は必ず立派な国になりますよう」。

李氏は皇后になり、高殷が皇太子になる。北斉は、皇太子の生母を殺すという北魏の習慣を引き継がなかった。

* * *

即位から三ヶ月、杜弼が懸念した通り、西魏の宇文泰が高洋の即位を咎めて戦端を開く。高洋が迎え撃つ。軍団を指揮するのは初めてである。その軍容の厳盛であるさまを見て宇文泰は驚く。

「高歓はまだ死んではないのではなからうか」

折からの長雨で、宇文泰は思うように軍を動かせず、成果なく退却する。

齊を脅かす敵と高洋が言ったのは外敵ばかりではない。四貴や勳貴、あるいは魏の皇族の元氏も、建国間もない国を乱しかねない危うい要因である。

四貴の大物の司馬子如はふとある思いを漏らす。

「わしも死ぬまでには王号くらいはほしいものだ」。

高洋は司馬子如を罷免する。司馬子如は高洋に謝罪し、二カ月後に復官が赦される。

魏の皇族はなお多くの者が朝廷の要職にあり、全土に深く根を下ろし、また、民衆に植え付けられた皇族を敬慕する心は簡単に消えるものではない。

天保二（五五二）年十二月、高洋は、姉弟で酒を酌み交わそうと、二人の姉を誘う。長姉はかつて皇帝元脩に嫁いで皇后となり、いまは魏の皇族の元韶（げん しょう）の妻になっている。元韶は学問を好み、容姿に優れ、性格が温厚であることから高歓に好かれ、長女の再婚相手選ばれた。次姉は先に皇位を降りた元善見の妻で、いまは太原（たいげん）公主と呼ばれている。

姉弟三人で盃を回しつつ昔語りなどをし、話が楊愔に及ぶ。

「楊先生と初めて会ったときに、先生は、家族の和を言われた。朕はいまも決してそれを忘れていない。あれから二十年でこのようになるとは全く思ってもいなかった。姉上はお二人とも皇后になった。父上がそれを望んだからだ。朕は皇帝になった。父上がそれを望んでいたかどうかはわからない。しかし、父上も兄上も亡くなった結果、こうなるより他はなかった。父上も兄上も、皇帝になった者の心がどのようなものであるのかを知らずにすんだ。姉上はお二人とも皇后になった。皇后になった者の心は姉上でなければわからない。朕は皇帝である。皇帝でなければしないですむことも朕はしなければ

ばならない。だが、楊先生の教えを忘れてはいないということはどうか疑わ
ないでほしい」。

高洋は泣き始め、太原公主は顔色を変える。

「よもや、陛下は」。

太原公主は飛び出し、夫の元に戻る。元善見はすでに変わり果てた姿だ。

かつて爾朱氏が立てた三人の皇帝、元子攸、元暉、元恭も、高歡が立てた
二人の皇帝、元朗、元脩も全て殺されている。元善見も例外とはならなかつ
た。太原公主は常に元善見から離れず、夫が食べるもの飲むものは必ず先に
試していた。それでも夫を守ることができなかった。

高洋は、長姉の夫の元韶に対しても酷い仕打ちをする。元韶の鬚を剃り落
として顔を真白に塗り、黛を付け紅をさし、女の衣服を着せ、自分の後に従
わせて宮中を練り歩く。魏の皇族はここまで弱く成り下がったと人々に見せ
るためだ。元韶がそのような辱めを甘受しているのを魏の皇族の何人かが憤
慨する。高洋はその者を捕えて殺す。

天保三（五五二年）春、南朝の都を占拠していた侯景は、ようやく盛り返してきた南朝の討伐軍に囲まれ、手詰まりとなつて都を脱出する。逃げる舟の中で殺される。このときに、皇帝のしるしとされる伝国の璽が侯景によつて宮城から持ち出され、人から人へと渡り、ついには鄴に来て高洋の手におさまる。

* * *

楊愔は高洋に呼ばれ、思いも寄らぬことを言われる。

「先生は最初に家族の和を教えて下さいました。それを思わぬ日はありません。朕にとつていま最も大切な家族といえば皇太后であります。次に二人の姉です。そして先生も家族同然に大切に思っています。覚えておられますか、朕は先生に約束しました。あの不届きな女を離縁させたときに、必ずこの埋め合わせはしますと言いました。朕は一人の姉に言い訳ならぬ酷いことをしました。どうかお聞き届けいただきたい。我が姉、太原公主を先生の妻にします」。

楊愔は皇帝の義理の兄になり、それにふさわしい立派な衣服を与えられて婚礼の儀に臨む。途中の回廊で李庶(りしよ)と顔を合せる。李庶は学問に優れる漢族士人である。李庶はわずかに笑う。楊愔は顔を赤らめて俯く。

楊愔は家門の法を守り節儉を旨として来た。斉の世になってから、美鬚髯公の高隆之と屋敷を並べ、二人の対照的な暮らし向きが都人の間でよく話題にされる。高隆之は美々しく飾った隊列を組んで宮中に向かう。楊愔はわずかな従者を連れるだけで、衣服はごく簡素なものだ。高隆之の屋敷には多数の者が召し抱えられ、幾人かの妓女もいて笙簧や琴瑟の音が漏れ聞こえる。楊愔の屋敷には孤児となった楊家所縁の者が養われ、漏れ聞こえるのは書物を読む声だ。高隆之の屋敷には高価な品を扱う大商人が頻繁に出入りする。楊愔の屋敷には出入りするのには近在の小商人だけだ。

楊愔もさすがに太原公主を迎えるに当たって新しく立派な部屋を作った。そこで、二人で向き合おうと太原公主はさめざめと泣く。

「はからずも先生の妻にさせていただくことができました。どうか先生とお

呼びするのをお許し下さい。こうなりましても、私にとりましては、先生なのでございます」。

「私はお上の僕にございます。あなた様の望むようにさせていただくだけでございます」。

「これから申し上げることをどうかお聞きになって下さい。私を不届きな女とお考えになるのではと、そのことがまず心配です。このようになりまして、よくよく心の内に尋ねますと、これでようやく思いが叶ったと、どうしても思ってしまうのです。恥ずかしくも、先生にお優しくしていただきたくいと、心のどこかでずっと願っておりました。私が何を申しているのか、先生はおわかりになりましようか」。

「申し訳ありません。ただうろたえております」。

「私の母上、皇太后様は先生もよく御存知のように、ごく若い頃に献武皇帝を一目見て、これぞ我が夫と心に決めたのでした。私にはそのようにすることが許されませんでした。献武皇帝に指示されるままに先の帝に嫁ぎました。

私の身に与えられた使命として先の帝をお守りしようと思いましたが、それは叶いませんでした。そのことを恨んでも仕方ありません。私が母上と同じようなことがもしもできたならどうしていたのかといまここで考えますと、ここでこうしているに違いないのです。あのときに私はまだ十歳にもなっていませんでした。でもそのときの心の内を思い出すことができます」。

「私などは、そのように言っていただけの人間ではありません」。

「あのときはほんの子供でした。でも、あのときに思ったのは正しかったのです。その気持ちを私はずっと押し隠して来ました。いまはもう隠す必要がありません。どうか受け止めて下さい」。

太原公主は楊愔の胸に飛び込む。

このころまでに、楊愔が柏堂から裸足で逃げたことは衆人に知れわたり、皇帝の姉の婿になったのは、取りも直さず、靴が脱げた怪我の功名であると評される。楊愔と崔季舒がもしも逃げずに、王絃の助力も得て賊と戦っていたならば、あるいは高澄も陳元康も助かり、高澄が皇帝となって、陳元康が

大いに敏腕を振るっていたのだろう。

楊愔は、小さな恨みにも必ず酬いると恐れられた。

* * *

天保二（五五二）年夏、北斉の賦役が南朝よりも重いのを嫌って、長江北岸の民が南朝側への編入を希望する。南朝は北斉との友好維持を重んじて民衆の願いを退ける。北斉は改革を急ぐ必要に迫られるが、膨大な戦費を抑えるのは難しい。

天保四（五五三）年の冬から翌年の春にかけて、高洋は厳しい戦いを続ける。

まず北東に出て契丹（きったん）と戦う。契丹は強力な騎馬軍団を擁する部族である。高洋は国境の山嶺を超え、昼も夜も休まずに敵地を進み、敵と遭遇すると、先頭に立って挑みかかる。契丹軍を撃破し、十万人を捕え、家畜百万頭を得る。

晋陽に一度戻って食糧を補充し、すぐに北に出る。相手は突厥（とっけつ）と柔然の連合軍だ。北方の強国の柔然国は、その背後のさらなる強国の突厥に敗れ、突厥に命じられて北斉との戦端を開いた。高洋は柔然国王女を後室に入れなかつたので、柔然国との間の婚姻による和議は消滅していた。高洋は敵の連合軍を破り、柔然を突厥の支配下から切り離す。

晋陽に帰還すると、すぐにまた西に出る。敵は土着の遊牧民の山胡（さんこ）だ。山胡は勇猛で知られ、容易に勝敗がつく相手ではない。一人の将軍が戦鬪で傷つき、配下の部隊長が救出を怠り見す見す死なせてしまう。高洋は怒ってその部隊長を斬り、五臓を引き出し、部隊長の部下に食べさせる。闘いの最前線での出来事であったので、このことは都まで聞こえて来ない。

高洋は高帰彦を重用するようになる。命知らずの高岳の養子だ。高岳と高帰彦の義理の父子関係はよくない。二人は十歳余りしか離れておらず、高岳は後から生まれた実子ばかりを可愛がり、高帰彦には冷淡であった。高帰彦は義父も含めて軍団の古株を追い落としてやりたいと思っている。

高洋は二十五歳、軍団の世代交代は必須である。

* * *

楊愔は、漢化改革の総仕上げを漢族士人の官僚集団とともに押し進める。最も早くに高歡に仕えた崔悛がその阻害要因となる。大丞相府の解消に伴って崔悛は鄴に来て、朝廷においてそれ相応の地位で遇される。相変わらず馮氏を寵愛して多額の金を必要とし、何かと賄賂を貪る。人事に介入しようとする。高洋は崔悛を地方に放出する。崔悛は地方に出ても傲慢な態度で賄賂を求めてやまない。高洋はついに崔悛の罪を問う。馮氏は斬罪となり、崔悛は最愛の妾を喪って氣力を失くし獄中で死ぬ。

楊愔は目の上のたんこぶを切り棄てたのだと都人は囁き合う。

新しい王朝は前の王朝の歴史を総括するのが中華文明の伝統である。北魏の歴史を編む作業は早くから魏収が進めていたから、魏史の草稿はすぐに揃い、広く閲覽に供されて仕上げの段階へと進む。

草稿を読んだ人々が一斉に魏収を非難し始める。魏収は自身の好悪によつ

て編集し、すこぶる公平を欠くと言うのである。

高洋は、

「問題があるのならきちんと文書にして提出せよ。魏収は己が正しいと思うのならきちんと反論せよ」。

意見書が百人余りから提出される。魏収は、意見書はおしなべて己の一族をよく書いてもらいたいという私的な感情に基づくもので、それをいちいち聞いていたら、それこそ公正な史書は作れないと反論する。魏収の反論にまた反論が出される。急先鋒の一人が、楊愔が婚儀の際に擦れ違った李庶だ。

高洋は楊愔に判断を尋ねる。高洋は以前から魏収を好ましく思い、楊愔は魏収の才能を高く買っている。魏収が楊一族について書いた草稿を楊愔は読んでいて、それがそのまま正式の史書に収められるのを強く願ってゐる。楊愔は魏収を守る。

高洋は魏収への批判を止めるよう命じる。それでも李庶等は静かにならない。

太原公主が楊愔に妙なことを言う。

「婚儀のとき、李庶様は先生のお姿を見てお笑いになったのを覚えておられましょう。その真の理由を御存知でありませうか。あれはこの私をもひどく侮辱するものだったのです」。

「何のことでしょうか」。

「父上が先に先生の妻としたあの女がいました。あの女のところに高隆様の御息が通う手引きをしたのが李庶様であつたと聞いています。また同じようなことになるだろうと、李庶様は先生をお笑いになったのです」。

楊愔はしばし考えに沈み、

「私は韓陵において憎悪を棄てました。いまのお話は耳に入ってしまったので、もう仕方ありません。どうかこれからは人の悪い面を私におっしゃらないようお願いします。他の人からでも残念ですが、とりわけあなた様の口から聞いてこの胸に刻むのは悲しいのです」。

高洋はいつまでも魏収を批判して止まない李庶等を獄に入れる。李庶は冤

罪を主張しつつ獄中で死ぬ。

楊愔がかねての恨みを晴らして溜飲を下げたと都人は噂する。

* * *

天保五（五五四）年四月、柔然が再び突厥にそそのかされて侵入して来る。

高洋が反撃に出る。柔然は退却する。高洋は自身が殿（しんがり）となつて引き上げる。主軍と高洋の距離が開いたのを見計らつて、柔然が襲いかかる。夜中のうちに接近しつつある軍馬の響きに気付いた兵士が跳ね起きて逃げ支度をする。高洋は安臥したままで、いつもと変わらぬ時刻になつてようやく目を覚ます。悠々と準備を整えてから敵の包囲網を突破し、主軍を追う。高洋が遠く走り去つたのを見て柔然軍は退却する。高洋は主軍と合流すると再び戻つて敵地に入る。柔然軍に大勝して三万人を捕虜とする。

柔然はそれでも懲りずに六月にまた出て来る。高洋は撃退する。

七月、高洋が鄴に戻ると、美鬚髯公の高隆之を除くべしと、崔季舒が告げる。

崔暹と崔季舒は、高洋が皇帝になってしばらくしてから、辺境の地より呼び戻された。漢化改革に二人が必要だからだ。高隆之は二人の帰還に強く反対した。崔季舒は地獄耳である。高隆之の一つの言葉を聞き付けた。

高隆之は東魏の時代に皇族の幾人かと親しくしていた。皇族と交わるのは己を美しく見せることになる。高隆之は思っていたし、皇族としては四貴の一人と親しくしていれば身は安泰であると思えたから、交流は広くかつ深かった。北齊の世になってもそれは続き、特に親しい元旭げん きょくと飲んで、「我等はたとえ死んでも決して互いに背くことはない」と手を取り合って誓った。

崔季舒は高洋に言う。

「魏の皇族の存在はなほ侮れないものがございます。まして、高隆之様はお上の叔父であると自認しておられます。受禪のときに、先の帝の後ろ姿を拝して高隆之様は泣いておられました。用心いたさねばなりません」。

高洋は元旭に死を命じ、高隆之を鄴城の外に連れる。

兵士が囲むなかに高隆之を立たせて罪を数え挙げ、

「殴れ。止めると言うまで殴り続ける」。

高隆之は地に倒れる。

「誰も触れてはならぬ」。

野に置き去りにして高洋は帰還する。

息を吹き返した高隆之は這って帰ろうとし、喉の渇きに水路に首を突っ込んで死ぬ。

高隆之の死にも楊愔が関わったのだろうかとうと都人は噂する。

楊愔は、一人我が世の春を謳歌していると嫉まれた。

* * *

天保六（五五五）年十一月、宮城内の東にある築山に陽が燦々と降り注ぐ。人々は高洋が現れるのを待っている。宴の用意は整っている。

高洋は即位から五年を超え、北齊は国力を大いに蓄えつつある。六月からは、全長九百里を超える長城の建設が始まっている。事あるごとに大軍を率いて戦いに出るよりも、結果として国の費えを少なくできるというのが楊愔等の考えである。

高洋は遠征から都に帰還すると、勝利を祝して大きな酒宴を催すのを常とするが、今日は特に何かを祝すというのではない。近頃はこのような宴が時折ある。

高洋の最も近くの席には、いつものように弟の高湛（こうたん）と高湜（こうしやく）、そして高岳の養子の高焜彦が並ぶ。高湛は婁皇太后が生んだ男子としては四番目で、高歡の男子としては九番目である。高湜は高歡の十一番目の男子で、母は游（ゆう）氏である。

ちなみに婁皇太后を生母とする男子は、上から高澄、高洋、高演（こうえん）と、高湛、それにあと二人いる。高演は高洋の六歳下で、最も近親者であるが、気性の合わないところがあつて、酒宴に同席することは少ない。今日も

いない。高湛は酒宴を何よりも好む軽薄兒である。高湛は滑稽をもつて酒宴を盛り上げるのを己の仕事と心得ているところがある。高演はそのような二人の弟を嫌っている。

高帰彦は戦場で命を懸けて戦う者の常として、酒宴となると浴びるように呑み大いに騒ぐ。

その次に皇帝に近い席に座るのが楊愔、鄭頤、燕子献の三人である。今日の楊愔は、裴讓之、邢邵、魏収といった友人とともに、泰平を言祝ぐ詩を披露することになっている。

やがて先触れの声がし、曲水の向こうより高洋が現れ、笙簧や琴瑟の音が流れる。人々は低く礼をし、皇帝が着座するのを待つ。

高洋の合図で宴が始まる。人々の前の盃に酒が満たされ、皇帝の長寿を祝って一斉に飲み干す。

再び盃が酒で満たされると、高洋は言う。

「朕は諸君等のためにとびきりの肴を持って来た。ここで披露しようと思う

がどうだ」。

高洋は初めから顔が紅潮し、普段と声の調子が違う。

「それは何でございましょう。何でございましょう」。

高湛と高湜の二人の弟が手を打って囃し立てるように言う。

高洋は立ち上がり、仰々しく咳払いをし、おもむろに、両腕を懐に突っ込む。ごそごそと探り、上から覗き込み、さも重そうに出す。襟から黒く長いものが垂れる。高洋は腰を落として屈み、両腕で抱え直し、

「ほら、これだ」。

放り投げる。ごろごろと地に転がる。長く黒い筋がからみ合う大きな毛玉のようだ。黒い筋の間から白いものが見え、紅色もほのかに透ける。

囃していた高湛と高湜の動きがぴたりと止まる。地面に静止したものを凝視する。女の生首だ。

高洋はゆつたりと襟を整え、左右を見る。

「これが肴だ。やけに静まり返ってしまった。気に入らぬのか。わかった、

これでは、足りないのだろう。ならば、もっといいものを持って来るとしよう。」

高洋はふらりふらりと築山を降りて曲水の向こうに消える。

高湛と高湜はへなへなと座り込む。

楊愔は高洋が去った先を見つめ、裴讓之は目を閉じ、魏収は目だけを動かして周囲の様子を見る。邢劭は衣を脱いで虱をつぶす。誰も口を開かず、わずかな風に女の髪が揺れる。

しばらくして高洋が戻って来る。台車を自ら曳き、女の死骸が載っている。

宴席の中央に据え、

「そうであった、今日のために詩を作って来たであろうな」。

楊愔は返事をためらう。

「朕は虚しいおもねりの詩を欲しない。あらかじめ用意して来た詩など聞きたくない。朕の思いに合致するのは古人の詩だ。朕が琵琶を弾き、朕が吟じよう。諸君等は聞いておれ」。

高洋は劍を持つて来させ、台車の前で大きく振りかぶつて女の腕を斬り落とす。

「これこそよき琵琶」。

腕を抱え、奏でるようにして、朗々と詩を吟じる。漢の時代の李延年（りえんねん）のよく知られた詩だ。

「佳人、再びは得難し」。

詩の最後に至つて、高洋は号泣する。

「皆も歌え。琵琶を弾け」。

高洋の命令に人々は顔を見合わせる。演奏が始まり、声を揃えて歌う。「朕は佳人を死なせてしまった。これほどの悲しみあろうか」。

高洋は、首も腕も台車に載せ、それを曳いて築山から消える。そのまま帰つて来ない。

しばらくして「宴は果てた」と告げられ、解散となる。魏収は慌ただしく誰かを求めて去り、邢邵は飄然と消える。楊愔は官署に戻る。仕事の続きを

終えてから宮城の外に出ると、裴讓之がそつと寄つて来る。人気のないところへと連れ立ち、樹林に囲まれた細い川の岸辺で裴讓之がぼそりと言う。

「孔子は言われました。『逝(ゆ)くものは斯(か)くの如きか。昼夜を舍(お)かず』。川の流れは止まることはありません。我等の仕事も止まることはありません。思われることはきつと同じでありますよう」。

「おっしゃる通りです。遠く先祖より続く我等の使命を果たし続ける以外に何もないと思っています」。

「我等の民をかつての苦しみに再び陥れてはならないのです」。

「あれは今日限りのことではありませんようか」。

「お上を信じる以外にありますまい」。

太原公主が楊愔に言う。

「何か普通でないことが起こりそうな予感がありました。この五年間、お上は懸命に駆けて来られました。本当のところは、お上は昔から変わっておられないでしょう。姉として痛々しく思うことさえあります。でも、お上は

賢いお方です。姉としてお上を信じます。お上は必ず打ち克ちます。どうか、お上の御心をおわかりになって下さい。誰もわかつてくれないとお上がお感じになりますと、さらに悪いことが起こってしまうかもしれせん」。

翌日、高洋はいつも通りに朝儀に現れる。昨日のことなど何もなかったかのようにである。

その後は高洋に特に異様なことはなく、あの日の事情が次第に知れて来る。高洋が投げた生首は薛嬪女（せつ ひんじょ）という女であった。もとは娼妓で、宴席でその見て高洋が気に入り、後宮に呼び入れた。即位前まで、高洋には、兄の高澄のような色好みの性向は見られなかったのだが、ここ一年余りで様子が変わった。

薛嬪女には姉がいて妹に劣らぬ美人である。高洋は、薛嬪女の実家を訪ね、姉妹を左右に置いて酒を飲んだ。皇帝の機嫌がすこぶるよいのを見て、姉は「よろしかったらお父様を司徒にしてはいただけませんか」と、冗談めかして言った。司徒とは三公の一つだ。「おまえの父親ならそうもしてや

りたいが、しかし、官位のない者にいきなり司徒とは、いくらなんでも望みが高過ぎはしないか。「いえ、いきなりではございません。お父様はすでに王の位も頂戴いたしております。「ほう、娼妓の世界にも王がいるのか。「そうではないのでございます。実を申しますと、お父様はお上より清河王を頂戴しているのでございます。高洋は急に顔色を変えた。薛嬪女はそれを見て、「姉はほんの戯れを申しただけです」と謝り、何とか場をとりつくろうとした。

清河王を授かっているのは四貴の一人、命知らずの高岳だ。薛嬪女の姉は、一時期、高岳の屋敷に囲われていた。高洋は四貴や勲貴を抑えて実権を奪う一方で、爵位を惜しみなく与えるという方針を採った。高岳に対して清河王に加えて司徒を与えたところで構わないようなもののだが、養子の高帰彦から高岳の面白からぬことを聞かされていた。

高帰彦は高洋に気に入られて大將軍となった。高岳は「おまえが出世できたのもわしが育ててやったからだ」と何かと恩着せがましく言う。養父の高

岳には邪慳にされた記憶しかない高帰彦ははなはだ不快で、高岳が都の南に皇帝の住いに模した極めて贅沢な大邸宅を構えている様子を仔細に高洋に告げ、「このまま放っておいたのではしめしがつきません」といつも言っていた。

薛姉妹は、皇帝の怒りを紛らわせようと酒を勧めた。それは完全に裏目に出た。盃を重ねた高洋は突如逆上し、姉の胸ぐらを掴むと、「こいつを壁に吊るせ」と命じた。女が吊るされると、鋸を持って来させ、自ら女の体を挽いて殺した。

それから何日かして十一月の酒宴の当日、朝から気分が優れなかった高洋は薛嬪女を相手に飲み出し、ふと兆して薛嬪女の身を引き寄せると、「おまえもあの岳爺さんに抱かれたのか」。

じくじくと女を責め、その挙句に斬ってしまったのだった。

* * *

翌年の夏、高洋は都の三台宮殿の大改造を命じる。

三台宮殿とは三国時代の魏の曹操が鄴に築いたのが始まりで、それを受け

継いで北齊の宮殿としていた。高歡が都を洛陽から鄴に移して以来、鄴城や宮殿に少しずつ手が加えられてはいたが、全体を造り変えるような大掛かりなものではなかった。楊愔等は、長城の建設がなお続き、それに加えて都での大工事は国にとって負担が大き過ぎると止めたが、高洋は耳を貸さなかった。三台宮殿の大改造には延べ三十万人を動員する必要があると試算され、楊愔は民の負担を少しでも軽くする工夫をする。

近ごろは、高洋は朝から酔っていることが多く、突然激しく怒ることも稀ではない。酒のために醜態をさらしているとの自覚が高洋にはあり、ある宴席で裴讓之を呼び寄せる。

「朕が先の皇帝のもとに目通りした折に、そなたが先導役を務めてくれた。優美なそなたの容儀をそのとき朕は誇らしく感じた。そなたのようになってみたいと朕は常日頃から思っている。そこで頼みたいのだが、いつも朕の間近において、朕の振る舞い正してはもらえぬだろうか。そなたを黄門郎にしたかと思っている」。

黄門郎は常時皇帝の最も近くにいて宰相に昇進できる可能性が高く、朝臣が希望する地位であるのだが、いまの高洋のすぐ近くに仕えるのはかなりの気苦労である。

「有難き幸せにございます」。

平伏する裴讓之の顎から汗が滴り落ちるのを隠せない。

楊愔が進み出て言う。

「恐れながら、裴讓之殿には、まさに裴讓之殿でなければならぬ難しい仕事をしていただこうと思案していただくところにございます。そのことにつき近くお上に申し上げようと考えておりました」。

「ほう、先生にお考えあつてのことなら、そちらが先だ。お聞かせ下さい」。

「ここは酒宴の場でありますので」。

「構わぬ。大事なことから早い方がよい」。

「では申し上げます。聞きましたところでは、清河にはなはだ不届きな姦吏が二人いるとか。民を虐げて無法の行いがあるばかりか、盗賊と結んでい

る由にございます」。

「清河と言ったか」。

高洋の目が光る。清河は高岳の治める地である。

「実は姦吏の名もわかっております。しかし、罪が現れないように抑えている者がいるために、民の苦しみが続いているのでございます」。

「誰が抑えているのだ」。

「裴讓之殿には、世を清めたいのと強い志がございます。清河の太守にして、この件を究明させてはどうかというのが、私の考えにございます」。

「それは面白い」。

高洋は酒を煽つてからすつと立ち、裴讓之の前に来てその肩に手を置き、いきなり衣類を引き剥がし始める。裴讓之は身を縮め、なされるがままで。高洋は、裴讓之の腹を露わにすると、ぽんぽん叩き、

「随分と大きい腹であるな。これで、朕の後に付いて来られようか。どうだ、来い」。

高洋は駆ける。裴讓之は半裸体のまま追う。高洋の足は速い。裴讓之はすぐに息が切れ、足がもつれて倒れる。高洋は笑いながらその上に馬乗りになり、

「何だこのさまは。これでは黄門郎にはしてやれぬ。仕方あるまい、楊先生のおっしゃる通りにしよう。清河に行け。二人の姦吏を掴まえて来い。それまで朕の前に顔を出すな」。

高洋は裴讓之の尻を蹴る。

三台宮殿の工事が始まる。その現場に、高洋が酔った状態で現れる。

木の枠が高さ二十七丈にまで組み上げられ、その上で大工が命綱を繫いで仕事をしている。

高洋は見上げ、

「のろのろとあれは何をやっているのだ。少しも仕事がかどっておらぬではないか」。

高洋は衣服を脱ぎ捨てて下ばきだけになると、木枠に手を掛け、するする

と昇る。たちまち最も高い梁の上に立ち、

「仕事というものはこうやってやるのだ」。

手放しで梁の上を疾走する。

下にいる者は腕を上げ、「あれ、あれ」と叫ぶが、高洋は何事もなかったように下りて来る。

「しかし、考えてみれば、誰もが朕のようにできるものでもあるまい。命綱は使つてもよいぞ」。

涼しい顔で去る。

高洋は酒が入ると体の動きが一段と俊敏になる。衣服を脱ぎ棄てる癖もある。裸になって宮城の外に出て、猛然と都の道を駆け巡る。果ては道端でころりと寝ころび、そのまま高軒をかく。供人は皇帝を追い、起きるまで見守る。

皇帝にはどのような場で何を着るのかやかましい定めがある。高洋はお構いなしに、あるときは軍装をし、あるときは錦繡をまとい、あるときは粉黛

を施して女の姿となり、酔って歌って舞って走る。あるいは驢に乗り、あるいは牛に乗り、あるいは駱駝に乗り、あるいは白象に乗り、あるいは人の肩に乗って、宮殿の内や外を闇雲に駆け巡る。高洋を肩に乗せるのは、劉桃枝（りゅうとうし）というお気に入り護衛兵の役目だ。

ときには裴讓之に馬乗りになったように、朝廷の高官にまたがることもある。一度は崔季舒が掴まり、皇帝の重さに顔を歪めると、尻を叩かれ、

「戦場を駆ける馬を思えばこんなこと何でもあるまい」。

* * *

高洋はまさしく酒乱である。

酔って宮城の門を飛び出し、勲貴や親族の家を見つけると、門を叩いて乗り込み、酒宴の用意をさせる。昼間のこともあれば、夜のこともあれば、朝のこともある。晴れでも雨でも雪でも関係ない。突如現れる皇帝に機嫌よく過ごしてもらおう苦労は並々でない。

街の人々も、皇帝が宮城を出たと聞くと、あわてて逃げ戸を閉ざして息を

ひそめる。

ある日のこと、高洋は例によつて裸で道につつぷし、その周りを供人が囲んで酔いから醒めるのを待つ。不意に高洋ははね起き、走り出したその速さは尋常でない。右に左に角を無茶苦茶に曲がつて誰も追いつけない。

高洋は一人だけになると、行き当たつた井戸で水をがぶがぶと飲む。その行儀の悪さに一人の老婆が小言をいう。

「なんだねえ、そこらじゅう水びたしにして。井戸はおまえさん一人のものではないのだから、もう少し行儀よくできないものかね」。

高洋はことさら方々に水を散らして顔を洗い、

「俺の行儀が悪いか。行儀が悪いと言えば、このごろ、天子様はひどいらしいではないか。あれと比べたら、これくらい何でもないだろう」。

「それはそうかも知れん。あれで天子様なのでしようかねえ」。

「全くだ。おまえ、宮殿に行つて、いまみたいに天子様に小言をいったらどうなのだ。そしたら、俺もおとなしくなつてやる」。

「出来たら小言をいってやりたいものだ。酔って暴れていればいいのだったら、この婆だつてもう少しましな天子様になれないものではないだろう」。

高洋は笑い、

「おまえはいいことを言う。そうだ、そう言うおまえを今日から天子様にしやろうではないか」。

「馬鹿なこと言うものでない。こんなことが天子様に聞こえたら、とんでもないことになる」。

「天子様は聞いておるぞ。天子様というのは、言ったことは必ず行うのだ。ようやく追い付いた人々に命じて高洋は老婆を宮廷に連れ、玉座に無理やり載せる。」

老婆はおろおろ震え、玉座からすべり落ちる。

「皇帝というものは、玉座から落ちたら、必ず殺されるしかないのだ」。

高洋は老婆に馬乗りになり、さんざん殴って殺してしまう。

婁皇太后は高洋を呼ぶ。

「そなたが皇帝になってから、私はいかなることに口出しをしないと決めました。しかし、今日はこれを使います。これはそなたのお父上が使っておられた杖（じょう）です。これで折檻するのは、お父上が折檻なさるのと同じです」。

婁皇太后は息子の背を打つ。

高洋はこのときもしたたかに酔っていて、杖を掴み取り、

「これは誰の杖だと言った。父上のだと。朕は天子であるぞ。天子は文字通り天の子だ。朕の父は天だ」。

ぐいと杖を押しつける。婁皇太后はよろけ、

「どうしてあのお父上の子がこうであるのか」。

「それは朕に尋ねているのか。そもそも始まりは、あんたがあのお親父野郎に一目惚れしたからではないか。野合をすれば、ろくでもない子が生まれるのは当たり前の話だ」。

「この母をそなたは侮辱するのか」。

「何が母だ。そうだ、うるさいことを抜かすこの婆さんを、どこかに片付けてしまおう。我が斉の国と友好を結びたいと願っているどこぞの夷狄にくれてやるのがいい。皇帝が間に入って正式な結婚をすれば、あんたの気に入るような大層御立派な息子が生まれるだろう」。

その悪態に、婁皇太后は怒りを通り越して泣き、

「そなたとは二度と口をきかない」。

翌朝目覚めた高洋は、昨日は何があつたかと劉桃枝に尋ねる。劉桃枝は言葉に濁して答えない。

楊愔が呼ばれ、

「朕が何をしたのかどうか教えて下さい。隠さずに、言葉を飾らずに、どうか願います」。

楊愔は、太原公主を通じて聞いていた通りに告げる。

高洋は床に伏して泣く。

「何ということだ。酒がいけない。朕は酒を止めなければならぬ」。

婁皇太后のもとに謝りに行く。皇太后は門を閉ざしてなかに入れない。

高洋は、

「必ず酒を止めます」。

三度絶叫して去る。

その日から、高洋は肅々と皇帝としての仕事に取り組むようになる。

* * *

五日目も経たないうちに高洋は苛々と落ち着きを失い、それから二、三日で、ひどく酩酊した状態で楊愔の前に現れる。

「先生、朕は駄目なのです。またこのざまです。先生はそれでも会って下さいますが、母上はもう決して会っては下さらないでしょう。口をきいて下さらないでしょう。ああ、どうしたらいいのでしょうか。そうだ、母上に笑っていただかなければならない」。

高洋は何を思い付いたのか、急に駆け出し、婁皇太后の住いに行く。門が鎖されている。酔えば酔うほど身が軽くなる。ひらりと塀を乗り越え、庭を

横切り、床を這つて皇太后の部屋に忍び入る。

子供心に返つたのか、午睡をする皇太后の寝台をいきなり揺する。酔つて力任せにやつたものだから、皇太后は驚いた拍子に床に転げ落ち、したたかに腰を打つ。

「うん」。

一声うなつて、そのまま動けなくなる。

「大変だ。母上がお亡くなりになつた」。

高洋は泣き叫ぶ。

人々が集まつて来て大騒ぎになる。幸いにも、婁皇太后は息を吹き返し、高洋はその脇で酔いが回つて眠つてしまう。

翌朝、高洋は皇太后の住いで目を覚まし、自分が何をしたのかを思い出すと、

「酒を止められないばかりか、母上をお怪我させ、これほどの不孝者はいない。もう生きている意味がない」。

庭に柴を高く積み上げて火を付け、裸になって飛び込もうとする。妻皇太后が体の痛みに堪えて庭に出て来て止める。

「母上が笑って下さらない限り、この火に飛び込むしかありません」。

「おまえが酒さえ止めてくれたならば、いくらだって笑う」。

高洋は地に伏し、

「言葉で誓つてもこの前と同じです」。

高帰彦を呼び、杖を持たせる。

「この酔っ払いに罰を与える。背中を打て」。

高洋は裸になって背を向ける。高帰彦は恐る恐る打つ。

「そんな生半可なことではだめだ。血が出るまで打て。できなければおまえを斬る」。

高帰彦は竦んでしまふ。

皇太后は高洋を抱き、

「おまえは元来はよい子なのだ。おまえの苦勞はよくわかっている。酒さえ

やめてくれればいいのだ」。

母子は一緒に泣く。

高洋は杖を取り、自分の足を五十回叩く。

「金輪際酒は飲みません」。

* * *

半月ほどして、高洋はしたたかに酔ったありさまで、李皇后の実家に現れる。

「朕はまた呑んで酔っている。見ろ、この体たらくだ。これでは母上に見せる顔がない。朕は母を失ったのだ。せめて、こちらの母上だけにはやさしくしていただこう」。

李皇后の母の前にひざまずき、

「どうかこの不肖の息子を見捨てないで下さい」。

李皇后の母は皇帝にどのように接したらいいのかわからない。

「酒を呑んでも、朕をあなたの息子であると認めて下さればそれでいいので

す」。

李皇后の母はその願いのままにすると答える。

高洋は喜び、

「母上、母上」。

と、膝に抱き付いて泣く。

「母上のことはこの息子が必ずお守りします。嘘ではありません。どうか朕の腕前を御覧になって下さい」。

鎗矢を持って来させ、的を射る。

「どうです。いくら酒を呑んでも、この通りです。とはいえ、動かぬ的に当てるくらいのことには誰でもできます。いかがです、母上、あの的を持って、走っていただけませんか。朕の腕前をとくと御覧に入れたいと思います」。

李皇后の母は、

「恐れ多いことにごぞいます」。

逃げようとする。

高洋は李皇后の母の襟を掴み、

「まさか、朕の腕前を疑っておられるのではありますまい。これほどお慕い申している息子を信用なさらぬのですか」。

庭に引つ張り出し、

「朕は酔うと訳がわからなくなる。我が母の太后だって牀から落として怪我をさせた。おまえは何者なのだ。何が母だ。笑わせるな」。

馬の鞭を取り、李皇后の母に打ちかかる。

李皇后の母は鞭の一撃で悶絶する。

* * *

裴讓之が清河から戻る。二人の姦吏を掴まえた顛末を高洋に奏上しようとする。

一瞬早くに、切れ者の高德政が全くの別件で裴讓之を告発する。裴讓之は魏朝の再興を願っていて、斉の宗室を引き裂く陰謀に加担し、それ故に高岳

にあらぬ罪に着せようと企んでいるのだと言う。高德政は、朝廷が漢族士族ばかりで占められて行くのを快く思っていない。

高洋は、高德政の告発に思い当る節がある。前の皇帝の元善見が宮城から出たときに泣いたのは高隆之と裴讓之だった。高隆之はすでに死んだ。

高洋は裴讓之に死を申しつける。

「高隆之と一緒にのところに駆け」。

楊愔が弁護する。

「裴讓之が奏上すべく用意して参りましたものをせめて御覧いただけませんか。でしようか」。

「朕に考え直せと言うのか。先生と裴讓之は親友であると聞く。裴讓之を清河に行かせたのは先生がそうするのを希望したからだ。朕は知っておるのだ。裴讓之は黄門郎になりたくなくて先生に頼んだのだろう。それもいいだろう。美しい友情だ。ならば、その友情を永遠のものにするがいい。裴讓之と同じ塚に入れてやろう。もう一度、朕を止めようとしたら、必ずそうしてもらおう」。

裴讓之はその日のうちに自害する。正式に死罪となって処刑されると家は断絶となる。自害であれば家は守られる可能性があり、楊愔が尽力して、家督を弟が継ぐことになる。

裴讓之の葬儀がひっそり行われる。楊愔が弔意を表しに行くと、弟は拒絶する。

楊愔は親友をも裏切って、自分だけが高い位にあるのを誇っていると噂される。

高帰彦が裴讓之の用意していた奏上文を手に入れて、高洋に見せる。高洋は高岳を呼び付けて詰問する。高岳は全面的に否認する。

高洋は高帰彦に毒を渡し、高岳に吞ませろと命じる。

「これを吞めば家は潰れずにすみます」。

高帰彦は養父に強要して死なせる。

楊情は、保身にただ汲々とするだけの賤しい人間であると蔑まれた。

* * *

高洋は常に酒浸りで、重要な案件を楊情が奏上している間も半眼でうつらうつらしている。

「その話はまだ続くのか。糞がしたくなかった。まだ終わらぬのならついて来るがいい」。

高洋は厠に行き、楊情の前に尻を突き出して脱糞する。

「あれで尻を拭え」。

かたわらの糞べらを示す。楊情が後ろから尻に当てると、高洋の体がびくんと動く。

「何をした。見ろ、血が出たぞ。朕の体を傷付けおって。先生も同じのように血を出すがいい」。

馬の鞭を取って打ち付ける。衣が血で染まる。

「糞べらをよく洗っておけ。先生は難しい学問はわかって、糞べらの使い

方を知らない。今度までによく練習しおけ。話はそれからだ。

高洋は廁を去り、楊愔は水場に行つて糞べらを洗う。

一人の護衛兵が手を差し伸べ、

「そのような不浄なものは、このあつしにお任せください。」

「これはお上のお言い付けなのだ。私がしなければならぬ。」

「お偉い大臣様のなさることではありません。大臣様にはもつともつと大切な御用がございましょう。」

楊愔は兵士の顔を見る。

「ああ、君であつたか。確か娥永楽（が えいらく）と言つたか。」

兵士はぎよつとし、

「大臣様は人の名をよく御存知であると伺つておりましたが、まさかこんなあつしまで。」

「文襄皇帝様が難に遭われた日、君は双堂の門の前に立っていた。どうして忘れようか。その前には、君は、左手の指が三本欠けた劉爺さんと一緒に狗

の肉を市場で売っていたのだろう。」

「まさかそこまで御存知とは。」

「国というものは人がいて成り立つ。人それぞれに存分に働いてもらわなければ国はよくならない。そなたのことを記憶しておくのも、国ために私がしなければならぬ役目であるからだ。」

「人それぞれが存分に働くとおっしゃるのでしたら、いよいよ大臣様は糞べらなどを洗っているべきではありません。それはあつしがします。」

娥永楽は楊愔から糞べらを奪い取る。

楊愔は悄然として、

「私の仕事とは何なのであるうか。」

「それをあつしにお尋ねになるのでしようか。」

娥永楽は洗い終わった糞べらを突き出す。

「私の仕事は何であるのか私がわかっていなければいけない。」

「あつしもそう思います。あつしはあつしの仕事をするだけです。」

* * *

楊愔は国家の財政状況を高洋に説明している。高洋は半分眠っていて、大欠伸をし、

「次々にそれだけの数字がよく並べられるものだ。先生の腹のなかには、ごろごろとたくさんの数字がころがっているのではないのか。そうか、そうに違いない。先生が他の人と違って立派なのは、先生のお腹になかには人とは違う何かが入っているのだ。どうしていままで思い付かなかったのだろうか。いますぐに確かめてみなければならぬ」。

高洋は小刀を持って来させ、楊愔に腹を出せと言う。

崔季舒が、

「楊愔殿は痩せておられますから、お腹に穴をこじあけて蠟燭の芯を立てても火を付けることはできませんでしょう」。

「ほう、それは董卓（とうたく）のことか」。

後漢の末の軍閥の首領の董卓は都に乗り込んで暴虐を窮めた末に側近に殺

された。董卓の腹は尋常の太鼓腹ではなく、芯を立てて火を付けると、腹の脂肪で三日間燃え続けたといわれる。

「楊愔殿の家には書物の他には何もないと聞きます。いくら書物を読みましても董卓のような大きな腹にはならないのございます」。

「そうであるか。芯を立てるのなら、朕の腹の方がまだしもにましか」。

高洋は自分の腹を出してぽんぽんと叩き、

「この程度では裴讓之にも及ばない。董卓にまでなるのはまだまだだ」。

大いに笑って急に真顔になり、崔季舒に向かって言う。

「朕と董卓とどちらがより暴虐であろうか」。

崔季舒の顔が青ざめる。軽口をもって楊愔を救おうとして、己の方に回って来てしまった。

高洋は小刀の先を自分の腹に向け、

「この董卓をいっそ殺してしまおうか」。

高洋は刃先を腹に立て、

「そなたは医術に詳しかったな。人の腹のなかには何があるのだ。腹で人は考えるというが、朕は一度、戦場で働きの悪かった者の腸を引き出したことがあった。あんなぐちゃぐちゃとして得体に知れぬもので何が考えられるのか。所詮、人とは下らぬものだ」。

高洋は小刀を投げ、酒を求めて行ってしまう。

崔季舒は汗を拭い、

「今日こそは棺のなかにおさまって帰るのではないかと、そんな思いで家族と毎朝の別れをしてここに参るのです」。

崔季舒は、しばらく前に高洋に次のように言われていた。「三台宮殿の工事もかなり進んで来たが、どうも気ならぬ。高隆之がもしも生きておったならば、随分と趣向を凝らしてくれたであろうと思うと残念でならない」。美鬚髯公の高隆之は己を美々しく飾るだけでなく、建物や街を美しく飾ることにも意を注いでいた。高隆之を除くように高洋に進言したのは崔季舒だった。

崔季舒は、これからは医術に専念したいと申し出て、朝廷の重職から退く。

楊愔は高洋にある重要な案件を説明している。高洋は例によって酔眼朦朧である。

込み入った事情を縷々説明する楊愔の口角に泡がたまる。

高洋は目を開き、

「誰ぞ、おらぬか。いや朕がして進ぜよう」。

やおら立ち上がり、楊愔の口元を拭う。

「涙が垂れていると朕に言った奴がいた。涙ぐらい何だ。皇帝の前で、口につばきを溜める大臣がいるのだ」。

高洋は、楊愔の唾液の付いた自分の拳を見つめ、それをそのまま楊愔の顔面に食らわす。また拳を見つめもう一発。今度は力が倍だ。さらに三倍になって楊愔は床に転がる。高洋は殴り続け、床の血の池ができる。

「朕は先生を死なせた。師を殺した重罪人だ。姉さんに謝りに行かねばならない」。

* * *

高洋は棺を用意させて楊愔を納め、車に載せて自ら曳く。

高洋は宮城を出て、都大路を哭しながら楊愔の屋敷に向かう。町の人々は楊愔が死んだと聞いて驚き、道に出て皇帝の声に合わせて哭す。哭声が都に響き渡る。

高洋は、姉の太原公主の前に手を付いて謝る。呂律が回らず何を言っているのかわからない。

太原公主が棺の蓋を横にずらして夫の顔を見る。楊愔はまだ息をしている。高洋はそれを聞いて狂喜する。あたりを踊り回り、姉の前にひれ伏して、必ず酒を止めると誓う。

楊愔は怪我のためにしばらく病臥する。

* * *

皇帝は酒から離れられず、楊愔が伏せている間に、酒乱に荒淫が合わさって恐るべきありさまになる。

高洋は、兄の高澄の妻であった元氏を臥所に召す。魏の皇帝であった元善

見の妹である。元氏は高洋に従う。

爾朱栄の娘を召す。かつて魏の皇帝元子攸の妃として皇后となり、後に高歡の後室となった女性だ。高歡の死後は婁皇太后に仕え、望んで尼となった。爾朱栄の娘は高洋を拒み、斬り殺される。

李皇后の妹を召す。高元昂（こうげんこう）の妻であつて、高元昂は高洋と同族である。妹は皇帝に従う。妹は姉よりも美人で、高洋は大いに気に入る。後宮に召し入れるから承服せよと夫の高元昂に言う。高元昂が即答しないので鎗矢で射る。百本あまりの矢が立つて高元昂は針鼠のようになる。

李皇后は高洋に言う。

「私は死にます。それで妹を皇后になさつて下さい」。

李皇后は食を絶つ。

二度と顔を見ないと云っていた婁皇太后が自ら高洋のもとに行き叱り付ける。高洋は母の足にすがつて泣き、酒を断つと誓う。

李皇后の妹は、かろうじて命をとりとめた高元昂のもとに返される。

* * *

楊愔はなお全快には至らないが、無理を押しして宮中に参内する。

その朝に、太原公主が言う。

「お上は、大変なお苦しみを抱えていらつしやるのです。そのことを、先生だけはおわかりになって下さい。どうかお願いします」。

宮中に行くと、高洋が走り来る。

「先生がいらつしやらない間に朕は駄目になってしまいました。先生のお顔を見て、朕は生まれ変わったように感じます」。

高洋から酒の匂いは消えている。

いつものとは逆に、高洋の方から、楊愔が休んでいた間の国政の状況を説明する。簡潔で的を射ている。楊愔の目に涙が滲む。

仕事を終え、宮中より出て、自分の馬が曳かれて来るのを待っていると、糞べらを洗ってくれた娥永楽が歩み寄り、地にひざまずいて回復したことを賀す。そして身を寄せ声を潜めて言う。

「大臣様にもしものことがあったならば、あつしらは都から逃げてしまおうと、仲間と話しておりました」。

「仲間とは誰のことかい」。

「この宮城の守備についている者たちです」。

「逃げてどうするのかい」。

「わかりません。大臣様がいらつしやらなくなつたら、どうせこの国はおしまいなのですから、どうなるのかなんて、全くわかりはしないのです」。

「私一人がいなくてもこの国はどうこうするものではない。実際に私が伏せていた間も国は何ともなかった」。

「それは大臣様が伏せておられても生きておられたからです。大臣様一人に民は望みを繋いでいるのでございます」。

「私はそのようにされるほどの人間ではない」。

「いえ、大臣様は他の方とは違うのです。あの人もそのよう言っていました」。

「あの人とは誰かい」。

「あの日、裸足の大臣様を背負って門の前まで走って来られた人です」。

「君は話をしたのか」。

「大臣様がなかに入られると、あの人は戻って来られ、あつしの顔をじっと見て、『いまのあのお方を必ずお守りするのです。あのお方はこの天下にただお一人のお方なのです』とおっしゃいました。そのときは妙なことを言う人だと思っただけだったのですが、いまはまさにその通りであると思つています」。

* * *

楊憎が再び宮中に出るようになってから、これまでになく長く高洋は酒を辛抱した。それが一カ月になろうかというところまでついに途切れ、反動であるろうか、以前よりもさらに恐ろしいことになる。

酒宴の最中に、高洋は韓哲（かんてつ）という者呼び付ける。韓哲は恐る恐る高洋の前に出る。

高洋はうつろな目を向け、

「おまえはなにに來た」。

「お呼びでございましたので」。

韓哲は泣くような声で答える。

「そうか。朕が呼んだのか」。

韓哲は身を縮める。高洋は周りを見て、

「こやつを何の用で呼んだのか、誰ぞ知っているか」。

皆はうなだれて関わりを持つまいとする。

「誰も知らぬのか。そうか、それならそれでいいだろう。用がないのなら、

もう下がっていい」。

韓哲はほっとした顔で下がろうとする。

「いや、待て」。

高洋の顔が急に真赤になる。

「朕は皇帝である。用もなしに人を呼ぶことなんぞがあるうか。用がないということとは、おまえそのものが要らないということだ。思い出したぞ、おま

えを呼んだのはおまえを殺すためだった」。

その言葉が終わる前に、高洋は韓哲に一太刀浴びせる。韓哲は転げ、血を流しながら逃げようとする。高洋は追い、滅多斬りにする。

その日から、高洋は酒宴で必ず人を殺すようになる。あるときは刀で斬り、あるときは槊で刺し、あるときは矢で射て殺す。様々な道具を用い、殺しただけで終わらず、手や足を細かくばらばらにし、火に入れ、あるいは水に投げ入れる。

この蛮行を命をかけて止めようとする楊愔に太原公主は言う。

「先生のお命は先生お一人のものではありません。先生が再び棺にお入りになり、あのときと違って息を吹き返さなかったならば、この国は終わりです。

この国の民は明日よりどのようにして生きていけばよろしいのでしょうか」。楊愔は、死刑が決まった囚人を宮中に置き、高洋が人を殺そうとするところを供するようにする。運よく三カ月の間殺されなかった者は特に赦して解放する。

このような皇帝の行状を強く諫める文書のある者が差し出す。

「この愚か者は偉そうに朕にものを言うのか」。

高洋は怒って殺そうとする。

楊愔は言う。

「この者の望みは殺されることにあります。お上を諫めて死に、それによって後世の名を残そうというのです」。

「暴君を諫めて殺された者は史書に燦然と名を残すという訳か。そうはさせてやらぬぞ」。

高洋はその者をかえって褒める。

* * *

高洋も稀には機嫌よく酔う。

「何もせずこうしているのもなかなか楽しくものだ」。

麗らかな陽光を浴びて高洋は陶然としている。

鄭頤、燕子献、それに劉桃枝が近くにいます。その三人だけなら、高洋の上

機嫌は長く続いたのだろうが、このときは楊愔に加えて王絃がいた。

「今日は大いに楽しいぞ」。

高洋の述懐に、王絃は、

「大きな楽しみがあれば、大きな苦しみもございましょう」。

低く、しかし、誰もが聞こえるような声で言う。

高洋はそれに注意を向ける。

「何か言ったのか。言いたいことがあるれば、何でも言うがよい。朕は今日はおとなげに心地がよい」。

王絃が進み出る。

「昼も夜も呑み、朦朧としている間に、国が減んで、我が身も失ってしまふ。それを大きな苦しみと申します」。

高洋は目を剥き、

「こやつは誰であったか」。

楊愔が静かに告げる。

「王絃にございます」。

高洋はじつと見据え、

「ああ、王絃であるか。兄上が賊に殺されたあの日、一人だけ賊と戦つてくれたのがそなたであった。この王絃こそは命を惜しまず戦つてくれる者だ。大きな苦しみから朕を救ってくれる男だ。それに引き替え、先生は何をなされたのか。裸足でお逃げになった」。

高洋は甲高い声で笑い、

「今日の楽しみは終わりだ」。

ふいと姿を消す。

* * *

ある日、高洋は酔つて恐ろしい形相で中空を睨み、盃を投げ捨てる。

「魏収を呼べ。すぐにだ」。

魏収は飛んで来て高洋の前に身を小さくして畏まる。

「朕はこれより宇文泰を討ちに出る。あやつがまだいると思うと酒の味もわ

からない。宇文泰を討伐する詔を書け。歴史に輝く立派なものを書け。いますぐにだ」。

魏収はその場で墨をすって書き上げる。

高洋は朦朧とした目で眺め、

「先生、読んで下され」。

楊愔は朗々と読み上げる。

「よいぞ。名文である。これで宇文泰の奴も自分の所業を恥じて恐れ入るに違いない。將軍どもに出陣を命じろ」。

高洋は高焄彦を呼び細々と指示し、すっかり上機嫌になって寝てしまう。翌朝になると、高洋は忘れていて、出陣の件は誰も口にしない。

別の日には、高洋は酔って咽び泣く。ひたすら泣いて、突然、絶叫すると、「いつになったら宇文泰は朕の命令を聞くのか。誰ぞ奇策はないのか」。

高洋は見回し、応じる者がないので、劉姚枝を呼ぶ。

「おまえなら何とかしてくれるか。どうだ」。

劉姚枝は後ろに控える楽隊に合図を送り、

「それがしが三千騎を頂戴できますれば、これより長安に馬を走らせまして、たちまち宇文泰を捕え、この酒宴が終わります前にここに連れ帰り、酒の興に添えて踊らせてみせましょう。ほれ、このようにであります」。

劉姚枝は音楽に合わせて滑稽な仕草で踊る。

高洋は手を打って喜び、

「こやつに褒美を出してやれ」。

劉姚枝がさらに踊り続けるのを、趙道德（ちょうとうとく）とうとうとうとうという者が苦り切った顔で、

「やめよ、やめよ。こやつ、劉姚枝めを妄言を吐いた咎で罰しなければなりません。我が国と、かの西の国とは、昨日今日のことでなく、長く強弱が釣り合って今に至っております。もしかの国の者を我等がやすやすと擒にできるのならば、かの国の者も我等をやすやすと擒にできましようぞ」

高洋は真赤に上気して趙道德を睨む。趙道德は湛然としている。

高洋は一度立って、また座り込み、

「わかつておる。わかつておる。朕はわかつておるのだ。あやつとは父上のときより互いに戦って勝負がつかなかった。父上に及ばぬ朕がどうしてあやつに勝てようか。朕はいつまでも安心できぬ。これは朕の負った宿命なのだ。

趙道德が申したことを常に肝に銘じなければならぬ」。

高洋は滴り落ちる汗を拭い、劉姚枝に与えようとした褒美を趙道德に与える。

さらに別の日に、高洋は鄴城の外で宴席を張る。馬を走らせ、眼下に川を臨む急峻な崖の上に立つ。

「朕はここを駆け下りる。誰ぞ続く者があるか」。

趙道德が轡に飛びつく。

「朕の邪魔をするのか。斬るぞ」。

高洋は刀を振り挙げる。

趙道德は言う。

「斬られても恨みません。地の下に行き先帝に申し上げる所存です。『臣はとうとう暴れ馬を調教することができませんでした』と。」

「何と言った。暴れ馬だと。朕は暴れ馬なのか。」

高洋は刀を投げ捨て、馬鞭を趙道徳に向け、

「よろしい。朕をこれで調教せよ。かつて父上が暴れ馬を御したように。」

趙道徳に馬鞭を渡すと、高洋は鞍を蹴り、

「あの者が朕を打とうとしておる。逃げるに如かずだ。」

馬を走らせてそのまま城に帰る。

またある日には、高洋は酒席で殺人を嗜み、意を決つして李集（りしゅう）という者が諫める。

「お上は古の桀（けつ）や紂（ちゅう）のようであります。」

桀も紂も古代の最も有名な暴君である。

高洋は李集を縛って川辺に連れて行く。氷が流れる寒い日である。

「あやつを水のなかに置け。」

李集は川の流れにしばらくさらされてから引き上げられ、

「朕のどこが桀や紂に似ているのだ」。

李集は謝り、

「桀や紂などには決して似ておりません。陛下はその遙か上でございます」。

高洋は大笑する。

「そうか、朕は桀や紂を凌ぐのか」。

李集をまた水に沈め、しばらくしてから引き上げる。

李集は水を吐き、高洋は同じことを尋ねる。李集は同じ答えをする。

高洋は笑いながら、李集をまた水に入れる。何度繰り返しても李集の答え

は同じである。高洋は笑いが止まらず、李集は赦される。

* * *

ある朝早く、高洋は晋陽に行くために宮城を出る。楊愔を初めとして都に残る人々が門の外に並んで高洋を見送る。

高洋は皇帝の輿より降りて楊愔の前に立つ。高洋は昨夜の酒のまま酔

っている。かつてない形相で人々を睨むと、騎兵を呼び集める。

「この者どもを四方から囲め。嚴重に囲め。それから稍をなかに向ける。朕が馬鞭を挙げたら、即座に突いてかかるのだ」。

騎兵は命令通りに百官を囲む。かつて爾朱榮は当時の朝廷の主だった者二千人をこのようにして殺した。

高洋は馬に跨り、鞭を手にする。酔眼朦朧として体が前後左右に揺れる。鞭は不規則に上下する。高洋以外の全ての人は息を殺してじつと動かない。じりじりと太陽が昇って行く。

高洋は鞭を落とし、大きく目を開け、

「喉が渴いた。少し潤して来よう。このまま待っておれ。動いてはならぬぞ」。

高洋は宮殿に戻り、そのまま寝てしまう。目を覚まして水を求めたのは日が中天に達したころ。

「皆が恐怖に耐えず、死んでしまいそうとのことにごぞいます」。
水を差し出しつつ一人の黄門郎が恐る恐る言う。

「死んでしまいそうだと何だ。つまり、まだ死んでおらぬということか。あくまでも手間をかけさせる度し難き連中だ。朕はあの連中をもう見放した。勝手にさせる。」

高洋は再び門から出ると、百官には目もくれずに、兵士を連れて晋陽へと発つ。

魏収は楊愔に言う。

「これで二度、生き延びました」。

高洋が都を去ると百官は心の底からほっとする。高洋が晋陽にいる間は不条理から解放される。

* * *

高洋が都にいてもいなくても、高洋が酔っていてもいなくても、国家の運営は楊愔が万事遺漏なく執り行つて滞ることがない。楊愔が特別な地位にあるのを、百官の多くは、皇帝の姉婿であるからだ、妬ましく見ている。

源子恭が死ぬ。

楊愔にとって親代わりとあっていい存在であった。源子恭からの書簡があったから田横島を出た。源子恭は、楊宝猗を初めとして一族の生き残りを匿ってくれていた。

太原公主が言う。

「このまま皆様が都と一緒に暮しになるのでよろしいのでしょうか。」

楊愔の屋敷には孤児となった楊一族の者が多数いる。楊愔は、一族の皆が顔を揃えて食事をするのが一門の大切な伝統であることを話す。

「まことに申し上げにくいのですが、集まっておられたからこそ、あのよう
な悲劇となつたのではないでしようか。」

楊愔は太原公主の勧めに従い、楊宝猗も含めて順次皆を都の外に出す。と
くに一人を選んで父楊津の肖像画の置かれた寺のある町に行かせる。

* * *

天保七（五五〇）年八月、宇文泰が死ぬ。息子の宇文覺（うぶん がく）が継ぐ。

まだ十五歳で、国に行く末に不安を抱いたのであろう、西魏から北齊へと幾

人かの者が寝返る。

北斉は西魏に対してやや優位に立つ。

西魏は国の求心力を保つために北斉と同じ道を歩む。宇文覺が皇帝になり、国号を周とする。歴史上はこれを北周と呼ぶ。かくて北中国は北斉と北周の対峙する時代となる。

天保八（五五七）年、高洋が即位してからずっと豊作が続いていた北斉が初めて天災に見舞われる。甚大な蝗の害に、一転して飢饉の恐れさえ出て来た。

高洋は群臣に尋ねる。

「蝗はどうしてこの国に害をなすのか」。

崔叔瓚（さい しゆくざん）が答える。医術に専心するようになった崔季舒の兄だ。

「その時でないのに大きな土木工事を行いますと、天は蝗の害をもつて戒めると聞いております。外では長城を築き、内では三台宮殿を築き、両者がなお完成を見ずに続いておりますのは、あるいは時を得ないということである

のではないでしょうか。

「成程、そなたの言う通りであろう」。

劉桃枝を呼び、崔叔瓚を殴らせ、気絶させる。

高洋は崔叔瓚の髪を掴んでずるずると床を曳き、

「こやつを蝗どもに食わせてやれ。こやつを生贄にして蝗に詫びる証としよう」。

高洋は皇帝として天を祀って蝗の害を止めようとする。天災に対処するのはそのような手段しかない。

高洋はふとあることを思い出す。父の高歓は、天の定めを非常に強く気に掛け、占いを信じた。晋陽のある術者が「高氏を滅ぼすのは黒衣の者でありましょう」と言ったのを終生氣に病んだ。道で黒い袈裟を来た僧を見るのも嫌い、高歓が外に出るときは、あらかじめそのような者がいないよう先触れが出るほどだった。

高洋は晋陽に行った折に、易者に尋ねる。

「世の中で最も黒い物は何であるか」。

「漆でございましょう」。

その答えに高洋は胸を突かれる。

「どうしていままで気付かずにしたのか」。

漆（しつ）の読みは七に通じる。兄弟の七番目が「黒衣の者」であろうと高洋は考える。それは異母弟の高渙（こうわん）かんである。高歡（こうかん）は生前、まだ幼いながらも高渙は自分に最も似るとして特に可愛がっていた。実際に成長するにつれ、高渙は勇武の才を現し、すこぶる評判がよい。

高洋は、地方に出ている高渙を都に呼び寄せ、自分も都に向かう。高渙は危険を察知し、南朝に逃げようとする。途中で掴まり、都に送られる。

高洋が都に着くと、たまたま二歳下の異母弟の高浚（こうしん）も居合わせる。かつて高澄の前で高洋が涕を垂らしているのを注意した弟だ。高浚も評判がよく、青州刺史としてよくその地を治め民衆から慕われている。近頃は、酒を慎むよう高洋にしばしば手紙で助言している。

高洋は、酒宴に高浚を呼んで隣に座らせる。高洋はすこぶる機嫌がよい。酒が進むと、例によって衣類を脱ぎ捨て、裸になって歌う。

「皇帝ともあろうお方が、そのお姿ではいけません」。

高浚は兄に服を着せようとする。

「そうであった。よくぞ言ってくれた。立派な弟の前でこの醜態はいけない。朕は皇帝である。しっかりしなければならぬ。どうだ、今日は、浚は垂れてはおらぬか。よくみてくれ」。

高洋は弟の前に顔を突き出して、鼻先を捻り、

「浚は大丈夫のようだが、小便が垂れそうだ」。

高洋は前を押さえてふらりふらりと厠に行く。

高浚は楊愔を呼び寄せる。

「先生はいつもこうしてただ見ておられるだけなのですか。どうしてお諫めしないのですか」。

厳しい口調に楊愔は謝る。

その袖を鄭頤が曳く。

「大勢の人が見ています。大臣としての禁を犯したと、誰かに告げられては一大事となりましょう」。

大臣は皇帝の許しなく皇族と言葉を交わしてはならない。それははなはだ厳格な決まりである。

楊愔は厠に行き、出て来た高洋に、高浚と言葉を交わしたことを告げる。

高洋は舌打ちし、

「興が失せた。酒宴は終わりだ」。

ふいと行つてしまう。

高浚は青州に帰る。

それを待つていたかのように、高洋は高浚を獄に入れる。

高浚は、兄に手紙を送り、酒を止め、無実の弟を赦すよう言う。

「朕はあやつの声を直に聞きたい。墨で書いた字では、大して心に響かぬからな。高浚を呼べ」。

高浚は病気と称して青州を出ない。高洋は兵団を送り、高浚を収監して都に連行する。青州の民は泣いて高浚と別れる。

高洋は、鄴の北城に深い堅穴を掘り、そこに鉄の籠を吊り下げ、高渙と高浚を閉じ込める。食べ物や飲み水を時々上から降ろす。大小便は籠のなかに垂れ流しである。

* * *

ある日、高洋は、切れ者の高德政がいる場で、剛直一徹者の杜弼について語り出す。

「思えばこの国がここにまでなったのも杜弼がいたからではなからうか。杜弼は誰に対しても恐れずにものを言う。杜弼がいなければ、正しいことも曲げられて、この国はかつて爾朱氏が身勝手をしていた時代と同様のことになっていたかも知れぬ。杜弼の言うことは常に正しい。朕が皇帝になろうとしたときに杜弼は強く止めた。あれこそが正しかったのではなからうか。朕が皇帝になっっていなければ、この国はもっとよくなっていたのではないのか。」

諸君等はどう思うか」。

返答する者はいない。

高洋は続ける。

「朕は即位してすぐのころに、国を治めるにはどのような者を使つたらよいのかと杜弼に尋ねた。答えは明確であった。鮮卑は車馬の客、治国には漢人を用いるべきだと。杜弼は常に正しいことを言う。だから、朕はその通りにした。鮮卑が外で敵と戦い、漢人が内で国を治める。それが魏の時代からの定めだ。冬に杜弼が都にいて火で温められた部屋で筆を動かしている間に、朕は凍り付いた大河を渡つて敵と剣を交えて戦つた。夏に杜弼が都にいて涼しい風に吹かれて詩を吟じている間に、朕は灼熱の砂漠を越えて敵地に入つて矢の降るなかを駆けまわつた。戦争は朕の仕事、治国は杜弼の仕事だ。朕は戦場において老い、戦場において死ぬ。我が父上はそのようにして一生を終えた。朕はそのことを十二分にわきまえている。杜弼は常に正しいことしか言わぬ。諸君等に何か異論があるか」。

高洋は異様な目付きで人々の顔を順に見る。

高德政は、杜弼も老齡であるから、そろそろ重い職務から解放して、地方でのんびりさせてはどうかと言う。

高洋は表情を緩め、

「あれの厳しい顔が見られなくなるのは寂しいが、あれのためにはそうしてやるのも悪くはあるまい」。

杜弼は膠州（こうしゅう）に出される。

高德政は以前から杜弼と競うことが多く、常に杜弼の雄弁に負けてしまうので、煙たくてならなかった。

* * *

ある日、高洋は急に怒りを発し、朝廷に並ぶ立派な官人を奴隸の身分に落とし、

「生かすも殺すもおまえの好きにしてよい」。

と、ある近習に下げ渡す。

奴隸になるとは、財産も家族も全て失い、生殺与奪の権は持ち主の手にあるということになる。

その場に居合わせた鄭頤が、いつか自分もそのようになるのではと怯え、王昕に尋ねる。

「朝士を奴隸にしたようなことが昔もあったでしょうか」。

王昕はかつて邢邵の身を覆って救った義侠の士である。王昕は冷ややかに答える。

「論語に『箕子(きし)は奴(こ)となる』とありましたな。論語はお読みになっておられましょう」。

王昕は、鄭頤の学問が少々怪しいのを皮肉り、かつ、鄭頤がいつも高洋に近くにいなながら酒を止めるよう一度も忠言していないのを強く批判したのだった。

箕子は暴君の紂を諫め、聞き入れられず、自ら奴隸の姿となって逃れた。

孔子は箕子のその行為を褒めた。

鄭頤、燕子獻、それに楊愔の三人は、朝士の間ではなはだ評判がよろしくない。三人とも高洋を全く諫めないからだ。

鄭頤はむつとして、秘かに高洋に告げ口する。

「王昕はお上を桀にたとえて言いふらしています」。

楊愔はそつと王昕に気を付けるよう告げる。

その後の宴席を王昕は欠席する。

「王昕がおらぬようだが、今日はどうした」。

高洋の問いに鄭頤が妙な調子で答える。

「聞く所によりますと、何と申しますか、病で伏せておるとか、左様なこともなくはありませんでしょう」。

「病か。それはいけない。どのような病なのか、これから見舞ってやろう」。

高洋は直ちに馬に跨り、王昕の屋敷に乗り付ける。

皇帝の出現に驚く門衛を制止し、音もなく屋敷内に入る。

王昕は庭に出て、膝を抱えて一人吟詠している。

「病気で伏せているのではなかったのか」。

高洋は一刀のもとに斬り殺す。

* * *

蝗の害の次は旱魃だ。

高洋は雨乞いをする。天に祈るのは皇帝の大切な仕事だ。雨は降らない。

高洋は怒って祠を壊す。

三台宮殿がようやく完成する。大規模な祝賀の宴が開かれる。普段は酒宴には呼ばれない弟の高演もこのときばかりは列席する。

高洋は大酔し、戯れに人を殺す。高演は盃を遠のけ、兄の所業に背を向ける。高洋は目敏くそれを見て、

「おまえは何をしている。これは祝宴であるぞ。なぜ背を向ける。楽しそうにしる。そのような仏頂面をしていたのでは朝臣どもが困るではないか」。

高洋の怒声に、滑稽を得意とする高湛と高湜の二人の弟が間に入って取り繕うとする。

高演は二人を押しやって前に出て、

「兄上はどうしてこうなのですか」。

兄の顔を見上げ、言葉を詰まらせ、地面に伏せて泣く。

「おまえは兄のこの姿を嫌うのか」。

高洋は顔を真っ赤にする。

高湛と高湜が、戯言を言つて二人の間に入ろうとする。高洋がその二人を

蹴る。

「おまえたちはあつちに行け。朕は悲しんでいるのだ。朕は弟を泣かせた。

弟は朕の所業を嫌っている。朕も我が所業を嫌う」。

高洋は盃を地に叩き付ける。

「朕は弟に嫌われたくない。朕は今日限り酒を止める。これから朕に酒を勧

める者はただちに斬つて捨てる」。

その日をもつて宮中より酒に関わるものが全て棄てられる。

禁は十日ともたない。

高演はもう一度兄を諫めようとする。王晞（おう き）が止める。王晞は王昕の弟で、高演の学問の師友である。

高演は制止を聞かず、兄を強く諫める書をしたためる。

高洋は酔った状態で高演を呼び付ける。

「よく見ろ。おまえの兄はこの体たらくだ。情けないか。朕のこの姿を見て、おまえはまた泣くか。悲しいであろう。朕はどうしようもない兄だ。おまえはこの兄とはまるで違う。大した弟だ。こんな馬鹿なことは決してしない。誤ったことは何一つとしてしないのだろう。大したものだ」。

高洋は劉桃枝を呼び、

「あの連中をここに来させろ」。

十人ばかりが連れて来られる。高演はそれを見てぎよつとする。

高演は厳格な性格で、自分に対しても厳しいが、下の者に対してはなおのこと厳しい。わずかな過ちも許さず容赦なく罰を与える。連れて来られたのは高演から重い懲罰を受けた者たちだ。

高洋は劍の先を向け、

「おまえたちに聞く。朕はこの弟に本当に何一つとして誤りがないかどうかを知りたいと思っている。演に悪いところがあるのならば残らず言え。言わぬと斬るぞ」。

高洋は一人一人を劍で脅し、皆は身を震わせる。しかし、誰も一つも挙げない。

高洋は劍を投げ棄て、

「さすが朕の弟だ」。

全員に褒美を与えて解放する。

ある日、高洋は酔って怒りを発し、

「王晞をここに連れて来い」。

高洋は、弟が諫言の書を記したのは王晞が教えたためではないかと疑っている。

楊愔は、王晞はひどい傷を負って半死半生でとてもここに来られる状態では

はないと告げる。

「王晞に何があつたのか」。

高演の怒りに触れて杖で二十回打たれたと聞き、

「どうも弟は厳格すぎる。程を知らぬ。王晞は自分の先生ではないか。何があろうとそこまではならぬ」。

王晞は二年間の労働刑ですみ、命は助かる。

ある日、高洋は高演の姿を見ていきなり逆上する。

「おまえはいつたい何者だ。その口で何を言いたいのだ」。

弟に掴みかかり、口に拳を食らわす。弟が倒れると、靴で口を踏みにじる。

高演はその日から絶食して死を求める。

婁皇太后は、

「もしもこれで演が死んだら私も死にます」。

と、日夜泣き続ける。

高洋はそれ聞いて狼狽し、冷水を頭から何十杯も浴びて酔いを醒まし、自

らの体を馬鞭で罰してから高演を訪ね、

「どうか一口でいいから食べてくれ。王晞はおまえのもとに返す。酒も止める」。

兄が涙ながらに言うので、弟も泣いて、ついに粥を口にする。

高洋は狂ったように喜ぶ。

しかし酒は止められない。

高演はもはや諫めることを断念し、なお苦言を呈するのは、崔暹と高德政だけになる。古くから忠誠を尽くすこの二人の言うことは高洋も耳に入れる。

高演は崔暹に言う。

「弟でありながら、何も言えず、君に恥じます」。

* * *

皇太子の高殷はかつての高洋に似る。

十五歳になろうというのに、母や女官に甘え、大人の男達の前ではおどおどしてまともにもものが言えない。父にはいつも怯えた顔を見せる。

「あれは母親の性質を受け継いだ。朕に似るところは一つもない」。

ある日、高洋は息子を処刑場に連れ、

「やってみろ」。

息子に剣を渡し、死刑囚の首を斬れと命じる。高殷は顔色を変え、助けを求めめるかのように視線を周囲にさまよわせる。

父の再三の命令に、剣を落とし、ひと声叫んでしゃがみ込む。高洋は怒って馬鞭で息子を打つ。高殷は気絶する。

この日を境に、高殷は人前で決して顔を上げず、激しい吃音症になる。

「あのさまでは国を引き継げない。演に位を伝えるのもやむをえないである」。

高洋はそのようなことを口にする。

魏収が漏れ聞き、慌てて楊愔に相談する。

「皇太子は国の根本であります。一度決めたら動かしてはならぬものとされています。動かしたがために国が乱れた例は数多くあります。お上があつたよ

うにおっしやったのでは臣下が動揺します。戯れのお言葉でないのなら直ちに実行しなければなりません。そのときには、忝くも皇太子様をお導きする役目を授かっております私は責任をとって死にます。私の死などはもの数でもありません。国の乱れを恐れるばかりです」。

楊愔は魏収の思いを高洋に伝える。

「先生方のお命は何ものにも代えられぬ」。

高洋は皇太子の件は二度と口にしなくなる。

* * *

天保九（五五八）年十二月、ひどく冷たい風が強く吹く日に、高洋は鉄籠に閉じ込めた二人の弟を思い出す。

「この寒さだ。あの二人に酒でも呑ませてやろう」。

弟の高湛を伴って地下牢のある北城に行く。

穴を覗き、吹きすさぶ風に身を竦ませ、

「ここに二人がいるのか。ここに二人を閉じ込めたのか。朕は何という兄な

のだ」。

穴の底に向かって叫ぶ。

「朕である。寒かろうと思つて酒を持って来た。体を温めるがよい。安心せよ、毒などは入つておらぬ。朕が先に呑んでから降ろす。湛も呑む。兄弟四人で呑もうではないか」。

高洋と高湛が口に含んでから、酒の瓶を籠に入れて降ろす。

高洋は床几に腰掛け、

「どうだ、呑んだか」。

耳を穴に向け、返事が戻つて来ると、盃を重ね、古い詩を低く詠じる。兄弟の仲のよさを言祝ぐ内容だ。

「どうだ、この詩を兄弟四人で歌おうではないか」。

高洋が歌うと高湛が和し、地下から二人の弟の細い声が聞こえて来る。

高洋は涙を流し、

「あの二人を赦そう」。

鉄籠を引き揚げるよう劉桃枝に命じる。

数人の兵士が鉄の鎖を引く。高湛がそわそわし始める

鉄籠の上部が見えて来ると、高湛は劉桃枝の腕を掴み、高洋に向かって言う。

「虎を穴より出してよいものなのでしうか」。

「ほう、虎であるか。虎か」。

穴のなかより、

「歩落稽（ほらくけい）よ、天がそなたの振る舞いを見ているぞ」。

高渙の声だ。

歩落稽とは高湛の幼名で、鮮卑族としての呼び名だ。すでに二十二歳の高湛はそのように呼ばれるのを好まない。高湛は、昔から籠のなかの二人の兄弟とそりが合わない。

高湛は息せき切って言う。

「あの二人がどのような者であるのか、お上は最もよく御存知ではありません

んか」。

「おまえはあの二人を恐れるのか」。

高洋は気味悪く笑うと、劉桃枝に命じて鉄籠をさらに引き上げさせる。

高湛は両腕を挙げて叫ぶ。

「どうかお止め下さい」。

高洋は立って鉄籠の方に顔を寄せ、

「さあ、ここに懐かしい弟が出て来るぞ」。

その言葉に合わせるかのよう、鉄籠がぐいと上って、二人の顔が現れる。

「おお、二人がおったぞ。ああ、こんな嬉しいことはない」。

外界の光に、籠のなかの二人はすぐには目を開けられない。

「おまえたち、朕の顔を見たくないのか」。

高洋は槊を鉄籠の隙間にぐいと刺し込む。高浚の悲鳴が上がる。

「殺せ」。

劉桃枝に槊を渡す。劉桃枝は一瞬のためらいの後に槊を突き入れる。

「もつとだ」。

鉄籠に赤いしぶきが飛び、二人の弟は狭い籠のなかで逃げ惑う。

「落せ」。

鉄籠は再び地下深くへと落ち、二人の弟は天の非道を叫ぶ。

鉄籠が底に達して地が揺れる。高洋は体を震わせ、

「何という寒さだ。酒だけでは足りぬな。弟達を温めてやろう」。

火のついた薪を穴に投げ入れさせる。炎が高く立ち昇る。

「こうなつては熱すぎるだろう。火を消してやれ」。

今度は土石を投げ入れさせる。

「もうよかろう。二人を上げてやれ。朕はあの二人が好きだ。赦してやるこ

とにした」。

炭になった二人の遺骸が鉄の籠から引き出される。

* * *

天保十(五五九)年、元旦の朝儀が終わると、高洋は楊愔に言う。

「朕は己の全てを変えたい。それができなければこの国は亡びる。三日経ったら見に来てくれ」。

高洋は甘露寺に籠る。

言い付けられた日に行くと、高洋は暗い小部屋の奥にいる。国政について報告をしようとすると、

「それは結構です。私は皇帝であることを忘れているのです」。

高洋の声は穏やかである。

「先生もお隣に。どうか何もおっしやらないでいて下さい」。

無言のままに半日を過ごす。

「先生はそろそろお帰りになられるがいいでしょう。国は先生を必要としています。私はここにこうしています。三日したらまた来て下さい」。

その日に行くと、同じ小部屋でまた同様に過ごす。

「三日したらまたお越し下さい」。

次もまた同じだ。

「このようににしていると何もなかった昔に戻れるような気がします。三日したらまたお越し下さい。」

次もまた同じで、

「いまのまま少し保てるのならば私きつと変わるでしょう。ここが大切です。誰も来させないで下さい。三日したらまたお越し下さい。」

その翌日に崔暹が死に、その次の日に、楊愔は弔問のために崔暹の屋敷を訪ねる。門より入ろうとして突き飛ばされる。脇を猛然と駆け抜ける男がいる。高洋だ。

崔暹の妻が転げるようにして皇帝を出迎える。

高洋はしたたかに酔っている。

「おまえの夫は大した人物だった。立派な夫が死んで、おまえはさぞかし歎き悲しんでおろうな」。

「切に夫を偲んでおります」。

「朕も偲んでいる。できれば会いたいと思う。しかし、この体たらくでは会

えない。崔暹は酒を止めるよう再三朕に言ってくれた。何たるさまだ。おまえも夫に会いたいと思うか」。

「望んで叶うものであれば」。

「ならば叶えてやろう。いまずぐに会いに行け」。

ばつさり首を斬り落とし、髪を掴んで塀の外に投げ棄てる。

* * *

四月としては蒸し暑い日に、高洋は鄭頤、燕子献を相手に朝から呑んでいる。

「朕の朝廷にはいろいろな者がいるが、崔暹の代わりになる者はいない。あれは何も恐れず、言うべきことは必ず言ったものだ。あれはどのような隠し事も全てお見通しだった。あの目で見られるとぎくつとしたものだ。我が朝廷を見回して、朕が恐れるのはあと杜弼と高德政くらいか。そういえば杜弼はいまどうしているのだ。近頃あの顔を見ていない気がする」。

「膠州におられます」。

「そうであつた。膠州では仕方ない。では、高德政を呼ぶか。あれも怖い男だ。朕のこのざまをあれに見せるとしよう」。

高洋はさらに呑み続け、酩酊したところに切れ者の高德政が来る。

「おお、来てくれたか。朕はいま杜弼を懐かしんでいた。杜弼はとにかく口うるさくてかなわなれないと思つていたのだが、いまになってみると、杜弼が言つた通りに行つていればよかつたとの後悔もある。朕が皇帝になろうとしたときに、平都城で杜弼は強く反対した。杜弼に従つていれば決してこのようにはならなかつた。桀や紂だと言われることもなかつた。しみじみ杜弼が懐かしい。なぜあのころ、そなたは朕を皇帝にしたがつたのか。あれはどういうことだつたのだ」。

高洋の声に怒気が籠り、高德政は努めて平静に答える。

「陛下が御位にお就きになられたのはひとえに天の巡り合わせにございませぬ」。

「天である」と。

「天の声もございましたし、全ての占いが吉と出ました」。

「杜弼は天の定めに逆らうようなことを言ったのか」。

「あの者は誰に対しても憚ることなくものを言います。天にも逆らいましう」。

「それは面白い。杜弼をここに呼べ。天にどのように逆らったらいのか教えてもらおうではないか」。

「あの者はいま膠州におります」。

「わかっておる。そなたが膠州に行かせたのだろう。それで、あれは膠州で何をしているのだ」。

「悠々と詩を詠じ、得意の釈迦や老子を論じて大いに悦に入っていると聞きます」。

「遠くから朕のこのざまを嗤っているのであろう。よいぞ、好きだけ嗤うがいい。無性に杜弼が懐かしい。あの顔が見たい。いますぐに見たい。そうだ、顔だけでいい。直ちにここに持って来い」。

高洋は剣を高徳政に渡す。

数日して、高洋は珍しく政務に励み、その合い間に、楊愔に向かつて言う。

「そろそろ杜弼も都に戻してやるか。あの者の説法もたまには聞かないと寂しい」。

楊愔は驚き、

「先の御命令をお取消しになりませんと」。

すぐに高徳政が呼ばれて来て、

「お上の剣を膠州に送らせてございます」。

「それはいけない。止めろ」。

急使を走らせるが、杜弼はすでに斬られた後。

「高徳政にまんまとしてやられた。あれは昔から杜弼が嫌いだつた」。

高洋の怒りを見て、鄭頤と燕子献は、しばらくの間は皇帝の前に姿を見せない方がいいと高徳政に忠告する。高徳政は病気を理由に屋敷に籠る。

しばらくして、高洋はぼそりと楊愔に言う。

「高德政の病気は長いようであるな。あれは余程悪いのか」。

「都から離れた土地で療養させてはいかががでしょうか」。

「そうだな。思えば雀暹も病気で死んだ。都にいては何かと気詰りであろう。あれには治ってもらわねばならない」。

冀(き)州刺史に任命する辞令を楊愔が記し、皇帝の裁可を経てすぐに高德政のもとに届ける。

高洋は酒宴で、ふと盃を置き、

「そうか、高德政は冀州に行つてしまふのか。当分は会えなくなるな。よし、今から見に行こう」。

すぐ馬を走らせ、驚く門衛を制止し、屋敷のなかに入る。

高德政は勇ましい姿で家人を指揮して荷物の整理をしている。

「何だ、元気にしているではないか。病気ではなかったのか」。

突然の皇帝の声に高德政は狼狽を隠せない。

「今日ばかりはたまたま気分がよく、辞令を頂戴してぐずぐず都に留まつて

いては不忠であろうと、このようにしておりました」。

高德政は袖を下ろし、腰をさすり、中腰になって額を抑える。

「成程、やはり病なのであるな」。

「何と申しますか、常に全身がだるくて、今日は幸いと起きていられますが、普段はずっと床についていなければなりません」。

「それはよくないな。朕には鍼の心得がある。崔季舒に教わったのだ。そなたの病を診てやろう。そこに横になれ」。

皇帝がひどく酔っているので、高德政は青ざめ、まさしく病人のようになり、震えながら言われた通りにする。

「あいにくと鍼の持ち合せがない。俗に大は小を兼ねると言う」。

高洋は小刀を出し、

「頭が痛いのか。ならば病の元はここであろう」。

刃先で高德政の額を突く。高德政は唸り声を上げる。

「どうだ、痛いか。痛いくらいでなければ効き目がない」。

「全身がだるいと言っておったな。血の巡りが悪いのであろう」。

胸を突く。悲鳴を上げる高徳政の体を劉桃枝が押さえ付ける。

「痛いか。効いて来た証拠だ」。

さらに腹を突き、下腹部を突き、

「病の元は頭から足へと下がって行つたぞ。それをすっぱり断ち切つて棄てやろう」。

高洋は大刀を取り、高徳政の足を切断しようとして手元が狂う。

「後はおまえに任せる」。

劉桃枝は床に突き刺さつた大刀に手をかける。

「早くやれ。ぐずぐずすると、おまえの頭を先に落してもいいのだぞ」。

劉桃枝は大刀を持ち、高徳政の足の指先を切り落す。

「何だ、たったそれだけか。それでは病の元がまだ体のなかに残つていそいで心配である。が、今日のところはそれくらいでいいだろう。これで治らぬようならまた治療に来てやる」。

高洋は立ち去る。

高德政は傷の手当てをし、妻と相談して、婁皇太后や李皇后や皇帝の親類縁者の助けを借りねば生きられまいと、庫から各種の宝物を取り出して、どれを誰に届けるかという品定めをする。

そこに再び高洋が現れる。楊愔が同行し、高德政を赦すためであったのだが、所狭しと置かれた品に目を注ぎ、

「これは何であるのか。国の庫にもこれだけの物はない。どこから手に入れたのだ。何も知らぬと思っているのか。わかっている、元一族からの贈り物であろう。おまえを大事だと思うから、これまででは知らん顔をしていた。賄賂好きのおまえは、賄賂好きの誰かに贈って命乞いをしようとするのか」。

高德政夫婦は地にひれ伏し、震えるばかりで何も言えない。

「これを見てしまったからには、もはや知らん顔はできない。先生もそう思われますでしょう」。

高洋は楊愔に顔を向ける。

「嚴正に取り調べ、正しく手に入れられたものであるとわかれば、疑いは晴れましょう」。

高德政はその言葉にすがり付く。

「その通りにございます。何ら疑わしきことはございません」。

「そうでなくてはならぬ。どうしてここに並べてあるのだ」。

「冀州に持つて行く荷を選んでおりました」。

「さつきも荷の整理しておったな。初めからわかっている。一刻も早く冀州に行きたいのだろう。朕の近くにいたくないのだな。もともと仮病であったのだろう」。

高德政は言い訳を並べる。

高洋は大怒する。

「何というさまだ。情けない男だ」。

劉桃枝に命じて、高德政夫婦を縛り上げ、地に据える。

高德政は楊愔を見上げ、

「貴様のせいだな。その善人面で、邪魔になる者を幾人消したのだ。ついにこのわしだ。わしが死ねば貴様には恐れる者はもう誰もいない。貴様ほど汚い奴はいない」。

高洋はさら怒り、

「朕を欺き、その上、先生に対するその悪口、断じて許せぬ」。

高德政夫婦を自ら斬殺する。

* * *

高洋は、高德政に宝物を贈ったのが誰であるのか逐一調べさせ、悉く死罪にする。いずれも東魏の皇族元氏である。

その翌月、元韶に儒服を着て参内するよう命じる。元韶は高洋の長姉の婿で、宴席において婦人の服を着させられたこともあった。

元韶は儒者としてことさら慎ましやかに皇帝の前に現れる。高洋も礼儀正しく迎え、

「朕は皇帝として、治乱興亡の歴史をよく学ばなければならぬと思ってい

ます。今日は漢の興亡についてお教え願いたい」。

元韶は元来が学者であるから、喜んで答える。高洋の問いは、漢を起こした劉邦（りゅう ほう）に始まり王莽（おう もう）に及ぶ。王莽は劉氏から皇位を奪つて皇帝になり、国号を新とした。新は二十年余りで亡び、劉邦の遠い子孫である劉秀（りゅう しゅう）が漢王朝を再興した。

「漢が一度は命脈を断たれながらもその後に甦つたのは結局のところはどのようなわけであつたのでしょうか」。

どの問いにも滑らかに答えていた元韶が初めて言い淀む。

高洋は言う。

「王莽が劉秀を殺しておかなかつたからでしょうか」。

元韶は顔を歪める。

高洋は笑う。

「王莽は大悪人です。王莽が劉氏を根絶やしにしなかつたのを失策だつたとは誰も思いますまい。今日はいいい勉強をさせていただきました」。

高洋は鄭重に元韶を送り出す。

その翌日、元韶も含めて元氏の四十四の家の男子が全て捕縛される。元韶は地下牢で餓死する。

楊愔は、ついに天下を恣にする野望を抱くに至ったと憎悪された。

* * *

七月、高洋は晋陽に行く。婁皇太后以下の全ての近親者と、楊愔以下百官の主要な人々を連れて都を出る。

出発の直前に、都を掃除すると称して、元氏の七百二十一人を殺害した。

その死骸は都を南北に分けて流れる漳水に投げ込まれた。

晋陽へと進む道の途中で甘露が降る。甘露とは、地上に理想の天子が出現したときに天が降らす甘い液である。漢の武帝は、甘露を受けるために、巨大な銅柱の承露盤を都に建てた。

この吉祥を賛美する頌歌を朝臣が競って作る。それらを一つにまとめ、序文を邢邵が記す。頌歌集を皇帝に献上すると、邢邵は檻樓をまとって姿を消す。魏収は史書の編纂が大詰めであることを理由に都に残っている。

晋陽に着くと、高洋は、かつて少年時代を過ごした部屋に楊愔を呼ぶ。

高洋は榻(ながいす)にもたれかかり、顔色は悪く、声も優れない。数年にわたる酒びたりの末に、晋陽に来てからはその酒さえも体が受け付けなくなつた。

「今日は、昔ここでして下さつたように、もう一度先生に教わりたいと思つています。」

諸葛亮の『出師表』(すいしのひょう)を読んでほしいと所望する。

諸葛亮は、三国時代の蜀の初代皇帝劉備(りゅうび)の死後、二代皇帝劉禪(りゅうぜん)に仕えた。宿敵である魏との決戦に出るに当たって、劉備から受けた恩に何としてでも報いようとする思いを籠めて、諸葛亮が書いたのが『出師表』である。これを読んで涙を流さない者は不忠の人であると言われ

る。

楊愔は『出師表』を読み上げる。高洋は榻の上で目を閉じて聞く。

楊愔の講義が終わると、高洋は李皇后を呼ぶ。楊愔は席を避けようとする。

「どうかそのままここにいらして下さい。先生と皇后の二人に話したいのです」。

楊愔は隅に下がって李皇后を正視しないようにする。

高洋は言う。

「人には必ず死があります。生への執着は朕にはありません。死を恐れず戦場で戦つて来ました。いまはさらに我が生を惜しむ気持ちは皆無です。しかし、朕は皇帝です。我が事だけではすみません。父上と兄上から受け継いだこの国の行く末を気にかけないわけにはいきません。朕はもとより父上にも兄上にも遙かに及びません。それでも、父上の子、兄上の弟として生まれたからには為さなければなりません。この部屋で、先生は呉の孫権を教えて下さいました。そのときはよもや自分が孫権のようになるとは思つても

いませんでした。時の巡りなのでしよう、天は朕を見逃してはくれませんでした。朕は朕なりに努めました。しかし、朕にはできないことでありました。史書には、桀や紂の上を行く暴君であったと必ずや記されましょう。いまさら弁明はしません。朕は間もなく死にます。重荷から解放されて楽になります。しかし、父上と兄上が作り上げようとした国があります。そこに生きる民がいます。朕はそれを考えないではいられません。皇太子にできるでしょうか。あれは善良な子です。普通の人の家に生まれていけば、あれはあれでそこそこに立派な人間として生きて行けましょう。しかし、あれは皇帝にならなければならぬのです。先生は家族の和を教えて下さいました。父上の仕事を兄上が継ぎ、兄上の仕事を朕が継ぎました。家族の和はそこまではどうにか守りました。これからはどうでしょうか。皇太子が継ぐには演が必ず邪魔になりました。演が継ぐには、皇太子よりもむしろ弟達が邪魔になりました。朕は昏迷の余り二人の弟を殺しました。朕はすでにこの手で家族の和を壊しました。和はひとたび壊れたならばどこまでも壊れて行ってしま

うのでしょうか。朕はどうして父上の子として生まれたのでしょうか。皇太子はどうして朕の子として生まれたのでしょうか。皇帝になって以来、朕には一日も休まる時がありませんでした。死に物狂いで一日駆けてへとへとになっても、それはたった一日なのです。何千日も続けなければならないのです。朕は皇帝です。不安など抱くのは許されません。朕には不安に打ち勝つ強さがあります。自ら昏迷の深みへと落ちて行くしかなかったのです。朕は全てをなくしてしまいましたと思いましたが、人が朕を憎むのならば、より壊しやすくなります。最後は、朕は己を壊す以外になくなりました。ただ、朕のことを誰かにわかってほしいとも思っていました。朕は弱い人間です。結局は二人だけでした。皇后と先生です。わかってくれるのはそれで十分です。正直言つて二人を憎んだこともあります。しかし、二人はこの朕を憎みませんでした。先生を棺に入れたとき、都の民衆は心の底から泣き叫んでいました。朕が死んでもあのようにはしないでしよう。朕は猛烈に先生を妬みました。しかし、民のために先生はいなければならぬのです。先生はほか

の人々とは違います。朕は間もなく死にます。この国の将来と、皇太子を先生に託します。いまの朕の心は劉備と同じです。劉備は、死に際して諸葛亮に言いました。皇太子が皇帝にふさわしくないのならば、自ら皇帝になってくれと。朕も同じことを言います。どうか先生よく聞いて下さい。皇太子の殷が皇帝にふさわしくないのなら、先生御自身が玉座にお座りになって下さい。民のために先生が理想とする国を作って下さい。父上も兄上も、自分達の興した事業が先生の手によって結実するのなら必ず喜びましょう。朕のいまの言葉が真実であることの証人はこの皇后です。朕が死んで殷が皇帝になれば、皇后が皇太后になります。皇太后の命令で、皇帝を廃したり、立てたりした例は過去にいくらでもありません。先生が皇帝になるのを妨げるものはないはずです。皇帝とは何であるのか、朕はずっと考えて来ました。父上は終生皇帝になろうとしませんでした。武力で天下を抑えることはできても、皇帝になるには足りないものがあると考えていたのでしよう。皇帝になるべき人とは、天が選び、民が望む人です。諸葛亮はまさにそのような人でした。

しかし、そのような人ほど、自身は皇帝になろうとはしないのです。諸葛亮は皇帝にならず、二代皇帝劉禪が愚かであったために、蜀は滅びました。我が齊の国はその轍を踏んではなりません。朕は、先生が諸葛亮と同じであろうとするのを何よりも恐れます。天下のために先生は必ず立派な判断を下さい。そうなれば姉上は再び皇后になれます。姉上は誰よりも皇后にふさわしい女です。朕の真の願いはむしろそこにあると言ってもいいでしょう」。

高洋は榻より下り、皇后と楊愔の手を執り、

「人は死ぬ前に真実を言うと言われます。これが朕の真の心です」。

* * *

十月、楊愔、燕子猷、鄭頤、高帰彦の四人が李皇后に呼ばれる。御簾の内に皇后と皇太子の高殷がいる。

「どうかこれよりお心を合せてこの太子を盛り立てて行って下さい」。

高洋が死んだ。三十一歳。皇太子は十五歳。

高殷がもしも強固な意志を持つ少年であるのなら、自身で政治を執り行

うのも不可能ではない。李皇后が、かつての馮太后や胡太后に少しでも似るのならば、皇太后として国家に君臨することも可能である。燕子獻、鄭頤、高歸彦の三人のなかに権勢欲に長けた人物が一人でもいるのならば、これを好機と見て、李皇后と皇太子を我が意のままに操ろうと考えるであろう。

全てがそうではないことから、楊愔が、皇太子に忠誠を尽くすと応えて事が定まる。

「私たち母子をどうかお守り下さい」。

李皇后の声は悲愴である。

楊愔は、葬儀および新皇帝が即位するまでの段取りを李皇后に告げる。

「万事お任せします」。

一瞬の一分の隙が大事を招きかねない。事を運ぶのは楊愔一人。四貴は一人も残っていない。崔悛も陳元康も杜弼も高德政も崔暹も裴讓之も死んだ。邢邵も魏収もいまここにいない。

皇帝の死を発表する。群臣は建物の外に出て一斉に哭す。皆は大声で泣き

叫ぶが真に悲しむ者はいない。酒乱の皇帝が先に死んで自分がまだ生きていることに喜びを覚えない者はいない。楊愔だけが真実の涙を流す。

皇帝の遺詔によつて、皇帝の柩の前で高殷が皇帝になる。

楊愔は肅々と事を進め、晋陽では何の混乱も生じない。都に人を派遣して百官を動揺させないようにし、全土に新皇帝の詔を発する。大赦令を出す。北魏の皇族で死を免れて奴隷の身分に落されていた者を解放する。長城建設を始めとする大土木工事の全てを止める。

婁皇太后は皇帝の祖母として太皇太后に、李皇后は皇帝の母として皇太后になる。

太原公主が楊愔に言う。

「後悔は誰にでもありましょう。私たちはお上のお心をどれだけわかってたのでしょうか。お上がお若くしてお亡くなりになったのは私たちのせいであつたのかも知れません。太皇太后様も、お上のお酒を止められなかったことを悔やんでおられます。私がいま心配しておりますのは、太皇太后様の悲

しみがお怒りに変わり、高陽王様にそれをぶつけられるのではないかということですよ。

高陽王とは高洋の異母弟の高湜だ。高湜は、酒席ではいつも高湛とともに高洋の近くにいた。高湛は婁太皇太后が生んだ子だ。高湜が無闇と酒を勧めたのが皇帝を酒乱にした一因だと婁太皇太后は思っている。酒席において高洋は兄弟や親族に対して怒りを発すると、必ず高湜に杖や馬鞭を渡して打たせた。高湜は高洋を喜ばせるために、いかにも嬉々としてそれを行っていた。

新皇帝の高殷は玉座にあつて、脇に控える楊愔に、ほとんど聞き取れないくらいのかすかな声を出すだけである。皇帝らしい威厳はかけらもない。皇帝になって以来、食事はわずかししか喉を通らない。北魏の屈指の名君であった孝文帝は馮太后を喪ったときに悲しみのあまり食事が取れず、楊椿が強く諫めた。楊愔が高殷を諫める役であるのだが、孝文帝にはもとから卓抜した才能が具わっていた。

翌年の元旦の朝儀は晋陽で行われる。新皇帝は玉座にあるだけで、万事を

楊愔が代わって行う。楊愔の声は穏やかであるが、人を畏服せしめるものがある。乾明と改元する。

新年の大事な儀式が終わると、婁太皇太后は高湜を呼び、ついに怒りを爆発させる。

「先帝に酒を勧めてその寿命を縮め、兄弟の仲を裂いたのはそなたである。そなたが杖を振るって兄弟あるいは親族を叩いたのと同じ数の刑をその身に受けさせる。そなたの犯した罪を償うがいい」。

婁太皇太后は大力の者に命じて高湜を叩かせる。百回を超え、その傷がもとで高湜は死ぬ。

楊愔は都への帰還を決断する。晋陽は北斉の最大の軍事拠点で、軍団の完全な掌握にはなお時間が必要であるのだが、皇帝たるものは都に帰らないわけにはいかない。

婁太皇太后は楊愔を呼ぶ。

「私の子は初めに十五人いました。そのうち六人が私が生んだ子ですが、他

の十一人と分け隔てをした覚えはありません。不幸にも、私が生んだ二人の子が上から順に死に、思いもよらぬことで他の子が三人も死にました。この上はもう一人も失いたくありません。子ばかりでなく孫、曾孫に至るまで皆が和を保つて行くことが私の望みです。どうか、この老婆の望みを叶えて下さるよう切に願います。国の事には口出ししないとお約束しました。それはいまも変わりません。ただ家族のことは別です」。

婁太皇太后は口には出さないが、自分が生んだ子である高演か高湛のどちらかが晋陽に残って軍団を指揮することを望んでいる。皇帝は若すぎる。皇帝の叔父が若い甥を盛り立てるのは家族の和の在り方として理想と言えるであろう。過去の歴史を見て、それで成功した例もある。

楊愔は、高演も高湛も含めて皇帝の親族を残らず新皇帝に同行させる。皇帝に付き従う兵団は高焜彦が指揮する。それとは別に五千の兵を楊愔は用意し、可朱渾天和（かしゅこん てんわ）に託し、道の途中に潜ませる。可朱渾天和は鮮卑系の武將で、楊愔や燕子献と同じく高歡の娘婿に当たる。楊愔は武將

との繋がりをはほとんど持たない。姻戚関係に頼るしかない。糞べらを洗つてくれた娥永楽を近くに置き、何かのときには可朱渾天和のもとに走らせようと楊愔は備える。

何事もなく都に到着する。高帰彦は、内緒で可朱渾天和を控えさせていたことを後で知り、楊愔を恨む。

* * *

新皇帝は都に帰つてからも、父を喪つた悲しみによるのか、皇位の重みによるのか、悄然として心そこにないありさまである。

婁太皇太后は孫が愛おしく、皇帝を自分の保護下に置いて、高演に支えさせようと考える。高演は宮城内に住み、朝臣はまず高演に奏上し、その上で皇帝の裁可を仰ぐという流れを作ろうとする。叔父と甥の麗しい連携である。二月、高洋は鄴の西北に築かれた武寧陵に葬られる。

高演は徐々に国政への関わりを深めようとする。兄の政治の晩年の乱れは正さなければならぬ。高演はそれだけにとどまらず、漢族士人主導で国家

を運営するという大方針をも改めようとする。これまで抑圧されて来た鮮卑系の勳貴を優遇しようとする動きに、晋陽の軍団は歓迎する。

それは楊愔の看過できるところではなく、高演を宮城の外に出す。燕子献は、婁太后も宮城の外に出すべきだと言う。楊愔は同意する。

楊愔は、停滞気味であった漢化改革を前進させようとする。第一に爵賞の整理に着手する。高洋は酒乱に陥ってから爵賞を乱発した。楊愔に対しても開封王という称号が与えられ、榮譽ばかりでなく土地や民も与えられた。爵賞は個人にとつては有難いものであつても国家にとつては利にならない。均田法の妨げとなる。楊愔は開封王の称号と土地も民も返上し、他の者も習うよう求める。高演は楊愔の方針に公然と反対する。高焄彦もそちら側にまわる。高焄彦は都の軍団の指揮権を持つ。

可朱渾天和は、大事に至る前に先手を打って、高演と高湛の二人を除くべきだと主張する。叔父と甥が血で血を洗う荒療治に楊愔は同意しない。

宋欽道（そう きんどう）という者が、高演と高湛を都から追放すべきだと、

直接皇帝に奏上する。宋欽道は、政治上の実務を教える教師として長く高殷に仕える人物である。皇帝が裁可すればすぐに命令が出せる詔の草稿を前に置いて皇帝に決断を迫る。皇帝はおろおろするばかりで、やつと、

「楊愔とよく相談しなさい」。

宋欽道は、楊愔、鄭頤、燕子獻、可朱渾天和と顔を突き合わせ、高演と高湛をこの都に置いては危険であると強く主張する。可朱渾天和はより強硬な意見だ。結論としては、高演と高湛を別々に地方の町に出そうということになり、皇太后の名をもって事を行おうとする。

楊愔が李皇太后のもとに行く。楊愔が奏上するのを、お付きの女官が立ち聞きする。李昌儀という。高仲密の妻となり、その美貌故に反乱が起こるという事態になった女性である。高澄が死んで行き場のなくなつたのを、同じ姓である李太后が憐れんで近くに置いていた。

李昌儀は婁太皇太后のもとに走って事を告げる。婁太皇太后はどのように聞いたのか、

「漢人の女が私たち家族を引き裂こうとしている」。

と、怒る。

楊愔は婁太皇太后に呼ばれ、協議の結果、高演を鄴に残し、高湛を晋陽に送るということになる。それに沿って皇帝の詔が作られ、ひとまずおさまる。

晋陽に行く高湛のために、高演の主催で送別の宴が開かれる。朝廷の主だった者が集まる。鄭頤は断る事由を作つて欠席し、楊愔にも行かない方がよいと言う。

「我等は皆国に至誠を尽くす者です。高演様も高湛様もお上の御命令を謹んでお受けになりました。お見送りするのが礼儀でありましょう」。

楊愔は宴席に向かう。

物陰からそつと男が出て来て袖を引く。娥永楽だ。

「どうかしたか」。

「御無礼をお許し下さい。事は急ぎます。二つに一つの御返事をお聞かせ願います。このあつしが必ずしもおおせて御覧に入れます」。

尋常でない様子に、人目につかぬ場所に移り、

「二つとは何と何であるか」。

「端的に申します。一つは、どうかよくお聞き下さい、この宮城のなかには、あつしが言えば必ず従ってくれる兵士が二千人以上います。決して失敗はしません。大臣様を陛下とお呼びする身にいたします。どうか天下に君臨するお方になって下さい。他のどなたよりもそれが民のためになります」。

「それはそなた一人の考えであるのか」。

「違います」。

「誰だ」。

「天下の民の考えにございます」。

「もう一つとは何だ」。

「二千の兵は要りません。私一人だけでいいのです。どうか私の背にお乗り下さい。大臣様を負って田東島に走ります」。

「それはそなた一人の考えなのか」。

「違います」。

「柏堂の門前で会った男に言われたのか」。

「違います」。

「誰なのか」。

「太原公主様です」。

「どちらも私にはできない」。

「御返事はそうであると、初めからあつしは思っていました。大臣様はそのようなお方です。あつしはあつしなりに事に臨みます」。

娥永楽は姿を消す。

宴席にはすでに大方の者が顔を揃えている。燕子献も可朱渾天和もいるが、それぞれ離れた席を用意され、言葉を交わすことができない。

宴が始まる。高演から順に盃が巡る。それぞれに送別の辞を述べる。楊愔の番となつて短い挨拶をして酒を干す。

「もう一杯いかがでしょうか」。

高演が言う。

「私だけが盃を重ねましては礼に失しましょう」。

「先生は特別なお方です。先の帝の師でありました。他の人と同じであつては、それこそが礼を失するといふものです」。

高演はもう一度勧める。楊愔はまた辞退する。

高演が三度目に勧める。それが合図とされていたのか、席より高埴彦が跳び出る。数人が続く。楊愔の体を抑え付ける。

「何をする」。

誰かが言う。

「王のお勧めでも盃を取らぬ非礼を許さぬのです」。

楊愔ははねのけようともがき、

「この私を殺そうというのか。天子を尊び、国に忠節を尽くして来たこの私を殺すのは、国に対する反逆であるぞ」。

楊愔の声に人々の力が一瞬だけ弱まる。

高演は座したまま、

「いやこれは酒興である。」

高湛が立ち、

「だめだ、もう始まったのだ。やるしかない。」

高帰彦の背を強く叩く。

男達は気を取り直し、楊愔を殴打する。可朱渾天和が救おうとするが、足を掬われ、殴る蹴るの仕打ちを受ける。燕子献は宴席から逃げ出る。

武将達の腕力は並外れている。楊愔の意識がたちまち遠のく。

耳に聞こえるのは竹の葉の音、あるいは海の波の音。

燕子献は逃げ切れず、宴席に出ていなかった鄭頤とともに捕らわれの身となる。

* * *

高演は手勢を率い、捕えた者を連れて、宮中に通じる雲竜門に押し寄せ、皇帝に会おうとする。皇帝の命令がなければ開けられないと門衛は拒む。気

の短い連中が矢を射る。

高演には、事態をどのように收拾するか十分な計画がなかった。

騒ぎを聞いた婁太皇太后が動く。皇帝高殷と李皇太后を連れて昭陽殿に臨み、雲竜門を開いて高演を召し入れる。

「婁太皇太后は高演に厳しく言う。

「おまえはお父上がお作りになった国を壊したいのか」。

高演は床に頭を打ち付けて詫び、楊愔が朝権を独占し、骨肉の争いを引き起こしたので、謀反人の一味を捕えたのだと言う。

「家族の和を何よりも重んじる楊先生がそのようなことをするはずがない。

おまえは、甥が皇帝になったのを嫉視し、反逆に及んだのではないのか」。

高演は縷々言い訳を並べる。

昭陽殿の外に関の声が上がる。宮城を守る兵士達が、反逆者を討つ命令を皇帝に求める。その中心に立つのが娥永楽だ。娥永楽が言う反逆者とは高演である。

「婁太皇太后は皇帝に問う。

「外ではあのように言い、内では演がこのよう床にひれ伏す。お上はこれをどうなさればよいとお考えですか」。

高殷は青い顔を伏せ、何も言えない。

婁太皇太后はもう一度問う。高殷は無言。

婁太皇太后は檀を降りて昭陽殿の扉の外に出て娥永楽を呼ぶ。娥永楽は階下にひざまずく。

「汝ごときの言に国は左右されたりしない。私が決める。勝手な口をもう一度きいたならばおまえの首を刎ねる」。

娥永楽は階下より遠く皇帝の顔を見ようとす。皇帝はうつむいたままだ。娥永楽は剣をおさめる。

婁太皇太后は檀上に戻り、高殷に問う。

「楊先生はいまどこにおられるのか」。

「罪はまだ定まりませんので、捕えて門の外に置いてあります。罪状が明ら

かとなれば必ず万死に当たりましょう」。

高演は楊愔の企てをもう一度述べようとす。

婁太皇太后は遮る。

「誰か楊先生の御様子を見て参れ」。

人を走らせ、それから皇帝に言う。

「お上は何をなさっていたのですか。このようなことが起こるまで何も知らずにいたのですか。楊先生に限つて、演が申すようなことはないと思ひますが。だが、他の者はわかりません。お上の二人の叔父が都を追放され、あるいは殺害されるような陰謀が巡らされていながら、何も知らずにおいていいものなのですか。まかり間違えばこの私にだつて及びかねないのです。臣下がよからぬことを企んでいたならば、皇帝たるものは厳しく罰しなければいけません。いいですか、それは相手が叔父であつても同じです」。

婁太皇太后の言葉に高演は平伏し、自分には怪しい意図は一切ないと言おとする。婁太皇太后は叱り付ける。

皇帝は深くうなだれて無言のまま。

「お上は皇帝です。もっとしつかりしなければいけません。お上の祖父も伯父も父も、そのようではありませんでした。どうしてお上はそのように押し黙ったままでおられるのですか」。

皇帝はぼろぼろと涙をこぼす。婁太皇太后もそれを見て泣く。

「この婆はお上のことをよくわかっております。お上は優し過ぎます。一人の孫としては愛おしくなりません。しかし、お上は皇帝なのです。どうかもっとしつかりして下さい。お上がこごも軟弱であるのはやはりこの漢人の母のせいであるのだろうか。実に情けない」。

李皇太后は床に伏して謝る。

婁太皇太后は首を振り、

「ああ、何もかもが情けない。我が一家に限って家のなかにもめぐとはないと、ついこの間まで信じていました。家のなかでごたごたを起こしたならば爾朱氏と同じです。我が一家は家族の和を何よりも大切にするので。それ

を楊先生が教えて下さり、亡くなった夫も常々それを大切にしていました。皆もそのことはよく知っておろう。だから、この婆は、誰にも悪気はないと信じたのだ。そうであろう」。

高演は頭を床に叩き付けて皇帝に陳謝する。

婁太皇太后は、

「ほらあのように謝っているのを見て、お上は何か思わないですか。叔父上に言うことがありませんよう」。

皇帝は母に助けを求め。

李皇太后はその耳もとにささやき、皇帝は天井を凝視して、叫ぶようにして言う。

「朕は国家の安泰こそを第一に考える。ときに、叔父甥の間であつても、国のために処罰を下せねばならないこともある。いま朕と叔父上の間には何らのわだかまりもない。朕を惑わす者がいたのである。叔父甥でも処罰をためらわぬのであるから、まして他の者の命を惜しむものではない。処分は叔父

上のよきに任せる。繰り返し言う。いま朕と叔父上の間には何らのわだかま
りもない。朕はこの檀より下ることにもためらいはない。そのことも叔父上
にお任せする」。

高演は頭を床に叩き付けて皇帝への忠誠を誓い、

「これより謀反人を処分いたします」。

言葉が終わらぬ先に、昭陽殿より駆けて出る。

婁太皇太后は首を傾け、

「果たしてこれでよかったのだろうか」。

そこに楊愔の様子を見に行った者が戻る。

「どうであつたのか」。

「なおかぼそい息は通じておりました。一眼が飛び出し、この夜を過ぎすの
は難しかろうと存じます」。

「一眼が」。

婁太皇太后は愴然と涙をこぼし、

「ああ、いけない、楊先生を死なせてはならない。演を呼び戻せ」。

人を走らせる。

入れ違いに高演が戻って、全ての犯罪人の処分を終えたと告げる。

「止めに行かせたのに、間に合わなかったのかい」。

婁太皇太后の問いに高演は平伏したまま答えない。

皇帝は唸り声を上げ、頭を抱え、壇上をうろろくと歩き出す。そして、震える声で言う。

「亡き帝のおっしゃった通りに楊先生がなさっていればこのようなことにはならなかったのです」。

「お上はいま何をおっしゃったのか」。

婁太皇太后が問う。

李皇太后は皇帝の腕を取り、

「それだけはおっしゃってはなりません」。

婁太皇太后は李皇太后を遮り、

「私がお上に尋ねているのです。亡き帝は何をおっしゃったのですか」。

皇帝は勃然と言う。

「こんな私などが皇帝にならずに、楊先生がなっておられたらよかったです」。

婁太皇太后は立ち、李皇太后の肩を掴む。

「先の帝がそれを望んだのかい」。

李皇太后は首肯する。

「この老婆にはそこまで考えが至らなかった。それを知っていたら、このようになくことには決してならなかった。齊の国を万世に伝える手立てをみすみす失ってしまった」。

* * *

婁太皇太后は秘かに太原公主を訪ねる。

「この世に二人とはいえないそなたの夫を死なせてしまったのを詫びます。これがせめてもの私の心です」。

婁太皇太后は楊愔の眼窩に金の義眼を納める。

楊愔は五十歳であった。

* * *

その年の八月、婁太皇太后は高演の強い求めに屈し、高殷を皇位から降ろし、高演を皇帝にする。婁太皇太后は皇帝の祖母から母に戻り、再び皇太后になる。李皇太后は文宣皇后と呼ばれる。

婁皇太后は、高演に対し、皇位を降りた高殷を決して殺してはならないと厳命する。高演は即位から一年後に秘かに高殷を毒殺する。その一カ月後に、高演は獵に出て馬から落ちて背骨を折る。婁皇太后は病床の高演を見舞い、高殷の所在を二度問う。高演は目を閉ざし、答えられない。

「やはりおまえが殺したのだな。あれほどしてはならぬと母が言ったのを聞かなかったのか。おまえなど我が一家の者ではない。勝手に死ぬがいい」。

婁皇太后は高演とは二度と会わず、怪我がもとで死んでも葬儀に出ない。

高演は二十七歳だった。

弟の高湛が次の皇帝になる。婁皇太后はそれから半年ほどで死ぬ。この先も生きていたならば、家族の和が史上例のないほどまでに無残なありさまとなるのを見なければならぬところだった。

北斉の四代目の皇帝となった高湛は、三人の兄の欠点だけを余さず受け継いでいた。高演が兄の息子の高殷を殺したのに倣って高演の子を殺し、高洋が兄の高澄の正室を乱したのに倣って文宣皇后李氏に迫る。李氏は拒む。「朕に従わなければおまえの子を殺す」。李氏には殺された高殷の他にもう一人高紹徳という子がいる。李氏は子のために高湛に従い、妊娠する。李氏はそれを恥じ、高紹徳とは会わないようにする。高紹徳は扉の向こうで母に言う。「母上がどうして会って下さらないのか私にはわかっています。おなかが大きいのを知られたくないのです」。李氏は女子を産み落とすものの、取り上げずに流す。高湛は怒り、「朕の子を殺した代わりに、おまえの子を殺す」。高紹徳を殺害する。李氏が泣くと、高湛は激昂し、裸にして鞭打ち、血まみれになった体を袋に詰めて溝に棄てる。町の人が引き上げると、どうにか息

を吹き返す。李氏は妙勝寺に入つて尼になる。

高湛は即位から四年で皇位を幼い息子に譲る。自分の死後に、自分がしたように息子が殺されてしまうのを未然に防ぐとともに、太上皇帝となつて己の快樂を追求すること専心するためだ。高湛は荒淫が崇つて三十二歳で死ぬ。北斉の皇室の乱脈はその後も続き、承光元（五七七）年、宿敵の北周によつて滅ぼされる。高洋が即位してから二十七年目であつた。

妙勝寺にいた文宣皇后李氏は北周の都長安に連れられる。途中の華陰で楊家の陵に詣でて楊愔を偲び、さらに十年ほどで北周から隋へと世が代わると、李氏はようやく身の自由を得て家郷に帰る。生涯の最後は静かな日々を送る。

* * *

楊愔の死からしばらくして邢邵が都に現れた。太原公主の依頼で楊愔の詩文を収集した。

楊愔は謀反人として誅殺されたが、婁皇太后の意向によつて楊家は血脈を保たれた。太原公主は都を離れ、楊津の肖像画のある寺の近くに住まいを得

た。折々に寺に詣でて楊愔を偲んだ。

楊家は、楊愔が望んだように再び盛んになることはなかったが、一門の事績は魏収の編集した史書の内に残された。

邢劭は地方の町で病没した。虱を潰しつつ人と談論するのを最後まで好んだ。北魏の末から北斉に至る時代を回顧すると必ず話は楊愔に及んだ。

「私が親しくしたなかで最も優れた人物を一人挙げれば楊愔である。あの殺伐とした時代に、どうして楊愔のような者がいたのかいまでも不思議でならない。幻でも見ていたのかも知れない。天下にとつて楊愔以上に大切な者はいなかった。それなのに、楊愔は非業の最期を遂げ、しかも、亡くなった日に、たった一人の良き友、佳伴がいなかったのはどういう訳であったのだろうか」。